小大司樂部十年誌

華僑
圖書

北大文武會馬術部

十年誌

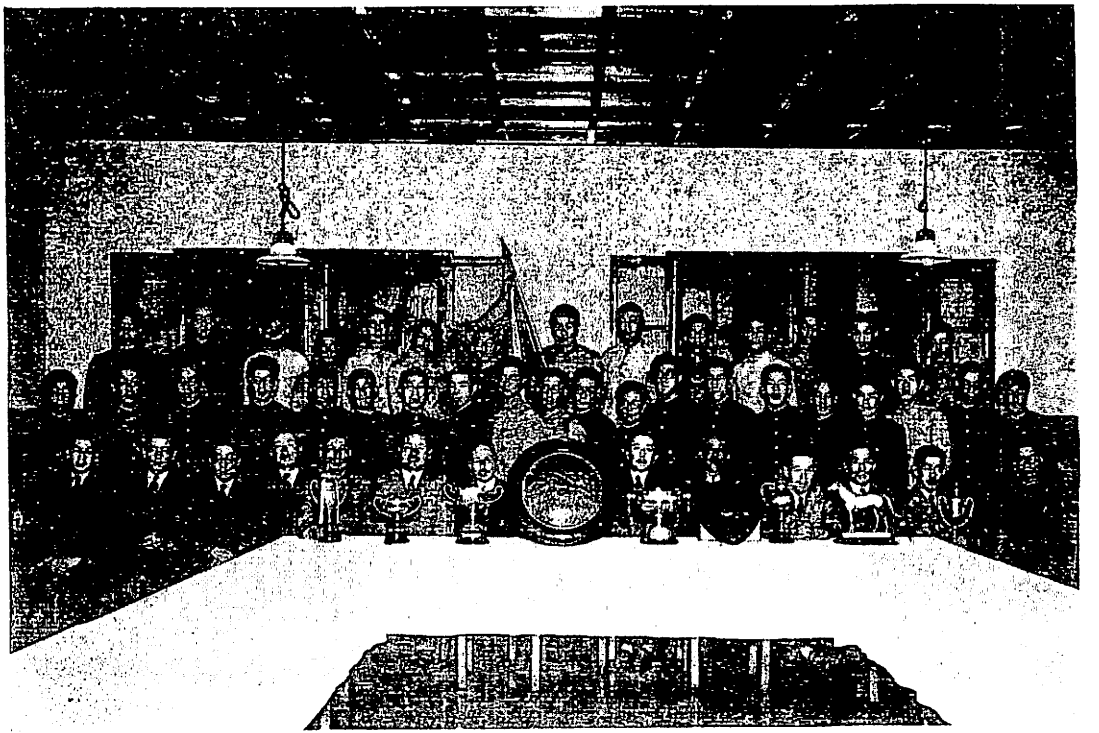
昭和十五年三月

北海道帝國大學文武會馬術部

寄馬術部

百般武藝各詩長
馬術出羈然策別鄉
一瞬一轍千里道
駿蹄能獨遙飛翔

永井一夫学



選手權優勝祝賀會
インターハイ

（昭和十四年九月）

馬術部十年誌目次

題字（表紙）……今總長
寄馬術部（漢詩）……永井一夫
寫眞

十年誌發刊に際して……部長　太秦康光……（一）
所感……文武會理事長　伊藤誠哉……（三）
祝意……第一代部長　永井一夫……（四）
希望……第二代部長　高松正信……（四）
馬術部の發展を祝す……第三代部長　黑澤亮助……（六）

北大乘馬會時代……半澤道郎……（八）
昭和五年度……同……（一一）
昭和六年度……同……（一九）
昭和七年度……同……（二二）
昭和八年度……植村勘一……（二七）
昭和九年度……高杉直幹……（三〇）
昭和十年度……吉見一郎……（三五）
昭和十一年度……滋賀秀明……（三九）
昭和十二年度……山下正亮……（四四）

昭和十三年度……池内武夫…(五一)
昭和十四年度……西村雅吉…(五六)
石川君を憶ふ……滋賀秀明…(六一)

第十一回全日本學生馬術選手權大會の想出……菅間威…(六三)
インターハイ記……福本途夫…(六五)

思ひ出を辿りて……松本久喜…(六九)
思ひ出すまゝ……半澤道郎…(七四)
思ひ出す儘に……東園基文…(七八)
回顧記……吉見一郎…(八一)
入部時代を顧みて……小田昇…(八三)
前進後退……西村雅吉…(八六)
櫻星會馬術部設立のことなど……小林誠平…(八八)
實科部員として……熊澤洸…(九〇)

對東北定期戰々績……(九三)
帝大聯盟戰々績……(九四)
インターハイ戰績……(九五)
モノグラム贈呈及授與者名簿……(九六)
ペナント贈呈者名簿……(九七)
編輯後記……(九八)

十年誌發刊に際して

部長　太秦康光

昭和十四年八月六日は我馬術部十年史上特筆すべき日であつた。この日のタイムスの朝刊は第十六回全國高校馬術大會第一日の戰績をさゝやかに傳へてゐたが、それによると我北大豫科軍は第四位で無事豫選を通過したといふのである。小さな活字の稍々もすれば見落しそうな記事ではあつたが、之で我々はまづホツと一息つくことが出來た。しかしながら今迄とても豫選には度々パスしながら惜しい所で敗れてゐるのであるから、まだ〳〵氣は許せない。戰績を見るに、昨年の優勝校成蹊が豫選に洩れたことは少しく意外であつたが、學習院、成城などといふ常連は不相變の優位を占め、第二日の戰が相當の接戰となるであろうことを物語つてゐるのである。その故に愈々決勝戰の行はれるといふこの一日はなか〳〵に氣の落ちつかぬ一日であつた。

夕方五時頃でもあつたろうか。東京から電報が届いた。

セイハナルゴコウエンヲシヤス

之を讀んだ瞬間の感激は筆紙に盡せぬものがあつた。日曜日であることも忘れて祝電を打ちに近所の郵便局に駈けつけたのであるから、餘程嬉しかつたに違ひない。夕食もそこ〳〵にもう一度本局迄出かけてヒツソリとした窓口に軍人會館氣付の祝電を差出して歸つて來ると、まるで待つてゐたように大通りのラヂオがスポーツニュースで豫科の優勝を放送してゐるのである。明るい氣持ちでそれにヂツと耳を傾けながらも、その近所には之を聽いてゐる人の一向にゐないのが妙に物足りなかつたことを覺えてゐる。

その晩は札幌には珍しい雷雨であつたが、その雨を冒して農學部の菅間君がやつて來た。同君の面上にも豫科軍の優勝を祝福する喜びが溢れてゐた。我々は豫科の人達の健闘を讃へ、この日の戰況を想像しながら、いろ〳〵と語り

合つたのであるが、話題は當然一週間先に催される所の全日本選手權大會に落ちて行つた。北海道地區からはたつた一人の出場なので少々心細いなどゝいふ言葉も同君の口から洩れたが、この日の高校戰の優勝は幸先のよい何ものかを暗示するようで、自分には快い期待さへ感ぜられたのである。奮鬪を誓つて菅間君が辭し去る頃には、もう雷雨も止んで澤山の星がチカ〳〵とまばたいてゐた。

それから丁度一週間、八月十三日の試合は果して再び我に幸した。一人で心細いといつた菅間君が二十人も出場する關東地區の選手達その他多數の强豪を一蹴して見事制覇を遂げたのであるから喜びは又大きい。自分が菅間君の御術をほんとうに知つたのは實は去る七月の帝大聯盟戰の時のことである。あの日始めて之は「恐るべき騎座」だと感心したのであつたが、今このすばらしい戰績を見るに及んで同君の馬術に更めて敬意を表すると共に、かゝる有能な選手を出し得た我部を祝福し、そしてそれの部長に就任後僅々數ケ月にして斯ういふめざましい機會に惠まれた自分の運のよさをつく〳〵感謝したのである。

話は少し遡るが、昨年の二月頃であつたと思ふ。前部長即ち黑澤教授から自分に對して馬術部長を引繼いではくれまいかといふお話があつた。自分はなる程馬は好きであるから馬のこととなれば決して勞を惜しむ譯ではないが、未だ到底部隊長といふ柄ではないから之はお斷りすべきだと考へたのであつた。けれども黑澤教授には所謂「三代目」の最も重要な部長の職を五年間も勤められて、御蔭で我部の基礎はゆるぎなく固まつてゐる。之だけの基礎が出來てをれば、もはや少しも心配する所はない筈であるし、それに同教授には軍用犬の方の御用なども益々增えて御多忙らしい樣子を見ると、無下にお斷りもしかねてとう〳〵部長就任をお受けして終つたのであつた。

さて部長の職に就いて見ると、早速今度の優勝に次ぐ優勝である。就任後唯の三ケ月では何う考へても新部長の誘導宜敷を得た結果などとはいへる譯もないが、我部が創立滿十年にしてこの赫々たる戰果を天下に誇示し得たことは何としても目出度いことに違ひないし、又之は太秦個人のことになつて恐縮であるが、自分が東大の學生として乘馬を始めてから滿二十年に當るこの年に、部長としてかやうな名譽を享受し得たことは、自分の乘馬二十年史を飾る上からも何よりのことゝして感激したのである。

所謂事の成るは成るの日に成るに非ずで、我部今日の榮冠も勿論遠くよつて來る所のものがなくてはならない。生

みの親、育ての親たる永井、高松、黒澤諸教授の熱心な御指導御誘掖は勿論のこと、之等歴代部長の下にあつて屢々と力めて倦まなかつた先輩部員諸君の精進が今日に至つて漸くこの輝しい實を結んだものであることは疑ひもないことであろう。この度馬術部十年史の編纂が企てられたについてはこの意味も多分に含まれてゐると思ふが、この機會に於て我々は之等先進が臥薪嘗膽の苦闘に對し、心からなる敬意を表すると共に、我部今後の飛躍に對し一層の御鞭撻御後援をお願ひする次第である。

所感

文武會理事長　伊藤誠哉

文武會には二十四といふ相當多數の部が存在して居り、しかもその各部が部員諸氏の活躍によつて夫々榮ある足跡を殘してゐることは誠に御同慶の至りである。その各部内に於ける馬術部は昭和五年の設立であつて茲に滿十年の歳月を閲した。それ故に其の年月としては決して長きを誇ることは出來ないが、然し其の歴史の光輝ある點に於ては學の内外共に認むるところである。殊に十二年の第一回全國帝大競技會に於て優勝し東久邇宮殿下賜杯を拜受した事などは大いに特筆すべきである。尚近き全日本學生選手權優勝、インターハイの優勝等實に輝しい成績を以て此の滿十周年の終りを飾つた事は誠に欣快これに過ぐるものがない。

時恰も吾邦は興亞聖業に邁進し、愈々益々人的資源の要望せらるゝ秋である。幸ひに當部が層一層隆盛となり、會員の心身鍛錬の上に大いに貢献せられんことを切に祈るところである。

祝意

第一代部長　永井一夫

馬術部が既に滿十年の歴史を閲して設立當初の豫想以上の發展を遂げ、新に昭和十四年度には豫科、本科の諸君共に學生馬術の最優勝の名譽を贏られた事は誠に御同慶の至であります。

この機會に馬術部が設立以來の歴史を記錄せられる記念誌を出される御計畫は眞に有意義の事と存じます。

馬術部がかくも大進展を遂げられた事は代々の部長殊に現部長太秦教授の並々ならぬ熱心な御指導と部員諸君の燃ゆるが如き向上慾に基づく演習の賜物である事と深く敬意を表します。

私は昭和二年に設立請願書を出して馬術部出生の産婆役をした丈で、肝腎の私の專門の育て役の方は一向につとめず、高松部長に引きついだ次第で申譯なく御恥しく存じて居りますが、一面馬術部今日の御發展を見ては其安心其嬉しさも亦一入であります。

紀元二千六百年と云ふ有意義な年を迎へるにつけても、此上とも彌々馬術部が發展せられ、馬に關係の多い北海道の大學馬術部としての使命遂行に邁進せられる事を祈つて止みません。

（十五・一）

希望

第二代部長　高松正信

今回馬術部十年史を編纂するから、私にも何か書くやうにとの御話でありましたが、私の部長時代は、私の無能に

もよりまして、至極平凡で、今更ら特に書く程の事がないので、實は大に困つたのであります。

我が馬術部は、永井教授の非常なる御盡力で、出來たのでありまして、その後を私が御引受けして、どうにか大過なく過ごしたと云ふだけで、誠に面目ない次第であります、その間特筆するに足るものと云へば、伊達宗文君（子爵東園基文君）が全國學生馬術選手權大會に、優勝された位のものでせう。その後各部長や部員諸君の熱心な御努力に依つて、馬術部は年一年と發展し、昨年は菅間君が再び全國の覇權を握られる等、私も蔭ながら馬術部の益々隆盛に赴かるゝのを、祝福して止まないものであります。

然しながら馬術部が、將來一層の發展を期するならば、どうしても現狀に止まることなく、即ち馬術部所屬の乘馬と馬場を持つやうにしなければ、充分な成功は到底望めないと思ふのであります。部員諸君は勿論ですが、私としても是非其處迄踏張つて實現させたいと思ふのであります。

獨逸よりの近況に依ると、伯林に於ける大學及び高等專門學校の學生間にも、數年前から乘馬熱が頓に勃興し、ダンネンベルグアレーに於ける馬場だけでは、不充分である爲め、最近更に一個處增設して、學生專門に馬術の練習をさせるやうにしたのであります。之等の學生馬術のみならず、馬匹の飼養管理も、手傳ひながら同時に習得するやうになつて居るので一層効果を上げて居るやうであります。

斯くして各學期末（一年二學期制）に、競技會を開催するので、技術の增進が極めて大であるとのことであります。又學生の專門別から見ますと、矢張り獸醫科が最も盛んであるのは、當然のことでありませう。尙面白い事は女學生間にも乘馬熱は中々盛んでありますが、特に獸醫科に居る女學生は、全部馬術の練習を行ひ、從つて競技會にも參加するは勿論であつて、頗る盛會らしいのは、誠に羨ましい光景と云ふべきであります。

近年各種の運動競技が、益々組織的に行はれるので、設備の完全なることが、愈々必要となつて來たのであります。設備が不完全ではいくら焦つても充分な成功は、期待出來ません。我が馬術部も此の機會に、何んとかして、伯林に於ける學生馬術界の如く、專屬の乘馬及び馬場を、一日も早く持つやうにして、充分に練習を積まれて、斷然全國に覇を稱へると共に、非常時に際しては大に君國の爲めに、御奉公の出來るやうに致したいものであります。

以上甚だ簡單でありますが、平素の希望の一端を、記して見た次第であります。

（十五・二）

馬術部の發展を祝す

第三代部長　黑澤亮助

馬術部創設以來茲に十週年を迎へ得た事は誠に慶賀の至りに堪えない次第で改めて先輩各位の當時の御苦勞を忍び謝意を表したいと思ふ。何事も出來て見れば當り前の樣な事でも新たに生れ出づる惱みは必す何處にもあるからであつて其處に意氣があり努力を拂つてこそ成立したに相違ない。その意氣と努力とが獨り馬術部の發展のみの爲めでなく社會に出ても續けられなければならない必要な事かと考へて居る。

十年一昔は只管發展の途上を辿つて來た、之れ偏に先輩各位の激勵と部員諸君の協力精神の賜と云ふべく、又其間小生微力なるにも拘らず部長としての數年間を過し得た事とを思ひ合して誠に感激に堪えないものがある。

余は部長時代に部員諸君に常に希望して居た事を想起するのであるが、馬は道具でも器械でもない、我が馬術部は馬を只乘りこなす事を練習する機關でもない、結局道具でも器械でもない馬を通して身心を練磨し立派な人間としての修養機關であり各部專門を異にする會員同士の親睦を圖る意味をかねて結成せられて居る團体である。處が其對象物たる馬といふものが誰にも一樣に從順でもなければ親和性もなく、御する人の所謂腕前如何に影響する所が極めて大きい、其處に馬術の妙味がある。

私は馬を乘りこなす腕前はないが日常の專門的見地から每日々々馬の一擧一動を觀察する事を業として居るものであるが多くの會員諸君の大半は馬を對象として將來生活するものではなからうと思ふが、諸君が懸命に研究的態度で馬術を練磨されて居る其氣持が非專門家が多い丈けに嬉しいものがある。私は馬が病んだ時の表情や動作を觀察して無言のものから何ものかを握み出ささうとして居る。諸君は手綱を通して感ずる微妙な觸感から馬の氣持を感得して居る。共に言外に現はし得ない興味深いものがある。其處に馬術がスポーツとして他に比べ得ないものがあると思ふ

のである。

我が馬術部に取つて最も苦痛とする所のものは自馬を持たいといふ事であつて、日常部員諸君の不便甚しく從つて折角の熱心も興味も消え易い傾向があるのは誠に氣の毒に堪えない、然し部員諸君はこの不便不自由を忍んでよく機會を捕へ技を磨き昭和十四年度の如きは嘗てない成績を擧げ得られた。其努力に對しては只々感嘆の外ない次第である。

一昔といふ事は昔から之れから更に一新紀元を劃する第一歩だといふ意味に解されて居る樣である、時恰も皇紀二千六百年國を擧けての祝典を催されやうとする一方、日支事變は新東亞の建設といふ大使命に立つて居るの秋、我が愛する馬術部の發展を祝すると同時に將來の活躍を期待する次第である。

（十五・二）

北大乘馬會時代

半澤道郎

北海道帝國大學文武會馬術部の歴史を語るには先づその前身である北大乘馬會の歴史を知らなければならない。北大乘馬會の創立當時の模様に就ては昭和三年十一月發行の北大乘馬會々報第一號に乘馬會創立者の一人であり創立委員として盡力され今は故人となられた澤田鶴松兄の記事があるから大体その記事によつて書くことゝする。澤田先輩の本學への入學は大正十二年でありその翌年大正十三年に至つて馬を愛好し乘馬を志す同志の者が次第に相寄つて乘馬機關の設立に就て着々計畫を進めてゐた。時恰も政府は大正十四年度より學校に現役將校を配屬せしめて學校教練を實施する事に決定をする模様であることを知り、同志の内には此處に堅實なる軍事研究團体を組織し、研究項目の一として軍部の許可を受けて乘馬練習を正規に行ふ可しとする事に衆議が一致した。茲に於て大正十三年十月中旬北大乘馬會創立委員會を組織し、創立委員として野間口英喜、山本幸雄、石井碩、平山常介、澤田鶴松、眞鍋雅彦、伊藤正之の七氏が擧げられ敏腕家の野間口氏が委員長となり積極的に活動を開始することゝなつた。

軍部との交渉には委員會の合議により体操科の教官である中村虎太郎大尉、大塚貞治郎中尉に依頼する事に決し、就中大塚中尉は歩兵第二十五聯隊に最近まで現役として勤務せられた關係上特にお骨折を願ふ事にしたのであつた。十一月に入り軍隊側の機動演習が終り、二年兵の除隊が濟んで比較的閑散に入るを待つて交渉を開始した。大塚先生と委員一同が月寒の第二十五聯隊副官新田少佐に面會し、爾後數次に亘つて同様交渉に奔走した。比較的順調に進捗して十一月末には着々成功の域に近づき一同大いに悦んだのであつた。

其の頃道廳に居られた豫備少佐三瓶氏を會長とする札幌愛馬會が設立されるに及んで創立委員會は團体を以て同會に入會することに決し、南一條西二十丁目鑛山監督局の西側の廣場を練習場とする同會に入り其處の四頭の馬に乘り始めたのである。當時同會の會員の九割を吾々の先輩で占めた狀況であつたが、この愛馬會入會が却つて北大乘馬會

創立の障害ともなつた事は生れ出ずる惱として貴重な史料である。又道廳に繫畜の馬にも交渉の結果短時間の乘馬が許されたのも同じ頃の事であつた。

同年十二月新田副官の朝鮮平壤第七十七聯隊への榮轉に引續き第二十五聯隊長の近衛師團參謀長への榮轉があり北大乘馬會の創立は非常に危ふまれたが幸に第二十五聯隊より第七師團司令部へ書類が廻送されてゐたので一同安堵して吉報を待つた。

これより先北大乘馬會長に中村虎太郎先生、副會長に大塚貞治郎先生を推載し、大塚先生の草案になる會則を委員會の審議を經て決定し、北大乘馬會々則を制定した。

同年十二月廿五日付を以て師團長國司中將より中村會長宛に軍馬借用に關し正式の許可證が與へられ、土曜、日曜軍部の餘暇を利用して乘馬委員の指導の下に軍事研究の一部として乘馬することを許されたのであつた。

明けて大正十四年一月早々練習開始の運びとなり、委員會は會員を最初三十名とすることに決し會員を募集した。同年十一月十七日に至り總ての準備が整ひ、茲に創立委員會を解散し、北大乘馬會發會式を擧げた。この日月寒よりは池田乘馬委員長、調教師、蹄鐵工長等の來賓あり、學內よりは青葉萬六、藤原正兩先生の御出席あり、兩先生を共に顧問に推載した。

委員會の解散と共に會則に從つて幹事を會長より指名され、幹事長に野間口英喜、會計部に澤田鶴松、石井碩、事務部に平山常介、西野睦夫、山本幸雄、眞鍋雅彦、赤羽敬二の諸氏が就任した。斯くして乘馬會は設立を完成したのである。

發會式當時の會員氏名は次の如くである。

野間口英喜　澤田鶴松　石井碩　平山常介　山本幸雄　國島俊一
本間博　高崎乙右衛門　中谷勝紀　井上益夫　眞鍋雅彦　青木信三
西野睦夫　西田貫道　鈴木藤三　竹內義雄　澤茂夫　赤塚良雄
中野友二郎　上野衛一　關根嘉弘　伊藤正之　箕輪重胤　赤羽敬二
永井卯太郎　中島吉已　宮井梅平　瀨戸太平　松本治雄　矢口道愛

増田米市　河合九州夫　一戸銀造　（以上三十三名）

其の後翌年に入り新たに左の諸氏が會員に加はつた。

高橋北雄、中川清太郎、宇都宮高、岩垣駛夫、小谷武夫、木村藤太郎、三浦俊一、渡邊喜太郎、山田勝己、德田、木内、小池、御手洗、瀧、小野、金子、赤司、小野寺、星、宮脇、吉川、杉田の諸氏

尙當時は入會金壹圓、會費一ヶ月壹圓五拾錢を徵收して會の事業に當てゝゐた。

乘馬會當時の事業の主なるものに就て見ると

一、練　習　平常は土、日、祭日、二十五聯隊に於て

合宿練習、毎年三月中旬

一、遠　乘　會

第一回　輕　川　昭和二年三月十四日・二十二日　參加者二十一名

第二回　江　別　昭和三年三月　參加者二十名　聯隊講堂

第三回　定　山　溪　昭和四年三月　參加者二十一名　聯隊講堂

第四回　定　山　溪

第五回　錢　函

第六回　江　別

一、競　技　會

第一回　於旭川北海道乘馬大會　昭和二年

第二回　同　昭和三年六月十一日

出席者　平山、中野、岩垣、中谷、眞鍋、河崎、松本、酒井、間、九鬼

六月九日　出發、調教士官舍に泊る

六月十日　軍旗祭參觀來賓として琴平競技に出場、岩垣二等、中谷三等

六月十一日　大　會　散紙競馬、卷乘競馬、綜合馬術（一等　中野、二等　岩垣）

琴平競技（一等　松本、二等　岩垣）

第三回　昭和四年　澄宮樣台臨　遊佐幸平・印南大尉模範馬術あり。

昭和五年度

牛澤道郎

馬術部の創立　我が馬術部の前身である北大乘馬會は大正十四年十一月十七日呱々の聲を擧げて以來、第七師團の絶大なる庇護の下に會員の熱意と努力とにより健全なる發育を續けて齡四年を重ねるに及び、その團結も益々强固と爲り練習に競技に大いに成果を揚げ漸く斯界にその存在を認められるに到つた。この間に於て幹事松本久喜氏等は北大乘馬會をして單なる同志の倶樂部的存在たらしめず、更に之を北大文武會の一部として確固たる地位に進め、以て益々その向上發展を圖り有力なる馬事關係團体たらしめると共に特に馬に關係深き北海道に於ける大學馬術部としての特殊の使命を全ふせしめんと企つる處あつたが、昭和四年に入り幹事長河崎秋三氏は之れが實現を期し、幹事並びに會員と共に各方面に運動を起すに到つた。幸にして當時の文武會々長佐藤昌介總長並びに新島善直理事長の深き理解と、理事多數の支持とにより比較的順調に且つ迅速にその目的を達することが出來た。即ち昭和五年新に文武會の一部として馬術部の創立を見たのである。

是より先、昭和二年東大馬術部出身の醫學部永井一夫教授は馬產地にある北大に未だ馬術部の無いことを遺憾とせられ、その設立を熱望されて北大乘馬會內部の運動とは全く無關係に、同年一月二十四日別項の如き馬術部設立希望趣意書を當時の文武會委員長半澤洵教授を通じ佐藤昌介會長へ提出された。この事は我が馬術部の設立を一層容易ならしめた大きな一因であつて、我が部は乘馬會の先輩諸氏に對すると共に永井教授に對して深く感謝しなければならない。

茲に於て馬術部は文武會各部通則に從ふと共に、左の如き馬術部細則を定め、又別に部則を規定して、その據るところを明かにし、舊北大乘馬會を解散してその會員たりし者を直ちに馬術部々員に編入し、河崎秋三氏主任幹事となり、昭和五年三月先に馬術部設立を熱望せられた永井教授を部長に推戴し、部員約四十名を擁して、新年度と

共に堂々輝かしき第一歩を踏み出したのである。

馬術部細則（創立當時）

第一條　本部ハ文武會通常會員中ノ有志ヲ以テ組織ス

第二條　本部ハ毎學年始ニ於テ部員ヲ募集シ其ノ他ノ時期ニ於テハ入退ヲ許サズ

第三條　本部々員ハ部費トシテ毎月金五十錢ヲ納付スベシ

第四條　本部ニ左ノ役員ヲ置ク

部長　一名、幹事　若干名、但シ幹事ハ主任、會計係、庶務係及ビ主將ヨリナル

第五條　部員ニシテ本部ノ目的ニ反スル行爲アリタル時ハ幹事會ノ議決ヲ經テ之ヲ除名ス

馬術部々則（創立當時）

第一章　總　則

第一條　本部ハ北海道帝國大學文武會馬術部ト稱シソノ事務所ヲ本學文武會事務所内ニ置ク

第二條　本部ハ馬術ノ向上運動精神ノ涵養ニ努ムルト共ニ併セテ馬事ニ關スル研究ヲ行フヲ以テ目的トス

第二章　部　員

第三條　本部ハ文武會通常會員ノ有志ヲ以テ組織ス

第四條　本部々員ハ次ノ三種ニ區分ス

一、選　手　一、通常部員　一、臨時部員

但シ臨時部員トハ定期合宿時ノミ募集スル者ヲイフ

第五條　本部ハ毎學年ノ始メニ於テ部員ヲ募集シソノ他ノ時期ニ於テハ入退ヲ許サス

第六條　本部々員ハ部費トシテ毎月金五十錢ヲ納付スヘシ

第三章　練習機關並ニ其ノ方法

第七條　本部ハ歩兵第二十五聯隊乘馬ヲ以テソノ練習機關トシ毎週土曜日午後日曜日午前祝祭日其他適當ノ時ニ歩兵第二十五聯隊ニ於テ同聯隊ノ乘馬委員ノ指導ノ下ニ練習ヲ行フ其ノ他休暇ヲ利用シ旭川騎兵第七聯隊ニ宿泊シ馬術練習並ニ軍事ノ研究ヲ行フ

第四章　顧　問

第八條　本部ハ顧問若干名ヲ推薦ス

第五章　役　員

第九條　本部ニ左ノ役員ヲ置ク

部長　一名　　幹事　若干名

但シ幹事ハ主任會計係庶務係及ビ主將ヨリナル

第六章　事　業

第十條　本部ハ第二條ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ

一、適當ト認メタル學内及ビ對外ノ競技會ヲ開キ又之ニ出場ス

二、馬事ニ關スル研究並ビニ馬事思想ノ普及宣傳

三、馬術ノ向上並ビニ軍事ノ研究ノタメ軍隊宿泊

四、春秋各一回遠乘ヲ行フ

第七章　會　議

第十一條　會議ハ一、定時總會　二、臨時總會　三、幹事會ノ三種トス

第十二條　定時總會ハ通常毎年一月、臨時總會ハ必要ニ應ジ開催ス

第十三條　定時總會ニ於テ附議報告スベキ事項次ノ如シ

一、豫算及ビ決算報告　二、庶務報告　三、新年度ノ計畫　四、其ノ他重要事項

第八章　經　費

第十四條　本部ノ經費ハ左ニ掲グルモノヲ以テ之ニ充ツ

一、本學文武會ヨリノ補助金

二、部費

第九章　簿　册

第十五條　本部ニ左ノ簿册ヲ備ヘ主任幹事之ヲ保管ニ任ス

一、部員名簿　二、會計簿　三、會議誌　四、部　誌　五、備品簿　六、發受簿
七、領收書綴　八、馬事ニ關スル書籍雜誌　九、寫眞帳

第十章　附　則

第十六條　部員ニシテ本部ノ目的ニ反スル行爲アリタル時ハ幹事會ノ議決ヲ經テ之ヲ除名ス

第十七條　本部々則ノ改正變更ハ總會ノ議決ニヨルニ非ザレバ行フコトヲ得ズ

第十八條　本部々則ハ昭和五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

部員及び役員の狀況　中谷勝紀、眞鍋雅彦、兩先輩を送り又酒井寛一兄の退會を見たが新學期に入り、新入部員約二十名を加へ部員數は約五十名となり、河崎秋三主任の下に岩垣駛夫、松本久喜、永松四郎、九鬼誠之助、武田朝男、半澤道郎、愛甲慶壽家、岩橋歸一、加藤英夫、藤原正武等が中心となり中興の意氣に燃えて活動を開始した。永井教授の部長就任御快諾と共に、畜産第一部馬學教室の高松正信教授、乘馬會當時の會長中村虎太郎大尉、同副會長大塚貞治郎中尉、配屬將校人見順士大佐、近藤中佐、中村素大尉、及び豫科の藤原正教授に顧問を御願ひした處が何れも御快諾を得たので役員の陣容も全く整ふことが出來た。尙ほ初年度に豫科第一學年として新たに入部した者の中に高杉直幹。脇田代子郎、滋賀秀明諸君の第五、第六、第七代の主任があることは當時の新入部員の意氣が窺はれると共に部内の融和が思はれて痛快なことである。

第一年度の部員には河崎秋三、岩垣駛夫、松本久喜、永松四郎、長尾五三郎、勝部哲男、添川正夫、鳥羽和博、愛甲慶壽家、九鬼誠之助、武田朝男、半澤道郎、木本氏幹、岩橋歸一、藤原正武、加藤英夫、田畑武夫、植村勘一、本田桓康、小笠原義顯、岡田初正、向井四郎、前野正久、高井敏昭、前川健太郎、滋賀秀明、高杉直幹、道祖士良一、養田芳次郎、石橋正夫、佐部清、川上壽一、山本決、飯塚英夫、脇田代子郎、倉上政博、橋本敏一、秋山後長、藤森知夫、藤田康、河内山計治、松村猛夫、洪達善、伊藤、堤、濱の諸君が記錄に殘つてゐるがこの中、卒業まで部員として全ふされた人は十五名位のものであつて他は種々なる事情で中途退部されたがこれ等の諸君が陰に陽に我が馬術部の爲めに力を盡されたことは非常なものである。

顧問の中村素騎兵大尉には騎兵隊との連絡交渉に又練習指導に非常に御世話になつたが昭和六年三月轉任される

こと丶なり同月二十三日札幌を去られた。

練習狀況　部則にある如く北大乘馬會當時と同樣歩兵第二十五聯隊乘馬を以てその練習機關とし毎週土曜日午後日曜日午前、祝祭日其の他隊馬借用可能の時に同隊に於て同隊の乘馬委員(主として高江調教師が當られた)の指導により熱心なる練習を行ひ、又三月中旬には旭川騎兵第七聯隊に約二週間合宿して馬術練習と軍事研究を行つた。部員中の多くの者は又個人的に市内の札幌愛馬會に入會して出來る丈け多くの機會に乘馬せんと努めてゐた。

競技會に於ける戰績　東北帝國大學馬術部主催の東北乘馬大會が五月廿三日仙臺に開催され永松、九鬼、加藤、岩橋本田の諸君が選手として出場し概して良好の成績を收めた。

七月下旬、東京陸大馬場に開催された東京帝國大學馬術部主催第七回全國高等學校馬術競技大會に豫科の藤原、加藤、岩橋、本田、小笠原(補缺)の諸君が出場し、初のインターハイ出場にも不拘、善戰第二位を獲得した。學習院に敗れたとはいへ戰前既にダークホースとして懼れられ優勝を逸したので、今日の榮冠が既に十年前にも手近かにあつた事を思へば決して偶然の好運によつてのみ贏得たものではないことが窺はれる。全日本學生馬術選手權大會北海道地方豫選を七月十日旭川騎兵第七聯隊障碍馬場に於て擧行し河崎、永松、半澤、岩橋、藤原、加藤、愛甲の十名が出場し城戸少佐の審査の下に河崎兄が北海道地方代表と決まり、習志野の同大會に出場せるも利あらずして豫選に破れた。八月十日第四回北海道乘馬大會が旭川に開催され河崎、永松、九鬼、武田、半澤、藤原の諸君が出場し善戰した。十一月二、三日明治神宮外苑に開かれた關東乘馬大會には永松君が出場した。又弘前高等學校馬術部主催第八師團後援の馬術大會が十一月九日弘前に開催され、學部より、岩垣、永松の兩君、豫科より岩橋、藤原兩君賣科より愛甲君が出場し大學高專對抗競技に於て豫科チーム第二位となつた。(同點なるも一位を弘前高校に讓る)。

其他の事業　五月廿三日文武會デーに際し第一農場内の馬場に於て、東北乘馬大會に出場せざる部員の馬場馬術及び障碍飛越を一般に供覽した。之れは學内大會、引いて札幌乘馬大會の前身とも見る可きもので、當日は唯部員が月寒より乘馬にて會場に到り分隊で馬場運動を行ひ、續いて聯隊より借用せる垣障碍と二段横木を各個飛越して終つた位でいたつて幼稚のものであつたけれども當時としては相當に好評を博したものであつた。六月十七日には城

戸俊三少佐が來札されたので歡迎會を開いた。九月廿四日には輕川光風館往復の輕い遠乘會を行ひ麗かな秋日を樂しんだ。一月三日には在札の部員で初乘りをした。

尙日本學生馬術協會及び國際馬術協會に入會し、日本學生馬術協會よりは事業に對する補助を仰ぐことゝなり、本年度中には前記の地方豫選實施に對する費用の補助を受けた。國際馬術協會へは維持會員として入會し維持會員一口拾貳圓を納める事とし、同協會の目的なる日本馬術の國際進出(特にオリンピックを目標としての)及び外國馬術の研究消化等の事業に對して微細な應援をし、同會より國際馬術に關するパンフレットの寄贈を受けた。

諸會合の狀況　五月五日新入部員の歡迎會を學生集會所に開催し、新入部員約半數と舊部員十四名の出席があつた。九月二十六日に報告會を選手慰勞並びに部員懇親會と兼ねて學生集會所に開き河崎、永松、九鬼其の他選手諸君の報告があつた。一月十七日に明年度の幹事を選び、主任幹事に九鬼誠之助、庶務幹事に武田朝男、會計幹事に半澤道郎が夫々選任された。又二月九日には明年度の豫算會議を行ひ請求豫算として六百七拾九圓を決定した。二月十日昭和五年度總會を開き部長、顧問の挨拶、庶務、會計の報告、主任幹事、新年度幹事の挨拶及び新年度の計畫等に關する議題を附議した。引續き精養軒にて卒業生送別會を開き馬術部創立に力を盡された河崎、松本、岩垣、愛甲の四兄を送り非常な淋しさを感じたが、この日は聯隊より五十嵐聯隊長を始め河村乘馬委員長、乘馬委員、八子工長、高江調教師の六名、それに部長、高松顧問、人見、近藤兩配屬將校の來會があり部員十六名出席し極めて盛會であつた。尙卒業の四兄には記念品として銀製バックルを贈つた。

會計の概略　昭和五年度に於ける部の會計收支概況は次の如くである。

收入ノ部

總額　金參百九拾九圓四拾八錢也

內譯

一、金貳百貳拾圓　文武會補助費(教官謝禮費、備品購入費、協會負擔金合宿補助費、雜費等)

一、金貳拾圓　文武會特別補助費(文武會デー開催費)

一、金七拾參圓五拾錢　部員納入部費(練習セル月每月一名五十錢宛　一四七名分)

一、金拾參圓貳拾錢　部員納入金部費以外
一、金參拾壹圓四拾錢　日本學生馬術協會ヨリ地方豫選費
一、金四拾壹圓參拾八錢　北大乘馬會々計ヨリ編入金

支出ノ部

總額　金參百九拾八圓四拾八錢也

內譯

一、金壹百拾六圓七拾八錢　教官謝禮費
一、金參拾五圓　備品購入費　乘鞍一背
一、金拾七圓　協會負擔金（日本學生馬術協會五圓、國際馬術協會拾貳圓）
一、金六圓五拾錢　大會申込金（仙臺東北乘馬大會）
一、金參拾圓　遠征補助費
一、金六　圓　遠乘會費補助
一、金拾七圓參拾錢　文武會デー開催費
一、金貳拾壹圓貳拾八錢　臨時費（謝禮、見舞、餞別、香奠等）
一、金拾四圓　記念品代（先輩ヘ贈呈）
一、金五圓參拾錢　簿册、印、寫眞代
一、金九圓五拾六錢　通信運搬費
一、金參拾壹圓四拾錢　日本學生馬術地方豫選開催費
一、金貳拾五圓貳拾錢　雜　費
一、金四拾四圓拾六錢　翌年度ヘ繰入レ

以上

馬術部設立希望趣意書

國民保健の問題は國家の消長を左右する重大問題たるは敢て今更申す迄も有りません次第で我教育界を通覽しても學事の傍身体的訓練の必要に即してスポーツの勃興日に盛なるものあり吾が北大文武會亦所謂文武の兩方面に諸種の部を設けて活躍して居りますことは眞に慶賀に堪へざる所であります。

然るに五十年の光輝ある歴史を有する農學部を頂く我が北大としては將又良馬の産地として本邦に冠たる北海道に文化の源泉とも日月とも仰がるゝ我が北大としてその文武會に馬術部を缺くは盡龍晴を點せざるの恨があります。全國無數の學校の事は暫く之を問はずとするも例を東西兩京の帝大に見んか何れも偉大なる馬術部を擁し年々對抗競技を行ふの盛況で京大の如きは十頭の馬を有し年々三千六百圓をこれが維持に支出して居ると聞いて居ります。

單にスポーツの一としても馬術の有する獨特の長所は敢て小官の吸々を要しない次第でありますが特に文教の傍常に尚武の美風を失はなかつた本邦で武技の一として馬術が如何に尊重され來つたかを見ましてもその身心の訓練に益する所の大なる想像に難くありません。

他方又實用的方面から之を見ましても軍事教練と密接の關係あるべきは申す迄も無く更に軍事以外の機會に於ても馬術を解すると否とによつて受くる便不便又日本男兒の体面の如何等敢て多くを言ふに及ばずと存じます。

文武會の他部に比しまして季節の掣肘を受くることも比較的少ない馬術部の設立を承認して頂く可能性は十分あると信じて居りますが設立後この部の活動に先立つものは馬と金であります。ところで馬は幸農學部畜産科所屬の數頭を同科學生の正課としての使用を妨げない範圍で利用させて貰ふことが出來ませうし、又休日には月寒の軍馬を借して貰ふことも當然出來ると思ひます。

、既に非公式に豫科の生徒達が乘馬會を組織して月寒に於て相當の便宜を計つて貰つて居ることも耳にして居ります。

東京その他に於てもかゝる機會に陸軍當局が他方面との理解を計る方便として好意を示してくれる傾向の有ることも明かであります。

若し夫れ北大文武會の名によつて陸軍當局に交渉する所あらんか最善を盡して便益を與へられることは小官の斷言して憚らぬところでありまして行く行く旭川の騎兵隊に依屬して乘馬演習を行ふ位の機運にはすぐになると思はれます。

勿論設立の當初から多額の文武會費を頒けて貰ひ難いこともよく分つて居りますがさし當り小官の希望するところは馬術部が文武會の一部として承認せられ適當なる部長を得て該部の事業が實行の緒に就かんことであります。

馬術部成立の上既成各部に讓らざる部員を得べき見込は勿論あります。最初小官は學内職員、學生、生徒等に檄を飛ばして同志の

連名狀を作製した上馬術部の設立を御願ひしやうとも存じましたが此擧に出でて幾分たりとも事を遲延せしめんよりは先づ愚見を陳じて御願ひすることの捷徑なるべきを確信して御賢斷を仰ぐこと件の如くであります。

昭和二年一月二十四日

馬術部設立熱望者　北海道帝國大學教授　永井一夫

北海道帝國大學文武會長　北海道帝國大學總長　佐藤昌介殿

昭和六年度

半澤道郎

北大乘馬會の殆んど初めから會員として同會の發展に活躍され、馬術部の創立に力を盡されて確固たる礎石を築かれた岩垣駛夫、河崎秋三、松本久喜、愛甲慶壽家の諸先輩を送つて寂寥の中に第二年度の春を迎へた。永井部長の下に主任幹事を丸鬼誠之助、庶務を武田朝男、會計を半澤道郎が擔當し、永松兄を初め藤原、加藤、岩橋の諸君と共に仕事を始める事になつた。幸ひに岩垣先輩は園藝學教室に松本先輩は畜産一部の馬學教室に勤務されることになり事々に御相談を願ひ、非常な助力を頂くことが出來たので微力な吾々幹事も安心して事に當ることが出來た。又中村素大尉の後任配屬將校として騎兵第七聯隊から遠矢良仲大尉が赴任され、早速顧問を引受けられて萬事に綿密な御注意を受け極めて熱心な指導を賜つた。四月には新たに學習院から農學部に入學の伊達宗文君を迎えると共に新入部員拾數名を加へて益々意を强くすることが出來た。

前年度末に請求豫算として六百七拾九圓を提出したのに對し、本年度歲出豫算として次の如き貳百八拾壹圓が承認決定され、初年度に比して六拾壹圓の增額を見た。

歳出豫算内譯

一、練　習　費　一八〇・〇〇（鞍一背四〇・〇〇　轡鎖十ケ一〇・〇〇　維持費一〇・〇〇　教官謝禮一二〇・〇〇）
二、文武會デー開催費　二〇・〇〇
三、遠征補助費　二四・〇〇（習志野馬術競技大會出場費）
四、合　宿　費（旭川）　二五・〇〇
五、諸會加入負擔金　一七・〇〇（日本學生術協會々費　五・〇〇　日本國際馬術協會々費　一二・〇〇）
六、雜　費　一五・〇〇
計　二八一・〇〇

本年度の事業と戰績に於て特筆す可きものは東北帝國大學と定期戰を始めその第一回戰を十二月二十六日に仙臺に於て開催したこと、馬事思想普及宣傳を目的として講演、映畫會を實施したこと、及び全日本學生馬術選手權大會に於て伊達宗文君が優勝したこと等である。

此の年には滿洲事變が勃發し軍部に於ては移動も多く事務も多端となり部の練習其の他の上にも影響するところが次第に多くなつた。嚴寒の滿洲の山野に活躍する軍馬を思ひ、部員は自發的に慰問金を據金し集まつた拾數圓を獻納して、些少ながらも人參代の一部にもと情を罩めて普段御世話になる軍馬に贈つた。

一月には永井部長が辭任され高松顧問が代つて部長となられ、三月には人見大佐が姫路の第十聯隊へ御榮轉にて退札され、又學生馬術に深き理解を持たれ常に多大の厚意と便宜を與へられた五十嵐第二十五聯隊長も歩兵第七聯隊長として上海に出征の爲め壯途に就かれ代つて山口大佐が著任された。

次に本年度の競技會に於ける成績及び其の他の事業に就て記すが、記錄の不備や飛散からその詳細を傳へることの出來ないのは當時の幹事として誠に面目の無い事で何とも申譯けの無い次第であるが主任幹事であつた九鬼君の不慮の急逝に免じて御許しを乞ふ次第である。

新入部員の歡迎會を學生集會所に開いて間もなく五月二十四日の文武會デーを迎え、新しい試みとして馬事講演會を學生集會所に開催し學内一般に公開した。この日は初め第七師團獸醫部長柏五郎氏を招いで御講演を願ふ筈であつ

たが都合により取り止め、高松正信顧問の「統計上より見たる世界産馬界の傾向及びその將來に就きて」と題する講演を行ひ、講演後座談會とし、それに引續いて映畫會に移り、馬術諸運動分解寫眞、トロッティングレース（分解寫眞付）、農耕、騎乘說明寫眞、及び昭和四年度北海道乘馬大會實寫映畫等を觀賞したが、多數の參會があり盛會であつた。

東北乘馬大會　が五月三十一日に仙臺第二師團練兵場に開かれ伊達君が個人優勝し、六月二十一日旭川に於ける第五回北海道乘馬大會には部員多數出場し、全般的に良好なる戰績を收め大學專門學校對抗競技に優勝した。歸札して「郡司」に視勝會を催した。七月四日より數日間旭川騎兵第七聯隊に於て夏季合宿練習を行ひ、その間に全日本學生選手權大會の北海道地方豫選を行ひ、伊達宗文君が北海道代表に決定した。

第八回全國高等學校對抗馬術競技大會　が七月二十六日に東京陸軍大學馬場に開かれ豫科部員より本田桓康、小笠原義顯、植村勘一の三君が出場し、三十五點を得て第四位となつた。又**第三回全日本學生馬術選手權大會**は八月一日習志野に於て行はれ本道代表として出場した伊達君は優勝の榮冠を獲得した。十二月十五日より二十一日まで一週間旭川の騎兵第七聯隊にて冬季合宿練習を行ひ、豫科部員十二名が參加した。事變下にも不拘軍部の厚意には深く感激した。

第一回東北帝大對抗定期戰　は仙臺の第二師團及び東北帝大の都合により開催が遲れ十二月二十七日仙臺騎兵第二聯隊に於て行ふこととなり同月二十四日永松、九鬼、武田、伊達、藤原の五君が選手として札幌を出發し、二十六日騎兵第二聯隊にて練習を行ひ、二十七日惡天候の爲め條件不良の馬場に惡戰し、不幸にして第一回は東北帝大に名を成さしめるところとなつた。

以上各競技會の戰績を一月に入り報告會を催して部員に報告し、又幹事の改選を行つて、主任幹事を伊達君に讓り來年度の豫算を編成し、二月十四日に總會を開催し引續き「ときわ」に於て、永井前部長謝恩、高松新部長披露卒業生送別を兼ね懇親會を催し、第二十五聯隊より五十嵐聯隊長、副官坂本少佐、乘馬委員長稻川中佐、機關銃隊長山住大尉、乘馬委員吉田少尉、小倉軍曹、高江調教師の來會あり、高松部長、永井前部長、人見大佐、遠矢大尉、松本先輩等の出席があり部員十餘名と共に極めて盛會の裡に永松四郎兄を送り本年度の行事を終つた。（一五・二・二）

昭和七年度

半澤道郎

新入部員三十六名を加へ部員數七十六名の多數となり益々盛況を呈するに至ると共に事務行事も次第に繁雜多端となり之れが處理遂行に當つて幹事會、相談打合せ會を頻繁に開き諸方面に亘つて確固たる方針を樹て、着々實行に移し、滿洲事變下に一層緊張して鋭意建設の歩を進めた。入部一年にして主任幹事の任に當られた伊達主任の勞苦の跡が主任日記に中に偲ばれ、輝やかしき部の傳統の上に兄の遺された大きな足跡に對して深く敬意を表する次第である。部長は永井教授の後を高松教授が嗣がれ、人見顧問の後には配屬將校三橋濟中佐が來られ近藤中佐、遠矢大尉兩顧問と共に非常な助力を頂いた。岩橋、本田、小笠原、植村、高杉、滋賀、九鬼、武田、半澤、藤原、加藤等の新舊幹事其他が中心として諸方面に活躍した。本年度は滿洲事變の爲め軍部に出征移動多く、九月下旬第二十五聯隊より〇大隊、騎兵第七聯隊より〇中隊の出動あり、夫々祝意を述べ出征軍馬に對し人參數俵を贈り部員多數驛頭に歡送した。軍部馬匹の都合で文武會デー部學內大會及び遠乘會の實施出來なかつた事や練習の不充分は止むを得ないことで却つて事變下にあつて多大の犧牲を拂つて便宜を與へられた第二十五聯隊並びに騎兵第七聯隊に感謝しなければならない。又本年は第十回オリムピック大會がロスアンゼルスに開かれ、お世話になつた城戸少佐は先發隊として四月二十一日東京驛發同二十二日鳥羽丸にて横濱を出帆されたので、伊達主任が部を代表して御見送りをし壯途を祝し、五月十一日馬術選手各位横濱出帆に際し祝電を打つた。七月十一日は海軍第二艦隊馬術練習士官十一名が二十五聯隊の西田少佐の案內で乘馬にて本學を來訪されたので遠矢大尉學內を案內され、中央講堂に於て高松部長等接待され、部より簡單なる饗食を饗應した。

馬術部モノグラムに就て　馬術部モノグラムは北大乘馬會に於て制定使用せるものを踏襲したものであつて乘馬會當時特に會に貢獻せる者に對してその功績を表彰するものとして授與する慣習であつたもので、馬術部に變つてか

らも有功部員に授與せられて居たものである。然して昭和六年度まではモノグラムに關して特別の記錄がなく、制定の由來、意義、授與者の氏名等に關するものが判きりしてゐなかつた。昭和七年度に至り伊達主任はこの如き狀態を甚だ遺憾とし、主任日記の末尾に次のやうな一文を記し、爾後モノグラムの取扱に對し據るところを明かにした。次にその文をそのまゝ轉載する。

馬術部モノグラムに就て

筆者は右モノグラムの歷史に關しては全く知る處なきを遺憾とす。又これが從來の授與者の氏名に就きてもこれを明かになし得ざるを甚だ遺憾となすと共に今後かゝることなきを期す可きなりと信ず。從來モノグラムは他の賞品メダルの類とその性質を異にし云はゞ馬術部の有功章とも稱すべきものにして、これを授與せられたる者の光榮亦大なりと云ふべし。然してこれが受領者は其の榮譽と共に永くその馬術部に對する功績を稱讃せらる可きものなり。

こゝに於てこれが論功に當りては深甚の熟慮をなし、モノグラムをしてその精神的價値を低減せしめざる樣努む可きなりと信ず。

昭和六年度主任九鬼誠之助君の調査せる處によれば同年度迄の授與者氏名左の如し。

澤田鶴松(1)　平松山常介(2)　眞鍋雅彥(3)　中野友二郎(4)　中谷勝紀(5)
河崎秋三(6)　松本久喜(7)　岩垣駿夫(8)　酒井寬一(9)　藤居金太郎(10)
九鬼誠之助(11)　武田朝男(12)　牛澤道郎(13)　永松四郎(14)　藤原正武(15)
岩橋歸一(16)　加藤英夫(17)　愛甲慶壽家(18)　伊達宗文(19)　本田桓康(20)
(以上　二十名)

然して中村先生、大塚先生に贈呈したるや否やは不明なり。又以上の二十名がはたして授與者の全部なりやは遺憾乍ら信じ難きものなり。然してこれが整理上、昭和七年五月に至り各自のモノグラムに前記の番號を刻みたり。昭和七年以後の爲め、モノグラム授與贈呈者名簿を設く。

尙モノグラムに對する歷史其他前記中の不備なる點に就きて今後の調査に待つ可き點多し。尙一言したき事は今

後モノグラム授與者にして正式に退部を命ぜられたる者は同時にモノグラム授與者たるの名譽をも失ふ可きが至當ならむと考ふる次第なり。（以上）

これによつて知られる樣に乘馬會當時の授與者には或ひは脱落せる者があるかも知れない、筆者が過日大塚先生にお訊ねしたところ中村、大塚兩先生には贈呈したらしく、又乘馬會發會式當時の會員全体の所持せるものは部員章として使用せるものらしく現在のモノグラムとは異なるやうである。尙これ等に關しては先輩諸兄の御教示を待つものである。

馬術部ペナントに就きて　（伊達宗文記）

馬術部ペナントは昭和七年一月二十九日開催の幹事會以後二回にわたり幹事會に於て協議せる結果馬術部卒業生に贈る記念品として在部當時を偲ぶによき思出のメモリアルとしてこれが作製を決議せるものにして、その考案初回製作に當りては筆者に一任せられたるものなり。故に我が馬術部の意義あるペナントとして將來非難の恐れあるやを憂ふる處あるも幸にして今日迄大なる非難の聲を聞かざるを喜びとす。然して當時の幹事及先輩はかく年々の記念品を統一して馬術部ペナントなる記念品をしてこれに次第に歴史的價値を有さしめ以て一層意義深き贈物とせんことを計りたるものなり。但し馬術部卒業生全般に之を贈る可く部の財政上許さゞる爲、このペナントをして馬術部モノグラム授與者に對する卒業記念品と限定せり。然してその卒業生とは本科卒業迄部員としてその終りを完したる者を意味するものなり。但しこれを原則とするものにして卒業生の待遇をなすものをも含ましめ得、例へば大いに部の爲に盡しモノグラムを授與せられたる部員にして眞に同情すべき理由の爲に退學する場合（又は單に退部するにても可）又は不幸にして在學中に友に先立ちし者等その事情を斟酌して定む可きなり。又部長顧問等の役員の退職にあたり贈呈するも可ならん。然してペナントにはその卒業年號を皇紀年代を以て所定の數字を以て入れるものなり。

尙馬術部にはその原品ともなすべく文武會馬術部創立の年をトし、皇紀二五九〇年の年號を入れたるペナントを保存しこれと共に年號用數字原形（半紙に描きたるもの）はこれを代々の主任保管するを例とす、然して今後そのペナントは硝子入りの額縁に入れ保存に便ならしむるを可とせん。

尙爾來これが製作は三越運動部（札幌支店運動部扱ひ）に命ぜり。

（卷末のペナント贈呈者名簿を參照）

習志野乘馬大會　四月九日習志野に擧行され學生乘馬團休囘數競技に本田桓康、小笠原義顯の兩君出場し、本田君（三歸號）は個人として五十六名中四等を獲得し、又學生中障碍連續飛越競技に出場せる伊達宗文君（盛星號）は十七名中六等を獲得した。

全日本學生馬術選手權大會北海道地方豫選　六月十九日午前十時より旭川騎兵第七聯隊營前障碍馬場に於て實施し障碍約十五個、連續飛越二囘の合計點により順位を決定した。結果は次の如し。

順位	氏名	得點數	順位	氏名	得點數	順位	氏名	得點數
一	本田桓康	四一三・五	二	吉見一郎	四〇〇・一	三	小笠原義顯	三九七・五
四	高杉直幹	三九二・三	五	藤原正武	三八七・九	六	脇田代子郎	三八七・六
七	九鬼誠之助	三七六・〇	八	滋賀秀明	三六七・五	九	植村勘一	三四六・五

第九回全國高等學校馬術競技大會　七月三十一日東京陸軍士官學校河田町馬場に於て擧行され、豫科選手脇田代子郎高杉直幹、小笠原義顯、滋賀秀明の四君、この順に出場し善戰せるも惜しくも第六位となつた。

第四回全日本學生馬術選手權大會　八月三日陸軍騎兵學校に於て擧行され、本學より前年度選手權保持者である伊達主任及び地方豫選にて代表となつた本田桓康君が出場し、本田君は惜しくも二十一位にて本競技に失格となり、伊達君は豫選、本競技を通じ第二位となり勝盃を受領した。當日入賞者の成績は左の如くであつた。

順位	氏名	得點	順位	氏名	得點
1	藤野泰吉（東京商大）	三一五・〇	2	伊達宗文（北大）	三一四・七五
3	瀧江義明（慶應）	三一四・二五	4	山口直次郎（神、商大）	三一三・七五
5	青山幸敬（東大）	三一三・〇			

第六回北海道乘馬大會　八月十七日旭川に擧行され、遠矢大尉部長代理として出張臨席され、九鬼、半澤、伊達、藤原、本田、植村、高杉の諸君出場し左の如き戰果を收めた。（本大會に對し助成金として金參拾圓獸醫部に献納）

學生一般障碍　植村　優勝
學生綜合馬術　伊達　四等
全國大學高專對抗障碍飛越競技　本學チーム（伊達、本田、九鬼）優勝、北大總長カップ（チヤレンヂ）
各人副賞、朝日大毎優勝旗（チヤレンヂ）獲得

尙この日軍馬慰問料として金拾壹圓五拾錢を贈呈した。

第二回對東北定期戰　八月十八日旭川騎七營前障碍馬場に於て擧行。今回は前日擧行された北海道乘馬大會のプログラム中に實施の筈であつたが時間の都合で十八日に延期し午前八時より開始した。藤原病氣のため出場不能となり双方四名を以て行ふことゝなり、九鬼、伊達、本田、岩橋の四君出場し四十點の差を以て我が軍敗北、尙この定期戰には野外騎乘競技をも加へて障碍飛越競技の前日即ち十六日に實施の豫定であつて、八月十一日より十五日まで騎七將校合同宿舍に合宿し、大桃中尉指導の下に東北帝大選手と共に午前は障碍、午後は近文蔡にて野外騎乘の練習をしたのであつたが、前日來天候不良の爲地盤惡く危險を伴ふ懼れがあり殘念乍ら中止したのであつた。試合終つて午後二時よりモンパリに於て東北帝大選手慰勞懇親會を催した。

映畫會　十一月十六日午後六時より學生ホール三號室に於てオリムピツク馬術映畫會を開催し、オリムピツク馬術競技二卷、同第二次持久力審査實況二卷、外二、三卷を映寫し、後五號室に於て茶菓を喫しつゝ座談をなし九時半頃閉會した。この日部長を始め遠矢大尉、松本先輩、林、荒野兩先生、高江調教師の來會あり文武會員約百名の出席あつて極めて盛會であつた。（尙この映畫借用に際しては伊達主任十月十九日乘馬協會に出向して交渉す。又映寫技手は工學部の事務員、謝禮參圓）

昭和七年度は東園基文兄（當時の主任伊達宗文兄）にお願ひして書いて頂く可きであつたが、實に詳細な主任日誌が同君の手によつて遺されてあるので態々御手數をかけるまでも無いと考へて當時の部員であつた私が、それに據つて書くことをお引き受けしたのでしたが、いざ書いて見ると非常に物足りなく、これならば東園兄を煩はす可べきであつたと後悔してゐる次第です。切に東園兄を始め諸君の御寛容を御願ひ致します。

昭和八年度

植村勘一

主任幹事をやつたものは其の責任のあつた一ケ年のことを本誌に書くことになつてゐるとのことで遂に書くことを餘儀なくされて了つた。馬術部も文武會に入つてからもう十年になるかと思ふと文武會馬術部の創立當時から知つてゐる私には今昔の感に耐へないものがある。私の主任だつた昭和八年と云へばもう相當に昔のことになつて了つて記憶にもうすく、それに生來の筆不性と拙文で書くのに大變なことだ。昭和十五年二月三日に昭和十四年度の定期總會と新卒業生の方々の送別會があり、久しぶりに(四年ぶりかで)部の集りに出て見たが、新卒業生が私の在學時代の最後の教へ子だと聞いて驚いて了つた。卒業以來自分の身近かな周圍のことにのみ影響されて細々と暮して來たものが、あゝした集りに先輩の一人としてメーンテーブルに座らされて「植村先輩」「植村先輩」と云つて尊敬(?)されたのは實に良い氣持ちだと感激した次第。その時に一杯飲んだ勢で口をすべらせて最近のことなど判りもしないくせに學生諸君は近頃どうも少々消極的だなどと云つて了つて、あとで部員諸君に大いにとつちめられたが、これも亦やつゝけられる事に依つて良い氣分になつた。

總會の事業報告を聞いてゐると私共の時とはスケールも比較にならない位に大きくなり其の試合成績に於ても本邦學生馬術界に冠たるものがあり、さすがに我國冀北の地にある北大馬術部だと肯かされるものがあり全く敬服したと共に此の部に一先輩として名を連ね得る身の幸福をしみじみと味つた。私が豫科に入つた時分は未だ北大乘馬會と稱して同好の士が拾數名集つて練習してゐた所謂申合團体だつたが、私が豫科二年になつた頃文武會に入つてはと言ふ聲が起り、新入の部のいづれもが味つたであらう、生みの惱みを經て入會出來た樣に記憶してゐるが當時私は未だ新入會員の域を脱しない時だつたので餘り明瞭には判つてゐない。我々が立派な(?)キロットと固胴の長靴で馬上豊かに歩く姿などは一部の人からある程度の反感もかつたらしいが馬術部の連中は皆好人物(今でもさうだと信ずるが)ば

かりだつたので、そんな反感も自然になくなり一般に部と云ふものが理解される樣になつたが、一部の部員が時々そんな姿で用もないのに街を濶歩してゐたのには、どうもキザで我々でさへ少々嫌味に感じた。

私が主任を務めた昭和八年の私の殘した日誌を見ても今讀むと少からず恥くなる樣な文章と加ふるに誤字を以てみたされてあるので大して參考にもならないが、然し當時の私としては精一杯の努力で書いたものであり又さう思つて戴きたいと思ふ。

當時部には私の一年先輩に今の東園基文子（當時の伊達宗文君）が居つて大いに我が部の名聲を發揮してくれたし又我々の良き教官でもあつた。同君の部に殘された功は實に多く、事務上のことに於ても萬遺憾なく處理せられて居り、又技術でも當時我國學生馬術界に名實共に第一人者として君臨して居られた。氏が全日本學生馬術選手權大會に出場されたのは昭和六・七年と二ケ年であり、昭和六年には優勝、七年には第二位に入賞された。昭和七年には外に部から私と同期の本田桓康君（工學部）が出場したが不幸にも入賞に至らなかつたと記憶してゐる。昭和八年には私が選ばれて出場はしたが精一杯に戰つて豫選では第十位、決勝では第七位になり伊達君の築いた北大恐るべしの感をなくして了つたが昨昭和十四年には菅間君が久しぶりに覇權を握り再び面目を取戻してくれたことは實に感謝に耐へない。

昭和八年の高校大會には私が終始監督しながら實に散々な不成績で北海道へ引上げて來た。當時の豫科選手の技術は決して人後に落ちなかつたと信ずるが、只時の運が惡かつたのだと思ふ。それも昨年は見事に優勝してくれてお芽出度い限りだ。私が高校大會に出た時には好敵手學習院で同校の馬を使つて二、三日練習させて戴いた、その時の學習院の主將は後に我部に入られた大迫明德君だつた。同大會の成績は優勝候補であり乍ら第四位に入賞したに過ぎなかつた。

昭和八年には神宮競技があり選手權大會の豫選通過者が出場資格を與へられたので出場したがそれには幸ひに三位に入賞出來た。神宮競技には私も選手權大會の仇討ちとばかりに張切つて上京前約二週間程學校を休んで單身旭川騎七に出かけシンミリと練習して來たのでこれが大いに役立つた樣に思はれる。翌春の習志野の乘馬大會にはやはり選手權大會の豫選通過者だけの學生中障碍連續飛越競技に出たが、これは問題なく敗退して了つた「練習不足のためだつたと思ふが、試合なんて心の緊め工合である程度左右されるものだと信ずる。」其の他仙臺や旭川の大會等のこと

は實に樂しく感激にみちて想ひ出される。こんをことを書いてゐると老人の若き日の想ひ出を語るにも似たこととなつて了つたが、私の樣に學生時代の趣味が私に畜產を學ばせ、そうして今我國の畜產を背負つて立つ北海道に馬係の小役人として職を奉ぜさせたかと思ふと趣味も亦相當なものだと思ふ。然し趣味から出發した商賣も生活の糧を得る手段となると決して思つた程樂しみばかりではないものだ。一月迄約三ケ年日高に在住したが御承知の樣に日高は我國第一の乘馬產地であり優秀な乘馬はいくらでも居るが仲々乘馬を樂しむ機會などは無いものだ。

最後に賢明なる部員諸君は私などが言はなくても御存知のことと思ふが、學生馬術と云ふものは決して我流になつてはいけないし又本道には他に相手とする樣な處もないので御氣の毒ではあるが決して慢心することなく武士道の一つとしての馬術に精進していただきたい。

（十五・二）

昭和八年日誌抄

一月二十六日　學生ホールにて總會並びに卒業生送別會。卒業生、九鬼誠之助、武田朝男、半澤道郎。

四月　八　日　習志野乘馬大會に北大より伊達宗文、學生中障碍に出場し六等となる。

四月二十五日　學生ホールにて新入部員歡迎會。

四月三十日　豊平館にて二十五聯隊と馬術部關係者にて新聯隊長永見大佐の歡迎會並びに懇親會。

五月十八日—二十一日　旭川騎兵第七聯隊にて營內合宿馬術練習を行ふ。伊達宗文、高杉直幹、脇田代子郎、森山武雄、大迫明德、植村勘一（以上本科）池內武夫、黑澤良雄、佐藤弘隆（以上豫科）、齋木正彦（農實）參加。

五月二十一日　第五回全日本學生馬術選手權豫選を騎七にて行ひ植村勘一北海道代表となる。

六月三、四日　仙臺における東北大主催第九回馬術競技大會。本科伊達宗文、大迫明德、植村勘一、豫科池內武夫、佐藤弘隆、澁谷周平、實科齋木正孝、福光幸彦。本科十八校中五等。

七月十六日　第五回全日本學生馬術選手權大會。於習志野。植村勘一、七位となる。

七月二十二日　陸大にて第十回インターハイ。池內武夫、澁谷周平、佐藤弘隆、出場。

八月十三日　北海道乘馬大會を本年は第七師團乘馬大會として開催。障碍一等に吉見、三等に久葉。綜合馬術一等に植村、二等に高杉、三等に吉見。

九月二十日　秋季文武會デー馬術部映畫會。午後六時半より九時まで理學部南講堂にて。
十月　二　日　學生ホールにて諸試合報告會を兼ね藤田少佐、阿部大尉、兩顧問歡迎會を開く。
十一月　三　日　第七回明治神宮体育大會馬術競技大會に植村代表として出場第二位に入賞。
十一月十九日　月寒二十五聯隊練兵場にて第一回馬術部競技會。入賞者、一等小村達夫（部長カップ）、二等桶本勝登（伊達寄贈鞭）。
十二月二十五日　仙臺市追廻し練兵場にて第三回對東北定期戰。伊達宗文、滋賀秀明、森山武雄、大迫明德、本田桓康出場して北大勝つ。

昭和九年度

高杉直幹

今年を以て我が馬術部が文武會の運動部の一つとして誕生してから丁度十年になり增々發展進歩し、殊に昭和十四年度の如く實に空前の戰果を納め得た事を心から嬉しく思つて居る者の一人である。省れば我が馬術部が文武會の一部となつたのは私が北大豫科の一年に入學しそして希望と感激を以て馬術部に入部した年であつた。其の時は手綱の持方はもとより鞍のおき方も知らない頃で部の內容或ひは部に成る前の諸先輩の苦勞、更に文武會の一つの部とする爲に各方面に盡力され、遂に部の設立を見るに至つた迄の實狀等なぞは到底知る事は出來なかつたのである、せいぜい毎練習日に如何にして馬の氣嫌を取るかと云ふ事で一杯であつたものである。其の時代からもう十年になるのである。其の間馬術はもとより事馬に關する色々の知識、体驗、更に進んで部と云ふもの內容、諸事務の取扱方等々實に多數の事を敎へられ殊に不肖の如き者に部の主任と云ふ重任さへも經驗させて戴き、どうやら曲り成りにも大過なく六年間の部員生活を終る事の出來たのは、實に歷代部長はもとより月寒の高江さんを始め諸先輩同僚、後輩（と云はせてもらふ事が出來るならば）等の絕大な御指導御鞭撻の御蔭である。この機會に紙面を拜借して厚く感謝の意を表す

次第である。

扨て次に不肖主任時代の昭和九年度の部の事業並びに經過の大略を述べる事にする。

昭和八年度總會並びに送別會　昭和九年二月一日前主任である植村先輩からバトンを受取り例年の事ながら先づ第一の仕事は卒業生の送別會である。其の年の卒業生は昭和七年度の主任であり又全日本學生馬術選手權大會に優勝し我が北大馬術部の名を中央に確認させた東園基文(當時伊達宗文)氏一名であつた。其の日は滿洲事變より凱旋され我が部の顧問と成られた鯰江中佐の歡迎會をも兼ねて行ひ高松部長、三橋、藤田、阿部三顧問並びに松本、半澤兩先輩、部員二十三名の出席を見た。尙昭和九年度幹事は次の諸氏であつた。

主任　高杉直幹。　庶務　吉見一郎、滋賀秀明、澁谷周平。　會計　脇田代子郎、池內武夫。

豫科幹事　前川靜彌、小村達夫、山下正亮。

春季合宿練習　この合宿練習は豫科の學年試驗が終ると直ちに旭川騎兵第七聯隊に宿營し全く軍隊式の生活をし馬術の練習をするのであつて、特に毎夏行なはれるインターハイ出場者の最も大切な合宿である。當時は三月六日に騎兵隊宛正式の申し込みをし八日にはこの參加者の打合せ會をなし準備萬端を終へ三月十日から同十七日迄一週間猛練習をする事が出來た。

參加者　大迫、澁谷、小笠原、前川、小村、山下、高井、菊地、石井、石川、小田、高杉　計十二名

新入部員歡迎會並びに新舊部長歡送迎會　五月五日の歡迎會に先立ち新入部員の初練習を四月二十八日に行ひ多數の新部員を加へたが、この中には滿十周年の今年卒業する十四年度の主任西村君並びに我が馬術部二度目の全日本學生選手權保持者であり卒業後は若き獸醫中尉殿になられる由の菅間君等を始め下條、中尾兩君等も居り當時の同君等を考へると全く今昔の感に堪へぬものがある。

此の日は新舊部長の歡送迎會をも兼ね行ひ舊部長高松先生、新部長黑澤先生始め三橋、藤田、阿部三顧問、高江氏及び松本、半澤兩先輩他部員多數の參會を得た。高松先生は我部初代部長永井先生の後を受け二代目部長として設立日淺い我部の幼少時代とも云ふべき時のよき育ての親としては本より對外的にも色々と御世話下され其の更迭は非常に惜まれ且つ再三御引き止めもしたのであつたが、以前から非常に御關係の深かゝつた他部の部長後任とし

て人情上から止むを得なかつた狀態で遂に我が部々長を去られる事になつたのであるが、しかし先生は同時に我部の顧問となられ又其の後任には獸醫學の權威であり乘馬部隊は本より各馬事關係界に信望の人ありと云はれる黑澤先生を迎へる事が出來た事は非常に幸な事であつた、先生はいつも圓滿な殊に御挨拶等が名調子な御話振り等は忘れる事が出來ぬものである。

歡迎會は主任挨拶、新舊兩部長の御挨拶等に續き部に功績の多かつた大迫、森山、澁谷三部員にモノグラムの贈呈をなし新學期のスタートともなるべき歡迎會を終へることが出來た。

全日本學生選手權大會北海道豫選　六月三日に旭川騎兵隊に於て選手權豫選を行ふため一日出發、二日は乘馬練習を行ひ翌三日騎兵隊前庭障碍馬場にて擧行す、豫選通過者は大迫明德君、順位は次の如し。

大迫　高杉　澁谷、滋賀、石井、小村、山下、福光、桶本、高井、奧田の順。

昭和六年度主任九鬼誠之助氏の死　六月十六日札幌文化アパートに於て私等の敬愛して居た九鬼誠之助氏の急逝した事を知り部員一同大いに驚愕、其の夜は同所にて通夜を營み生前の思ひ出話の盡きるのを知らなかつた。九鬼氏と私は個人的には深く御交りする機會は少なかつたが馬場に合宿に會合に御目に掛る機會は多く、特に馬術に關しては何も知らぬ私等に親切に明朗に御指導して下ださつたものであつた。御卒業後臺灣の或る會社に御勤務されたが又札幌へ歸られ五月五日の新入生歡迎會後九鬼さんと御會ひしたのが最後だつたと思ふ。實に哀悼に堪えぬものがある。

六月十八日九鬼氏御遺族の方が來札され其の日の午後入棺、翌十九日午後豐平火葬場で荼毘に附し翌二十日午前札幌驛にて遺骨を見送つたのであつた。祈冥福。

第十一回全國高等學校馬術競技大會　七月二十二日東京靑山の陸軍大學校庭に於て擧行されたが我が部豫科小村、前川、石井の三選手出場し奮戰せるも殘念ながら第八位となる。

大會に先立ち七月八日より十二日迄最後の練習を札幌二十五聯隊にて行ひ、同十三日札幌驛發東京に向ふ。一行小村、前川、高杉(石井は家庭の都合により先に歸省)の三名。上野驛にて大迫、小笠原、石井三君の出迎を受け各自宿舍に落着き翌日十六日より二十一日迄陸大校庭に於て練習を行つたが二十、二十一兩日は出場馬にて練習する機

會を得ることが出來た。出場順は抽籤の結果十九番と決る。

當日の三君の減點は小村十二點、前川十四點、石井三點、合計二十九點であつたが第八位となる。五位迄の順位は次の如きものであつた。

第一高校、成城高校、第五高校、第六高校、山口高校。

第六回全日本選手權大會　七月二十、二十九日習志野騎兵學校馬場に於て擧行された。北海道代表として前記の如く大迫明德君が參加し、二十六、二十七兩日同校に於て練習の後大會に出場し奮鬪せるも殘念ながら入賞することは出來なかつた。

北海道乘馬大會及び對東北大定期戰　九月二十四日旭川騎兵隊前庭に於て北海道乘馬大會が開催されたので同日對東北定期戰をも行ふ事とし、大會及び定期戰參加者は二十一日に旭川に向ひ二十二、三兩日は騎兵隊に於て練習を行つたが二十二日晩は東北選手及び北大選手等懇親會を開催し、又二十三日は北大豫科生等は大會前日の宣傳騎乘に參加した。乘馬大會入賞者は如の通り

卷乘競技	一位	石川	二位	前川	三位　桶本
一般障碍	二位	高井			
パン食競技	一位	前川			
綜合馬術	一位	高杉			
選手障碍	一位	高杉	三位	前川	

尙對東北戰は雨中接戰の結果減點四十二點の差を以て北大軍の勝利となつた。

第二回部內乘馬競技大會　十一月十一日我部第二回目の部內競技會を月寒二十五聯隊營庭に於て開催したが寒天にも拘らず來賓各位、一般觀衆多數の來場を得部員一同大いに善戰し盛會裡に閉會する事が出來た。乘馬其の他の點に關して絕大の援助を賜つた二十五聯隊並びに北大畜產學教室の御厚意に深く感謝の意を表して居る次第である。

一般障碍入賞者は次の通り

A　班　森山、山下、桶本、脇田、前川の順

B　班　　石川、菅間、小田の順

尚閉會後將校集會所に於て近藤中佐、山住大尉、宮下軍曹、高江教官、部側より半澤氏、植村氏、他部幹事等集ひ共に會食を行つた。

第一回馬事思想宣傳講演映畫會　十二月八日今井記念館に於て、我が部として最初の公開映畫會を開催し非常な盛會であつた。本映畫會に先立ち十一月二十四日から本格的準備に着手し各部員の役割等を決定、三十日には大迫君他一名は北海タイムス社に出頭其の後援を依頼し承認を得、宣傳記事其の他に多大の御援助を得ることが出來た。北海タイムス社に厚く謝意を表す次第である。十二月四日より八日迄は映畫會宣傳ポスター並びにビラ等を配布、特に七日は街頭に出、通行人の一人々々に宣傳ビラを手渡しする等實に徹底的の宣傳に務めたものであつた。此等大膽な行爲を敢へてした人々は大迫君を筆頭に前川、小村、小池、中尾の諸君及び私であつた。斯の如き宣傳が効きすぎてか開會午後七時と云ふのに五時頃から會集は集り開會前すでに超滿員「招待者以外の方は入場御遠慮下さい」と云ふ張紙を出す有様であつた。當日のプログラムは次の通り、

一、開會の辭　　高杉主任
一、挨　拶　　黑澤部長
一、講演　滿洲に於ける軍馬の活躍　　鯰江中佐
一、映　畫
　一、馬の馴致　二、イタリー騎兵學校野外騎乘　三、グランドナショナル大障碍競馬
　四、鐵塵一蹴　五、ラウンドアップ　六、第十回オリンピック競技　七、ダービー大競馬
一、閉會の辭

鯰江中佐は滿洲事變に御出征の折實戰に參加せる軍馬が如何に活躍して居るかと云ふ實狀を御話し下され聽衆一同大いに得る所があつた。又オリンピックの映畫に先立ち大迫君の解說は實に鮮かなものがあり一段と映畫の興味を深かからしたものであつた。此の際御兩人に厚く謝意を表す次第である。午後十時頃閉會。

冬期合宿練習　十二月二十六日札幌を出發同日午後騎兵隊兵舍に到着。同二十七日より翌年の六日迄軍隊生活と馬術

練習を行ひ一月六日夕刻一同無事札幌へ歸る事が出來た。參加者は次の通り、

半澤、岩橋、森山、滋賀、前川、小村、石川、小池、池田、中尾、永田、小間、岡田、前野、菅間、西村、高杉

以上十七名

以上述べた事は昭和九年度の事業の中で主に年中行事とも云ふべきものであつて、其等の他に四月十四、十五兩日は全日本馬術大會があり植村、大迫、澁谷の三君が出場し澁谷君が第七位に入賞。六月二十日には東北乘馬大會があり植村、脇田、久葉の三君が出場した。尙二十五聯隊での通常練習は一ケ年を通じて二十一回であつた。當時は丁度滿洲事變に當り二十五聯隊は留守隊であり其の爲め練習回數も割合少なかつたものと記憶して居る。又開催せる幹事會は九回であつた。

前記冬期合宿を最後に私の在任中の諸事業を先ず何んとか終る事が出來たのであつた。其の間色々と苦しい事もつらい事もあつた樣であり又自分としては大部皆樣に御迷惑を御掛けした事も多々あつたと記憶して居る。此の點は深く御許しを願ひたい次第である。でも現在私の思ひ出と云ふものは皆、愉快な樂しかつた事ばかりである。重ねて在任中大過なく樂しく過す事が出來た事を部長始め先輩部員各位に厚く御禮致すものである。最後に我が馬術部が以前にも增し益々進步發展せん事を願ひつゝ筆を擱く。

（十五・二）

吉見一郎

昭和十年度

新幹事就任と部員送別並に歡迎　昭和十年度新任幹事として、主任、主將、選手監督、會計主任の新制度を設け、昭和十年一月二十四日學生ホールに於て昭和九年度總會の席上、前年度高杉主任の後を襲ひ新主任脇田代子郎以下左記の如く決定せり。

主任　脇田代子郎　　主將　吉見一郎　　選手監督　大迫明德　　會計主任　森山武雄

外に豫科幹事として

石川　正吉　　小田　昇

右總會終了後同所に於て卒業生送別會開催

植村　勘一　　岩橋　歸一　　久葉　昇

の三君を送る、多年献身貢献されし三君を送り出す事は大なる喜びと共に悲しみなりき。

五月四日に學生ホールに於て新入部員歡迎會を開催新に部員十八名の新進氣英の士を得たるは力強き極なり。なほ同席に於て

小村　達夫　　石井　昌長　　山下　正亮　　前川　靜彌　　福光　幸彦

の五君に其の部につくせる功績を彰し本年度モノグラム贈呈す。

練　習　十年は部員の練習には實に惠まれざる年であつた。第一に例年定期的に行ふ春期騎七營内合宿練習は滿洲方面出動中の部隊馬匹歸還の爲多忙にて許可されず、第二に吾等が唯一の練習機關たる歩兵二十五聯隊の乗馬も騎七同様の理由にて四月上旬より練習不能となり五月四日に到り遂に鼻疽罹病馬を出して二十五頭全部藥殺さるゝに及び練習は全く一頓挫を來たすに到つた。

此所に於て幹事一同種々協議し札幌愛馬會にて早朝一時間をきめ一ヶ月二十圓、五名の豫約にて練習を開始す。勿論之にては充分ならず主として豫科の希望部員を以て之に當つ。此の間畜産學科教室高松教授、黒澤部長、松本荒野顧問等の御盡力により畜産學教室馬を借用する事を得たるは誠に感謝にたへぬ所なり。

斯くて六月十六日に初めて歩兵二十五聯隊の練習を開始され、六月二十二日には新入部員の初練習あり生憎降雨沛然たるものあれど一同元氣に馬裝の第一歩より練習す。

試合と大會

一、東北乗馬大會

六月一日東北帝大主催東北乗馬大會仙臺市に擧行さる。

選手は五月中旬より畜産學教室用馬、或は札幌愛馬會等に於て練習出場するも殘念乍ら全く我軍に利あらず敗

る。

二、日本學生選手權大會北海道豫選

六月九日旭川騎兵七聯隊に於て行はる。

審査委員長　桑田中佐殿

選手　吉見一郎　森山武雄　前川靜彌　石井昌長　山下正亮

高井久芳　松平悌　石井正吉　小池榮一　池田英三郎

永田敏雄　嵯峨亮司

種目　馬場馬術、障碍飛越

選手權獲得者　前川靜彌

三、日本學生馬術協會東北支部大會

七月七日盛岡市に於て、大迫明德、高杉直幹出場するも入賞せず。

四、インターハイ

七月二十一日第十二回全國高校馬術大會於陸大馬場擧行さる。

之れより先六月下旬より選手候補石川正吉、小田昇、西村雅吉、小池榮一の四君は畜産學教室用馬を借用多年宿望の覇權を目指し練習を開始し、殊に七月十日に休暇に入ると共に午前は歩二十五の好意により同隊で練習、午後は更に畜産學教室の用馬にて炎熱を物ともせず猛練習を行ふ、此の間高江、荒野兩顧問の絶大なる指導を得又歩二十五、畜産教室の御厚意を受けたるは感激にたへざる所なり。

斯くて石川正吉、西村雅吉、小池榮一の三君選手として出場せしも惜くも十三位に敗れ無念の悲涙に泣く、されど熱烈なる練習と献身の爭覇戰を顧り更に悔ゆる處なし。天の我に利あらざりしのみ。來る可き年を期せり。

競技種目　障碍飛越（一位成城高校）

五、第七回全日本學生馬術選手權大會

七月二十八日　於習志野

前川靜彌出場するも入賞せず。

六月九日の北海道豫選に入賞、本大會に出場權を得るや以來連日、歩二五、札幌愛馬會、畜產學教室用馬等により猛練習をつゞけ涙ぐましき努力をなしたれど不幸利あらざりしは獨り同君のみならず吾部の大なる悲嘆なりき。

六、北海道乘馬大會

八月二十八日　於旭川市

八月二十四日より騎兵七聯隊に營内合宿し練習を行ふ。

出場選手　吉見一郎　大迫明德　森山武雄　山下正亮　小村達夫
石川正吉　小田昇　菅間威　西村雅吉　小池榮一
永田敏雄　池田英三郎　中尾敦司

入賞者　卷乘競技　一等　石川正吉　四等　中尾敦司
一般障碍　一等　小村達夫　三等　永田敏雄
パン喰競技　二等　小池榮一
大學高校對抗個人　一等　石川正吉　二等　菅間威

大學高校對抗試合に敗れ總長カップ、大毎優勝旗を盛岡高農に奪ばれしは無念此の上なし。

七、第五回對東北帝大戰

九月四日　於旭川騎七馬場

出場選手　吉見一郎　前川靜彌　石井昌長　大迫明德　小村達夫

種目　野外騎乘、障碍飛越

成績　障碍飛越　一六五對一八四
野外騎乘　一三九對一八二

計　三〇四對三六六　（減點法）

にて我軍の勝利に歸す。

障碍飛越は最高一米五〇、連續十二個にて野外騎乘は練兵場にて行はる。

本年の諸試合及び大會は戰へば必ず負け出場すれば必ず敗るの連續にて部員一同悲嘆にくれし所最後の對東北帝大戰に於て勝利を得しは漸く意を安んずるに足りし所なり。

其の他

一、第三回學內乘馬大會

十一月十七日　於步二五營內

步二五聯隊長片山大佐殿を初め來賓多數來場、近年になき盛會なりき。

二、馬魂碑除幕式

六月二十三日月寒陸軍墓地にて步二五戰歿病歿馬の馬魂碑除幕式あり部長部員參列す。

三、映畫會

北海タイムス社後援の下に三越に於て二日間開催盛會なりき。

（十五・二）

昭和十一年度

滋賀秀明

馬術部も創立十周年を迎へることになつた。十年一昔と云ふ言葉があるから十年と云へば可成り長いものだ。特に創業時代の十年であつたから色々の事件もあり、色々の時期もあつた。昭和十一年を回想するとこの年も亦一寸變つた一期であつた樣に思ふ。昭和五年丁度馬術部が創立された年に豫科に入學され、馬術部と共に年をとり成長された高杉、脇田、吉見君等が三月卒業されると之を最後に創業期の苦難を嘗められた規模の大きい人々が後を絶ち、それ

ばかりでなく此の年學部三年目に在籍の部員が居らなかつたので自然馬術部の主流が一年飛び越え一躍若さに張り切つた多士濟々の二年目に移り、從つて馬術部の氣分も一新し、一致團結若さと熱と意氣に燃えてゐた。

私は此の年主任に選ばれたと云ふものゝ醫學部四年目であつたので既に過去の人間、この燃え上つた火の消えない樣にするには精一杯の努力が必要であつた。併し此の一年は私にとつて若返つた樣な懷しい一年であつた。馬術部員として多勢の先輩或は後輩と共に馬の轡を並べ或は共に語り合つた七年間の中で矢張り此の一年が最も印象に殘つてゐる。

幹事交替と豫算獲得　前幹事諸君から事務を引繼いだのが一月二十三日、主任兼主將に私、選手監督に前川靜彌君、庶務主任山下正亮君、會計主任小村達夫君、豫科幹事、庶務西村、菅間兩君、會計小池君、實科幹事小間君、無爲無策の私であるが配するに新進氣鋭、金城鐵壁の堅陣、後に續く一騎當千の若武者共、これだけ揃へば高杉、吉見脇田、大迫君等重砲級諸先輩が卒業された後の馬術部も聊かの搖ぎもない。主任になつて最初の大仕事は豫算獲得の事であつた。それまで餘り關心を持たなかつたこの事にもむきになり二月三日の文武會各部豫算說明會には我が部として絕對必要の九百十七圓を要求し、大いに說明に努め、理事諸君も十分納得したと見えながらいざ發表ともなれば毎年と殆ど變りのないお坐なりの豫算の組み方に憤慨したりがつかりしたり、そして愈々それから一年間遠征に、學內大會に或は又映畫會に我々の熱と意氣に燃えた輝かしい巨歩を全國に進めたのである。

旭川に於ける合宿縮習　先づ順序として部の基礎は乘馬の練習から、練習は合宿からの建前より合宿について書くと例年春冬二回行ふ定期營內合宿は本年も三月十二日より同十八日迄の一週間及び十二月二十日より同二十九日迄の十日間騎兵七聯隊にて行ひ參加者多數あり聊かの事故もなく無事終了、いつもながら隊の御好意には感謝の言葉もない。其の他に五月十四日より同十七日迄は日本學生馬術選手權大會北海道豫選に備へ、七月二十二日より同二十六日迄は北海道乘馬大會に備へて同じく騎兵七聯隊に合宿し、技を練り、團結力の涵養に努めた。

學內馬術大會　回を重ねること四回、年々次第に隆盛となつた學內馬術大會は本年は春酣な四月二十六日月寒第二十五聯隊營庭に於て開催した。當日の日記の一節を拔萃すれば「夜來の雨上がり天氣頗る晴朗、馬高く天に嘶き我等が大會を祝ふが如し、時の立つにつれ人馬一致、人馬不一致の妙技續出し觀衆の聲援を浴ぶ。バン喰競技、騎馬

戰は本日の白眉なり。」と仲々感激した筆法で書いてある。此の日最も名譽あるチャレンジ・カップは桶本勝登君に授與された。

映畫會　馬事思想普及に大きな役割を占め、市民に馴染の深い馬術部主催公開馬事映畫會は十月二十二日午後六時半より本學中央講堂に於て行つた。此の映畫會は實は十月十七日今井記念館にて行ふ豫定をたて準備萬端整へたにも拘はらずフヰルム未着の爲止むなく延期せるものにて開催の當日は生憎素晴しき荒天にて觀衆は比較的少かつたけれど映畫、音樂、說明、場內の整頓共に優れたものであつた。尙當日の上映映畫は昭和十一年乘馬界、全國靑少年乘馬界、ウヰーン乘馬學校、馬の馴致、野外騎乘、乘馬術、グランドナショナル競馬、名馬の譽れ、百姓の寶であつた。

遠乘會　春は嫩葉を踏み、秋は紅葉を求めて山野に馬を走らせるのは馬に親しむ者のみが知る大きな喜びの一つである、此の年二十五聯隊の御好意によりこゝ數年來絕えてなかつた大規模な遠乘會を催した。秋も最中の十月二十五日軍隊側より將校、下士の參加もあり又先輩の參加もあり打連ねた總勢三十四騎、堂々たる隊伍に幾々の馬蹄を轟かせ、紅葉綾なす定山溪往復の快を恣にした。遠乘は喜びであると共に嚴格な一つの馬術訓練である。此の年を最初として現在に至るまで年一回乃至二回斯樣な遠乘會の催されてゐるのは喜びに耐へない。

諸試合遠征　遠乘よりも、合宿よりも華かで平素の練習に槿上花を時に雨を添へるのが遠征である。學生スポーツの目的は勿論体力の增進、强固なる意志の訓練にあるので遠征したり、競技に出るにあるのではないが、競技に出た以上は萬全を期して勝たねばならぬ、此の年幸に私は大抵の遠征に同行することが出來た。出發に際しては黑澤部長初め部員一同の熱烈な壯行の辭に送られるのが常であり、其の時遠征選手、並に私はいつも男らしく死を賭して戰つて參りますと必勝を決意して立つたのであるが時には犬死に等しい拙戰に破れ、又時には天運に見離され此處に善戰の記錄と共に幾つかの涙の戰績を並べなければならない。六月十三日、十四日仙臺宮城原練兵場に於て開催の東北乘馬大會に遠征、全國高專對抗に豫科軍(石川、西村、池田、永田)大學對抗に本科軍(滋賀、石井、松平、桶本)出場、豫科は出場校四十餘校中第六位を獲得す。

七月十九日　東京陸軍大學に於ける全國高校乘馬大會に豫科軍出場し第三位を獲得す。近年稍低調を辿りし豫科軍

に一陽來復の思ひあり選手、石川、小池、永田、補缺菅間なり。

七月二十六日　習志野に於ける全國學生馬術選手權大會に前川靜彌君出場し惜しくも第十二等となる。

七月二十五、六日　旭川に於ける北海道乘馬大會に本學より二十數名の多數が參加し、大學高專對抗綜合馬術に於ては豫科軍（西村、石川、小池）優勝し、前年涙を呑んで盛岡高農に渡した北大總長杯及東日優勝旗を奪還した。其の他個人賞を獲得したものも頗る多い。

本學對東北帝大の定期戰は九月六日仙臺宮城野原練兵場に於て行ひ、滋賀、山下、松平、高井、桶本、石川の新鋭をすぐつて東北帝大の古豪と對戰し五十三對八十の大差を以て之を破り四個年の連勝を獲得し此の年初めて購入した第一回の優勝盃を獲得した。今日尙爭覇の的となつてゐるこの優勝盃は東北大大山主任と私とで擇んだものなので之を見る度に感慨深いものがある。此の日東都に覇を唱へる强豪日本大學とも對戰し之をも鎧袖一觸の下に擊破した。

十一月八日　本學豫科對弘前高校第一回馬術定期戰を弘前に於て行つた。抑々此の定期戰については數年前より交渉があつたものゝ種々の障害ありて行はれなかつた處本年の全國高校馬術大會の頃より急に話が進捗し此の日開催の運びとなつたものである。豫科より石川、兒玉、下條、中館の四選手出場大いに奮戰せしも利あらずして敗る。其の後私は此の定期戰については多くを聞かないが今でも存續してゐるのだらうか。して優勝盃はどちらの手にあるのだらうか、私の主任時代に初めたものだけに甚だ氣にかゝる。

十一月末より十二月初にかけて行はれた仙臺東京間長途騎乘に荒野顧問出場し群雄を斥け堂々二等に入賞さる。

以上は本年度諸事業の概觀を述べたものだが、最後に一寸付け加へて置きたいのは此の年陸軍特別大演習を北海道にて行はせられる事と成り、畏くも　陛下には錦旗を此の地へ進められ、本學は行在所となるの光榮に浴した。此の光榮の記念事業の一つとして我が馬術部は自馬購入の計畫をたてた、此の計畫は結局種々の障害に逢會し實行されなかつたのだけれど幸ひ私の手許に當時の文武會理事長への請願書があるから御參考迄に載せておく之を讀むと當時の意氣も亦盛であつたと思ふ。

自馬所有ニ關スル理由書

當馬術部ハ日本唯一ノ馬産地北海道ノ帝大馬術部ナリ、故ニ其ノ練習機關亦多カルベキ事ハ當然ナルベシ、然ルニ事實之ニ反シ僅ニ歩兵第二十五聯隊用ノミ、然モ土曜日曜札幌鐵道乘馬部々員トノ混合練習ニシテ其ノ絶好ノ練習季節春季秋季ハ同隊ノ島松野外演習及機動演習ニテ殆ンド練習日ヲ有セズト云フモ過言ニアラズ、又旭川騎兵隊ハ我ニ多大ナル援助ヲ與フルモ何分遠距離ニシテ其ノ旅費宿舍料及其ノ交渉等ノ關係ニテ之ヲ充分利用シ得ザルハ勿論ナリ。

ラ得ズ、マシテ我々部員ノ之ヲ充分利用シ得ズ、又札幌愛馬會ニ之ヲ求ムルニ其ノ頭數三—四頭ニシテ市民ノ需要ヲ滿ス事ス

斯クノ如ク練習機關不足ノ爲、各人ノ技術ノ練磨ハ勿論、重要ナル試合ニ臨ム前一ケ月以上練習ヲ行ハズシテ試合ニ出場スルガ如キ實ニ馬術部及本學ノ名譽ヲカケテ出場スル我々ノ慚愧ニ堪ヘザル所ナリ。

繼ヘツテ當大學文武會各部ノ狀態ヲ觀ルニ各部共堂々タル練習機關ヲ有スルハ勿論、其ノ設備亦完全ナリト云フベク獨リ我部ノミ取殘サレタル感アルハ遺憾トスル所ナリ。

然リトハ云ヘ部員ヨク一致團結練習ニ勵ミヨク活躍シ本年度ニ於テモインターハイ第三位對東北大戰四ケ年連勝北海道乘馬大會優勝等實ニ本州各地ノ諸校ノ心魂ヲ寒カラシメタルモノナリ。

我々ハ今後尙先輩ノ殘セシ歴史ヲ奉ジ身心ヲ鍛錬シ技術ヲ練磨シ充分ナル活躍ヲナシ全國ニ覇ヲ稱ヘル爲ニハ之等貧弱ナル練習機關ニテ滿足スベキニアラズ。

此所ニ我々ハ新地天ヲ開發シ部ノ發展ヲ期スル爲メ今秋ノ陸軍特別大演習行幸並ニ馬政第二次計畫實施紀念事業トシテ部長始メ諸先輩各部員一致團結我ガ馬術部自ラ乘馬ヲ所有セン事ヲ決議セルモノナリ。

其レニ要スル馬場厩舍ノ敷地ノ下附ヲ仰ギ厩舍ヲ建築シ自馬ヲ繫養シ部員ノ向上心ノ要求ノ一部ヲ滿タシ其ノ愛馬心ヲ涵養シ身心ヲ鍛錬シ一致團結親睦ノ實ヲ擧ゲ學生馬術學生スポーツノ本領ヲ發揮セントスル也、

故ニ敷地其他乘馬所有全般ニ關シ絶大ナル御援助御斡旋ヲ御願ヒ致度御願ニ及ビタル所以ナリ。

昭和十二年度

山下正亮

皇紀二六〇〇年の意義深き年を迎へ曠古の聖戰第四年に及び、興亞の大業は萬難を排し着々歩武を進む。而して我が馬術部も創立十周年を迎へ益々隆盛となりたり、昭和十四年度主任西村君之の十周年を紀念し馬術部十年史を編纂せんとす、我も昭和十二年度主任とし其の一部の擔當を命ぜられたるは誠に光榮と感ずる次第なり、次に主なる行事に就て述ぶれば

昭和十一年度總會及び卒業生送別會（一月二十二日）　卒業生として滋賀秀明、森山武雄兩氏に「ペナント」小間良彦氏に紀念品を贈呈し、本年度幹事として主任山下、主將桶本、庶務高井、會計石井、選手監督松平任命せられたり。

對札鐵練習問題（一月二十二日）　出席者とし北大は半澤、高杉先輩、外幹事前川、札鐵は藤本氏外四名で約二時間に渉り協議を行つた。而して對札鐵練習に關し一言すれば昭和十年頃より何時とはなく札鐵の紳士が練習に來り乘馬を勝手に引出し、部員は乘馬少き爲、駄馬にて三回も交代練習し、又手前も何も考へず運動する故、我々の練習を妨害するが如き有樣で、豫科時代の我々は默認するを得ず主任に其の處置を願ひ一方皆で日曜日等には今迄より早く行き良き乘馬に皆鞍を置き、乘馬の奪ひ合ひを起す有樣であつた。其の後札鐵より來る者も次第に減少し問題とするに當らなくなつた處が一月始藤本氏より札幌乘馬大會を合同で開催したき旨の手紙を受取つた。之れに關し幹事としては札鐵が聯隊の練習を中止しない以上乘馬大會の事に關しては何等協議するの價値なしとの意見を有して居た。協議に入ると藤本氏は札鐵の昔から今日に至る練習機關の變遷を述べて歩兵二五聯隊に關しては昭和十年或る方法により副官並びに聯隊長の許可を得、又七師團獸醫部の許可を得て練習を開始せり。我部は札鐵と何等かの交渉をなさんとしつゝ日を過し今日に及べり。然るに札鐵側より練習に關し何等かの協定を希望し來れり。之に對し半澤先輩並びに部内に於て昭和十年札鐵練習開始當時より之を阻止せんとの熱望あり、又歩兵二五聯隊に直接談判

したること及び部の練習不足に對することを述べ又自分も之れを補足し强硬に練習中止を勸告したるも、聯隊の許可師團の許可を得たる以上、中止せしむることは不可能事と考へ、又先輩も之のまゝ反目しつゝ練習するは交渉の下手な學生を不利に導くことを述べ、札鐵に最大の讓歩を希望し、練習規約を作り（別紙）、部員には練習機關を有効に使用し又札鐵を好敵手とし（前年全國鐵道大會で優勝せり）練習試合を行ひ一層奮勵努力する樣希望して置いた。

乘馬大會（北大・札幌OB・札鐵合同乘馬大會）（五月二日）　八時過より風雨起るも一同元氣にて開會し、二人八脚、學生障碍、紳士琴平、將校障碍、幹事對新人チーム障碍飛越、札鐵部處對抗、OB對札鐵、學生對抗リレーを行ひ、學生障碍の一位は西村君、幹事對新人障碍は新人の勝、OB對札鐵は札鐵、對抗リレーは本科新人の占むる處となり、當日の實況を十六ミリに撮影し部に殘してある筈である。

全日本馬術競技大會（五月二十二・三日　於習志野）　學生乘馬團休代表選手障碍飛越競技に石川君出場し大いに力闘第一位を得、又北大は團体に於て優勝し、優勝盃を贈らる。當時石川君喜びて「御後援と好運に惠まれ幸ひ光輝ある我が馬術部の傳統を死守するを得た、喜んでくれ。　三笠宮殿下　閑院宮　閑院若宮　北白川宮殿下の御台臨の下に大優勝盃を手にし習志野原頭感涙にむせび泣いた」と。

東北學生馬術競技大會（五月二十九・三十日）　桶本、石川、松平の三名、全國學生團体競技に出場、第六位を獲得す。豫科は都合により出場せず。同大會出場の爲選手三名、外豫科インターハイ選手は連日荒野教官の御指導の下に畜産用馬を用ひて練習し技術は相當の進歩をしたり。

高校馬術大會（七月十七日・十八日）　山本、石井、兒玉、永倉出場、第一回戰不戰勝。第二回戰に山形高校に勝ち、第三回戰に第六高校と對戰し善戰之れ努めたるも武運拙く軍門に降つた。

對東北定期戰（七月二十三日　於旭川）　天氣良好人馬共に張切り、兩軍共善戰せしも終に東北軍の爲に破れ、過去四年勝ち續けたるに本年破れ汚名を殘せしを詫び、今後の必勝を期す。

選手　北大　前川、高井、石井、山下、池内、小田（補缺　西村、菅間、永田）
　　東北大　增田、宮川、佐藤、時枝、會根、松岡

北海道騎乘大會　學生團体は北大、北大豫科、東北大、盛岡高農、盛岡醫專、弘高、麻布獸醫の七校にて相當の苦戰を覺悟す、成績次の如し。

大學高專選手綜合馬術、北大本科優勝し大每優勝カップを授けらる、出場者山下、前川、松平、同個人として山下優勝。

一般障碍　二位　山下。三位　石井、前川、池內。

バン喰　一位　松平。琴平　一位　西村。二位　前川。

全日本學生選手權大會（八月一日　於習志野）　高井君出場善戰せしも豫選に破る。

帝國大學馬術聯盟第一回馬術競技大會（八月四日　於學習院馬場）　以前より帝大聯盟結成の氣運はありたるも今回松平山下は東大主將水野君、工藤君と色々協議し其の後手紙の交渉により結成を見たるは喜ぶべきことにして、今後は之れを横の軸として馬術に精進すると共に高校馬術を指導し行くべきである、次に成績を擧げれば

北海道帝大
- 京都帝大　二二〇
- 東北帝大　二四三
- 東京帝大　六〇
- 北海道帝大　四一

北海道帝大
- 京都帝大　二一三
- 北海道帝大　一八八

第一次戰

二番　石井（三鋒）　馬場及び障碍見事に飛び落下一點好スタートをなす。

四番　松平（雲霧）　又よく飛び一拒否に落下二にて順調。

六番　石川（花馳）　見事なる脚にて馬を御し、敵主將水野に勝つ。

八番　高井（河水）　敵將工藤、相當落下拒否後高井見事なる鞭の使用でさすが選手權出場選手を思はせた。

十番　山下（玉錦）　一番の穴馬東大は山下の失敗により勝利は我にありと樂感するも、さるもの山下よく飛びて勝利は北大に擧る。

決勝戰

二番　松平（雲霧）第一回戰に騎乘せる馬、よく乘り無減點にて好調。

四番　桶本（三鋒）石井と交代せる桶本又元氣に飛び好調。

既に京大は朝雪號にて失權し相當の點數の差あるも相當の難馬なり。

六番　高井（宮梅）京大森岡君27點の處、高井がんばりて21點にて着々差をつける。

八番　山下（清竹）京大廣瀨君22點の處よく馬を誘導し7點の減點を得。

十番　石川（朝雪）京大常保君失權の朝雪號。馬場は實に見事に出來た。

第一障碍は無難、第二障碍拒否、膠着、時間は次第に過ぎ終に失權となる。

常保君の拍車痕の爲に白馬朝雪の腹は眞赤にそまつて居た。

各人の確實なる得點で終に優勝し、學習院馬場に於て帝大聯盟の初の覇權を獲得し、東久邇宮盃を拜受し六人男泣きに泣いた。

	馬場	障碍	合計		合計	馬場	障碍
松平	0	0	0	（雲霧）	6	0	6
桶本	6	3	9	（三鋒）	10	1	9
石井	3	18	21	（宮梅）	27	0	27
山下	4	3	7	（清竹）	22	5	17
石川	1	150	151	（朝雪）	155	5	150

全日本學生軍對北海道軍對抗馬術競技大會（八月二十四日）八月八日學生馬術協會より北海道遠征する故準備をたのまれ、其の後諸先輩及び在札部員全部及び札鐵の力を借り努力をなす。

二十二日　午後宍戸閣下以下十二名來札し色々と協議をなす。

二十三日　午後より練習開始。畜產馬場も、障碍の增設、地ならし等をなし大會場らしく見えたり。

二十四日　午後一時より試合を行ふ。
次にその成績を上げる。

全日本學生軍（勝）

1 石崎壽一（蘭高）二一・
3 鈴木　丹（金草）一八・
5 武田　正（澤靜）二六・五
7 中込義夫（栗春）五〇・五
9 三浦哲太郎（根文）一七・
11 有賀正五郎（鄉林）三〇・七五
13 登山威夫（宮武）二三・五
15 藤井昇平（金駿）二七・
17 池田和夫（釧山）二五・
19 加藤信行（本佐）二三・五

全北海道軍

2 大沼忠治（鄉林）四七・
4 河村　寛（本佐）二八・
6 藤本繁雄（宮武）二〇・
8 藤岡五郎（金駿）三七・五
10 山下正亮（釧山）二四・五
12 西野勝美（蘭高）一五・五
14 大澤辰治（金草）五二・五
16 高杉直幹（澤靜）二五・
18 齋木正孝（栗春）六二・
20 松平　悌（根文）九・

個人障碍飛越（北海道）

21 佐々木重郎（蘭高）二〇・
22 高井久芳（本佐）一四・
23 細岡（根文）一四・

試合終了後は職員集會所に於て懇親會を開き全く盛會裡に大會を終了することが出來た。
尙當日は多數の觀覽者があり、試合に先だつて國旗揭揚、佐藤男爵を始め北海道長官、北大總長の祝辭があり、選手代表三浦哲太郎君の宣誓文朗讀等があり、頗る嚴肅の中に開會式が行はれた。

對弘前高校戰（九月十二日）　豪雨にて五寸以上も水がたまり、兩軍共泥まみれとなり大いに死鬪を續け、一八〇對一二五點にて北大豫科初の優勝をなす。

北大	中館	8	（宮武）	11	大田	弘高
	半澤	26	（新川）	9	横山	
	永倉	6	（北幸）	46	西木	
	兒玉	16	（金駿）	68	越山	
	石井	40	（鈴山）	40	石橋	
	岡田	29	（慶庵）	6	鈴木	

軍旗祭歩二五馬術大會出場（九月二十二日）　對札鐵戰各十名づつ出場せるも問題とならず、三五九點の差を以て大勝す。

出場者　前川、山下、桶本、高井、松本、石井、池内、小田、西村、永田。其の他、個人賞多數。

文武會デー　一泊騎乘行軍（九月二十四、五日）　一ケ年間の練習の効果を表すは遠乘である。而して今年は歩兵二五聯隊の絶大なる御援助によつて初めて一泊行軍を實施し爲し得た。部員の親睦を計り得たるは勿論多くの經驗を得て益する處が多かつた。

秋空の澄み切つた日、午前六時二〇分全員厩舍前集合横山中尉殿の訓示を受け豊平峡に向け出發した。途中簾舞にて水興、定山溪にて大休止、其の後豊平峡の絶景を探勝し、午後四時定山溪玉川に到着、馬匹の宿營準備、夜は各班別に不寢番をなし、諸種の休驗をなし、二十五日午前六時起床各人元氣に馬匹手入朝食し、八時過定山溪を出發した。途中簾舞にて小休止おいらん淵にて大休止、午後三時四〇分全員無事故で元氣一杯營門を入つた。

參加者

歩二五　齋藤大尉、横山中尉、原田曹長、中山軍曹、高江氏

學生　山下（栗春）、桶本（盛澤）

第一班　長　前川（節忠）、松平（節忠）、菅間（長進）、渡邊（名迫）、小林（富田）

第二班　長　石井（澤靜）、西村（福勝）、永倉（藤平）、福本（桑豊）

第三班　長　池田(山城)、吉田、(宮浦)、中館(愛國)、關(桑龍)
第四班　長　高井(宮崎)、兒玉(岡田)、岡田(松氏)、吉田(名照)
設營班　松平、小田

映畫會（於時計臺）（十月十七日）　我部と軍用犬協會と共催にて時計臺にて映畫會を開催した。

映畫名は

一、トラケーネン牧場、乘馬になる迄、高等馬術、ウインの乘馬學校、乘馬術、長途騎乘、母の心。

卒業生送別試合（十一月六日）

在校生 出場番號	人名	減點	馬名	減點	卒業生 人名	出場番號
9	山本(豫三)	6	(澤靜)	3	石井	2
7	池内(本二)	0	(福勝)	16	桶本	4
3	石井(豫三)	11	(鋼矢)	0	前川	6
1	石川(本一)	8	(根文)	0	松平	8
5	下條(本一)	8	(本佐)	3	山下	10
總減點		33		22		

故須田藤吉騎兵少尉告別式（十二月十三日）　馬術部の恩人須田氏は上海戰に於て戰死され、告別式を小樽市淨應寺に於て行はれ、部より花環を贈り、OBより松本、半澤、荒野氏、部より山下、高井、池内參加した。

以上で大体を終るが此の一ヶ年程部長殿諸先輩、並びに歩兵二十五聯隊、其の他の諸氏に御世話になつた事はないと考へる。全く幹事並びに部員一同の感謝する所である。

最後に我が部の發展と御多幸を祈り筆を擱く。

昭和十三年度

池内武夫

書かねばならぬとの事なので漸々筆を執りはしたものゝ朧ろな記憶を頼りに綴る辿々しい文章が活字になるかと思ふと冷汗が流れる。

出鱈目や駄法螺も駄辯つてゐる中は罪が淺いが活字に載つて殘るとなれば空恐しい。以下精々正確を期し乍ら脱線せぬ様慎しみつゝ私見をも加へて十三年度を顧る事にする。

山下主任からバトンを受けついだのが十二月末の事だつた。帝大聯盟戰に於ける優勝を初め華々しい業蹟を殘した一流戰士が功成り名遂げて揃つて卒業され新人のみ殘る馬術部を引受ける事は隨分心細くもあつたし、省みて自己の手腕人格の足らざるを思ふ時、私が厚顏しくも主任となつた事は大きな誤りではなかつたかと常に心苦しく思ひ續けたものだつた。

それに銓衡制度の缺陷に起因して幹事會組織の問題が少しく圓滑を缺いて東奔西走させられたりして隨分厭な思ひをさせられたものだつた。要するに私の主任としてのスタートは決して順調であつたとは言難い、後に起つた不祥事件をも思合せると初期の困難を超へる爲の努力は知らずして私をより大なる苦難へ導いたものであつた。曲りなりに幹事會は出來上つたが、一月下旬の總會までを實際の仕事をしながら舊幹事會の意志のまゝに動かねばならぬと云ふ事は隨分變なものだと思ふ。

此の期間の大きな行事は十二月下旬の旭川騎七に於ける合宿である。部外からは醫科の藤岡君を加へて本料豫科實科の混合軍であつた。一人三頭と割當てられ然かも最惡の筈の馬さへ一米を樂に飛ぶ優秀さに加へて教官佐武中尉殿が感激に價する程の便宜を計らつて下さつたし、合宿員の氣も良く揃つたので愉快な合宿として今でも能く印象に殘つてゐる。

一月二十二日總會を開き卒業部員諸兄の送別會をも兼ねた。卒業と云ふ祝すべき事實の爲の離別ではあつたが、矢張り人に別れると言ふ事は限りなく淋しく感ぜられた。此の日以後は名實共に私達が獨り立ちをし、またせねばなかつた。三月再度の合宿までは豫算を樹てたり、スケジュールを作つたりで忙しいながらも近く實行に移さるべき抱負野心を懷いて樂しく張切つてゐたものだつた。

三月の合宿は古馬一頭未調教馬一頭の割當で乘馬と云ふ點では決して惠まれたものではなかつたし、人數も少くて餘り充實したものではなかつた樣に思はれた。此の合宿が終つた時私には執るべき方針（それは就任當時から抱き主任日誌の序文に記したのであつたが）がはつきりと定まつた。部の狀態、部員の練習技術等よりして明年を期して總てを進めよう、本年は明年の捨石に仕ようと決心したのであつた。

結果を次年は大きく求めようとする爲には其年を或程度まで犧牲にせねばならなかつたし、此の方針の故に擧得べき成績をも擧げられなかつたかも知れなかつた。私の方針は誤つたものであつたかも知れない。今でも勝敗に關する限り此の疑問から逃れる事が出來ないでゐる。然り乍ら本年度の輝しい戰績を見る時、人こそ知らぬ私は秘かな滿足を覺えるのである。四月に入つてからは新入部員を迎へる爲の、及び迎へてからの諸行事をなしつゝ私等は第四回札幌豫乘馬大會の準備を進めねばならなかつた。前年度の豫算の三倍を申請して果して何の程度まで認められるか、定期日は迫るし、協會から通知は來ないし、めくる暦の一枚々々に私達の惱みは深くなつた。結局中島公園、圓山公園等の候補地を捨てゝ最も無難な畜産馬場を會場に決定してからは總てを此標準に則つて準備は漸く本格的に進捗しはじめた。

兎に角月寒練兵場から學内とは云へ札幌市内に會場を移したのは私達の永年の希望の實現だつた。また今迄の部内大會の形式より一歩を進めて一般的なものにしたいと云ふ私達の計畫は先輩諸氏や傳法、松橋兩氏の御援助に依り一層具体化され、曲りなりにも實現した。

此年はまた初めて市内に宣傳騎乘を行ひ、一層景氣を添へる事が出來たのは大井川部隊の格別な御厚意に據るものであつた。大會の模樣は別に記錄されてある筈である。新案の餘興競技等も好評で、人馬共に無事終了した時は全く嬉しかつた。御援助を惜しまれなかつた關係各方面や先輩方及び手足の如く能く働いて呉れた部員諸君に再び感謝し

たい。

次は一足跳びに七月六日の帝大聯盟戰に移る。此間には文武會デーを利用し、全日本選手權豫選も兼ねた騎七の合宿があつた。聯盟戰は前年が第一回であり、その制覇は先輩の輝しい功績の一つであつた。その年は東北帝大を當番校として仙臺で行はれた。これに先立ち私達は馬學教室の御厚意に依り畜産馬場で猛練を重ねたが、實の所私にはこれであの燦たる大銀盃を守り得るとは到底考へられなかつた。

メムバーの點でも病後の小田君や複雜な事情に縛られてゐた石川君にも無理に御願ひして漸く人數を揃へて出發した程だつた。戰ひの結果は記錄にもある通り第二位となり賞盃は仙臺に留つた。結果から觀れば東大北大互に强敵と目してその對抗戰に主力を注いだ爲に思ひも寄らぬ東北大に漁夫の利を得られた形となつた。勝敗は問はず、要は自己の最善を盡すに在るとは能く言はれることである。然しそれは老人の戰である。私達も確かにベストを盡した。否實力以上に戰つた。然し若人の戰には「石に嚙りついても」の烈しい鬪志に滿ちたものでなければいけないと思ふ。私達は此の重要な最後の五分間的頑張りに些か不足してゐたと思はれた。畢竟自他の力倆を充分に知らなかつた事に起因すると考へられる。「敵を知り己を知りて戰はゞ……」と喝破せる孫子の言は宜なるかなだ。此の試合に際し私は敢へて專制的な態度を執つて事に處した。或場合には敢へて無理をも强ひねばならぬ辛さ、云はば主任と云ふポストが逆に主任に與へる苦しみを味ひ乍ら心で泣いて詫びつゝ特に某選手には氣の毒な事をした。此事は後日の惡い思出として今も心に殘つてゐる。

兎も角も一荷下ろした氣樂な氣持に吻としながら歸札した私を待受けてゐたものは實に不愉快な事件であつた。これは誰に乘せるべき事柄ではないかも知れないが、私の主任時代の一年を述へるにはどうしても觸れずにをられない問題である。私達の少くとも私の計畫が七月以後は龍頭蛇尾式に消極的になつた事は全く此の事件が深く原因してゐるのである。然しこれ以上は深入りする事は避けたい。

インターハイは七月三十、三十一日の兩日擧行され永倉、福本、小林、岡田の四君を送つた。今は亡き石川君が得意のヘルメットを被り、元氣に若い人達を監督されたさうだが、奮戰してベストエイトに殘るも入賞を逸したのは殘念だつた。永倉君を除くのみで出場する次年の大會には多大の期待を賭けはしたが、慢心の生ぜぬ樣注意を怠らず一

屑絞つたものだつた。

全日本學生選手權は八月十四日後樂園スタヂアムで行はれ私が出場した。敗將兵を語らずとか默つて居れば少しは利口に見えるかも知れないが、それでは記錄の責任を果さぬ事になるから敢へて筆に載せる。此の爲の練習は春以來書産乘馬やら自宅の愛馬を以て、凡ゆる機會を利用して私としては出來る限りの事をなし、先述の事件で受けた打擊に兎もすれば挫けさうな心に鞭つて出場した。前々日の抽籤では良い馬を引當てゝ悅んだが、當日落鐵の爲補缺馬に代へ、且つ準備運動すら十分に行ふ暇もなかつたので、技術未熟と相俟つて第一豫選すら通過し得なかつた。此間終始色々と御骨折を頂いた下條君に御禮を述べたい。

引續き旭川での合宿が始つた。春季冬季と異り野外騎乘の豪快味を滿喫出來るのは此の時の合宿である。

八月十九日には東北大の遠征せるを迎へて定期戰を行つた。メンバーは小田君を主將として菅間、西村、山本、池内の五名大差を以て樂勝した。これは全く相手が弱かつた爲で「弱敵と見て侮らず」の心掛こそ忘れはしなかつたが私達すら全力を盡してと云ふ氣にすらなれない位だつた。然し續く二十一日の北海道騎乘大會の大學高專對抗障碍では自他共に認めた優勝候補の私達も團体個人共に東北大選手に覇を制せられて寧ろ啞然としたのだつた。

「運」と云ふものも及ばない程の技術的隔差は所詮彼我の間には存在しなかつた。「運」で片附けるのは卑怯かも知れないが試合には良きにつけ、惡しきにつけ「運」が附纏ふものであると私は信じてゐる。運命論者と自任してゐる譯でもないが、思はぬ好成績を擧げた場合には忘れ勝ちで、惡しき場合のみ口にするからこそ、所謂「敗者の辯」と混同されるのであるまいか。

九月二十四日に弘前で對弘高戰が行はれた。送つた選手は永倉、關、岡田、福本、小林、山根の六君であつた。これも當然の勝利を大差を以て得たと云ふの外はない。豫科軍の實力は益々充實し來り、次年に對する期待は彌々增大せられた。

道南騎乘大會は函館乘馬倶樂部の主催で函館競馬場に九月二十四、五兩日行はれた。仙臺への私事旅行の歸路私が見學旁々參加したが、私達の札幌大會とは大差のあるのを知り、私達學生の仕事が清潔純粹なるを覺えて心强く思つた。

十月十三日には遠征報告會を行ひ、同席上で、豫ねて御内諾を得てゐた田代大佐殿、箕輪大佐殿にも顧問を御願ひ

した。

十月二十二、三日には江別一泊遠乘會を催した。秋晴の好天に惠まれた七〇粁の行程は樂しいものであつたが、學期試驗を前にした實科の人達が參加が出來なかつたのは氣の毒であつた。

十一月に入つては映畫會の準備に逐はれた。先づ一日に理學部で試寫會を行ひ、好調に終了して氣を好くし、五、六兩日今井記念館で一般に公開した。兩日共に盛況ではあつたが、觀衆は何日もながらの定まつた範圍の人々の樣に見受けられた。地方へ進出する樣にと種々の人々から勸められ、私も早くから此事を考へてはゐたが、七月の例の事件で打のめされた私には幹事諸兄の氣乘りせぬ此の企てに敢然と乘出して行く勇氣はなかつた。馬事思想普及映畫會と銘打つ以上、一つの企業としても、催しの意味を尊重する上からも、これは何とかして欲しいものと考へてゐる。舊套依然として札幌市内に執着する事をのみ考へず、地方へ進出する機會をも捉へて欲しいものだ。此事は私の私的計畫中にはありながら實現しなかつた事は何としても殘念だし、又申譯無くも思つてゐる。

十二月下旬の合宿はその許可方を再三騎七に御願したが隊の御都合上殘念乍ら遂に不可能となつた。不止得畜産乘馬と歩兵二十五聯隊々馬を拜借して冬季休暇中特別練習を行つて之に代へたのだつた。

他方十一月下旬より幹事の詮衡を始め幾多の曲折を經て西村君を主任幹事とする新幹事會が公式に決定したのは一月中旬だつた。定期總會で肩代りをした私達は後は唯卒業を待つだけであつた。

筆を擱くに當つて憎れ口を叩く事にする。

どうも今の若い連中は利口過ぎる傾向がある樣だ。もつと馬鹿に甘んじてゐる人が欲しいものだ。古來「緣の下の力持」は馬鹿と呼ばれるのが通り相場だ。然し此の愚しい役者の居ない馬術部を考へる事は恐しい。若い人達は進んで馬鹿になつて頂きたい。外へ出て優秀な成績を擧げた選手は勿論部の功勞者ではあらう。彼は華かな表面に立つ。誰もが絶讃を浴せる。然し裏面を覗くのは誰だ。緣の下を窺つて感謝するのは誰だ。此點部の役員並先輩諸氏も活眼を開いて花形役者に呈する讃辭の十分一を馬の脚に割いて欲しい。一握りの大麥すら驕れる肥馬よりは愼しやかな痩馬に與へた方がどんなにか効果的であらう。部をリードする人達も選手の養成のみに走る事なく、私の所謂「馬鹿」の養成にも意を注いではどんなものだらうか。　妄言多謝

昭和十四年度

西村雅吉

部長更迭と顧問異動　昭和九年以來五年間部長として我部の爲に種々御盡力を賜つた黑澤教授には公務益々御多端の爲部長辭任を申出でられた。先生多年の御功績に鑑み部員一同その御留任を懇望したが、先生の辭意堅く依て止むを得ずこの御申出を承認、後任は同教授の御推薦により理學部太秦教授と決定、四月二十四日新入部員歡迎會の席上新舊部長の歡送迎會を行つた。

多年我部の顧問として御骨折下さつた畜產學教室囑託荒野寅雄氏には滿洲國に赴任されることになつたので四月十九日黑澤部長以下二十數名小宴を催して同顧問在任中の勞をねぎらひ、その行を壯んにした。同氏の後には岡田騎兵大佐が囑託となられたので、我部も同大佐に顧問をお願ひした。前年來同じく顧問として競技會其他の會合に屢々臨席、部員の士氣を鼓舞された配屬將校田代步兵大佐も八月初旬早稻田大學の方に轉任されたので、部では後任の太田砲兵大佐に早速顧問をお願ひした。

部員と練習狀況　四月二十四日新入部員歡迎會を催し、新入部員二十五名を迎へたがその中には蒙古自治政府留學生六名あり、我部にも興亞の氣分漲り大いに賴母しく感ぜられた。事變下各地の學校馬術部で練習用馬匹に關し相當苦勞を味つてゐる折柄、我部は幸にも月寒聯隊當局の理解により殆んど平常と變りなく練習を續けることが出來、この點大いに聯隊當局に感謝してゐる次第である。月寒に於ける每週土、日曜の練習（參加者約二、三十名）の外旭川騎兵隊に於ける練習は次の通りである。三月十一日—二十日、市內永樂館に宿泊して騎兵隊に通ふ。本科四名豫科九名、實科四名參加。七月四日—十二日、帝大聯盟戰、對東北戰のため本科八名、偕行社に宿泊して練習と準備をなす。七月九日—十六日まで北海道乘馬大會出場、インターハイ練習のため本科一名、豫科十名、實科一名營內宿泊炎熱を冒して練習。十二月二十一日—二十七日、本科、豫科、實科各々二名參加、偕行社に宿泊騎七にて練

習。非常にしつくり氣の合つた合宿であつたが、豫科部員が少なかつたのは遺憾であつた。

第五回札幌乘馬大會　札幌乘馬大會も回を重ねること既に五回となつたが、本年は五月二十一日月寒三浦部隊、並に北海タイムス社、札幌OBライディング倶樂部後援の下に畜産馬場で華々しく開催、この日北風強く吹きまくり冷氣身にしみたが、部外の參加者も五十名に及び、その他本年新らたに中學生班十四名も加つて各々妙技を奮つて大いに銃後の意氣を高揚した。

種目　難路通過、障碍飛越、卷乘競走、バン喰、琴平、借物競走、馬裝競走。その他對抗競技として

豫科對實科　豫科—福本、山根、小林、岡田　實科—佐藤(龜)、熊澤、木谷、佐藤(誠)。豫科の勝。

畜産對馬術部　馬術部の勝、永倉、兒玉、福光、關、半澤。

札幌OB對馬術部　OB—富樫、松本、前野、高杉、太秦。　馬術部—石井、福光、下條、中尾、山本。馬術部の勝。

石川正吉君の死　部員農經三年目石川君は三月より病を得只管療養に努めたが、六月九日北大病院にて亡くなられた。輝しい戰績を殘された元氣な石川君であつたのに、今はもう君のキロットの勇姿にも接しえずと思へば悲しみ又深いものがある。六月十一日庄内寮にて葬儀が行はれ、部長が弔詞を呈された。

帝大聯盟戰　帝大馬術聯盟本年度の第三回戰は我部が當番校になつてゐたので、各校及び旭川騎七當局と折衝の結果七月九日騎七前馬場に開催の運びとなつた。本年は新進名古屋帝大が聯盟に加入し七名の選手を派遣し來り、この外東北大よりは六名、東大よりは實に十五名といふ多數の騎士が馳せ參じ輸贏を爭つたのである。試合に先だち前日の八日夜旭川北海ホテルに總會及び懇親會を開いて交歡を行ひ、當日九日は午前八時三十分より一校六名リーグ戰の形式を以て競技を行ふ。我部よりの出場選手は西村、菅間、下條、石井、山本、福光、永倉で、泥濘をついて奮戰力闘したが、結局左の如き成績で惜敗、東大に名を成さしめ、東久邇宮賜杯は同學の手に歸した。

東　大	三勝零敗	北　大	二勝一敗
名　大	一勝二敗	東北大	零勝三敗

尙この日の競技に京大の參加を見なかつたのは遺憾であつた。(卷末參照)

對東北大戰、北海道騎乘大會　第九回對東北大戰は七月十三日騎七前馬場で擧行、我部優勝。（卷末參照）

第十三回北海道騎乘大會は七月十六日騎七前馬場に開催、我部よりも多數の選手參加し、大學高等專門學校選手對抗障碍に於ては本科優勝し、東日優勝旗、並に北大總長杯を獲得した。右試合の戰績は左の如し。

一位　北大本科（二五〇點、菅　間、下　條、西　村）

二位　盛岡高農、　三位　北大豫科、　四位　北大實科

全國高校對抗競技　第十六回全國高校對抗馬術競技會は八月五、六兩日東京陸大馬場に於て擧行、我部からは福本、山根、岡田、小林の四名（補缺平井）が參加した。第一日は暴風雨の惡コンデイション中に各選手最善を盡して勇敢に戰ひ、結局二十六校中左の八校が豫選を通過した。

1學習院　2成　城　3北大豫科　4三　高　5姫　路　6五　高　7山　形　8一　高

第二日は昨日に變る好晴で、しかもさまで暑からず實に絶好の乘馬日和、我部選手一同勇躍奮鬪してまづ準々決勝に宿敵學習院を屠り、次いで準決勝に三高を敗り、この勢に乘じて決勝戰には姫路を倒し、玆に待望のインターハイ制覇は成つたのである。雌伏十年、燦たる文部大臣杯と優勝楯とを懷いて青山原頭選手の感激は實に筆紙に盡せぬものがあつた。第二日の戰績は次の如し。

（障碍十五個、二分三十秒　減點法）

準々決勝

北大豫科九二・〇—學習院一二九・〇

準決勝

北大豫科九〇・五—三高　四四八・〇

決　勝

北大豫科三五・〇—姫路　八五・〇

全日本學生選手權大會　第十一回全日本學生馬術選手權大會は八月十三日東京代々木練兵場に擧行された。之より先北海道地區の豫選は五月十二日旭川に於て行はれ、我菅間選手が之を通過、北海道代表として晴の競技に參加する

ことになつた。大會當日は午前まづ第一次競技を行ひ、馬場馬術、障碍競技審査の結果二十名が第二次競技出場の資格を得た。第一位石崎（明大）、第二位平澤（慶大）、第三位太刀川（成蹊）で我が菅間は第六位であつたが、午後の第二次競技に於ては右の第一位から第七位までが大接戰を演じた末、覇權は見事菅間の手に歸したのである。昭和六年第三回の大會に於て伊達選手優勝以來實に九年振りで選手權は再び津輕海峽を渡り、光榮ある東久邇宮杯を始め、文部大臣杯、陸軍大臣楯が燦然と我部の歴史を光輝づけることになつた。日本騎道會の成立を目前に控へ學協としては最後の選手權大會に於て、又我馬術部としては創立滿十年に相當するこの年に於て、全日本選手權が我等の手に落ちたことは洵に意義あることゝ思ふのである。

大會當日第二次競技の經路及戰績次の如し。

○野外騎乘—全經路一四〇〇米、速度基準一分間三五〇米、障碍六個（最高一米、幅二米五〇）

○障碍飛越—最高一米二〇、幅二米五〇、十五個、全經路五五〇米、基準時間六分

競技成績

		第一次	野外	障碍	計
一菅	間（北大）	八八	一五〇	一五〇	三八八・〇〇
二石	崎（明大）	九一・二五	一五〇	一四四	三八五・二五
三横	田（慶大）	八八	一四五	一五〇	三八三・〇〇
四栗	田（大高醫）	八二・二五	一五〇	一五〇	三八二・二五
五岩	本（早大）	八四	一五〇	一四七	三八一・〇〇
六前	田（法大）	八八	一五〇	一四一	三八〇・〇〇
七山	本（同大）	八四・二五	一五〇	一四五	三七九・二五
八小	林（成城）	八六・二五	一五〇	一四一	三七七・二五
九長	浦（農大）	八四・七五	一四八	一四二	三七四・七五
十大	久保（法大）	八三・二五	一五〇	一四一	三七四・二五

先にインターハイに優勝し、今又全日本學生選手權を確保し得たので、この未曾有の勝利を祝する爲、九月二十一日職員集會所に祝勝會を催した。この祝勝會亦盛會を極め、選手の戰績報告に、顧問各位の感想披瀝に、又先輩諸氏の懐古談に時の移るを忘れ、我部の前途の愈々多望なるを思はしめたのである。

遠乘會及映畫會　文武會デーの催しの一として恒例により遠乘會を開催することゝし、宛も十月二十八、九兩日札幌馬事協會（假稱）の定山溪一泊遠乘會とかち合ひ、同じ日に同地へ向け遠乘會を計畫、月寒聯隊の駄馬に畜産の乘馬數頭を加へ總勢三十有餘騎（部外よりの參加者七名）、めぐまれた好晴に心ゆくばかり北海道の秋色を賞した。氣溫も案外高く月はよし、懸念した旣番も何のことはなく、輕い疝痛馬一頭があつたが之も間もなく回復し人馬共元氣に二十九日午後歸札した。

映畫會は十一月五日今井記念館に開催の豫定であつたが、日本騎道會との連絡上手違ひがあつたので中止し、十五年一月十九日に農學部大講堂にて學内のみに公開した。

對弘高定期戰　第四回を迎へた豫科對弘高戰は札幌にて九月二十四日に行ふべく用意萬端整へてゐたが、弘高の都合により本年は殘念乍ら取止めとなつた。

明治神宮國民大會　十一月三日、東京にて。選手權二十位まで出場資格のある學生中障碍に菅間出場、八位となる。

豫科櫻星會馬術部誕生　年が變り十五年二月八日の櫻星會役員會にて豫科櫻星會馬術部創設が絶對多數を以て承認された。部としても四年がゝりで運動をつゞけて來たことであり喜びにたへない。櫻星會馬術部の健な發達を切に願ふものである。

（十五、二、十五）

石川君を憶ふ

滋賀秀明

確か六月の初めだつたと思ふ、蒼いオホーツク海の向ふに千島を浮べた根室の眺めにもそろ〳〵飽き、早く札幌へ戻りたいと願ひつゝあつた時に突然石川君危篤の電報を受取つた。其の頃は私の出張の期間も殘り少なかつたので直ぐ歸らず容態の好轉を念じつゝ第二報を待つてゐた處それから四、五日して遂々その計を聞かねばならなかつた。

石川君と私とは何時の頃からか親しく交際する樣になり所謂氣の合つた友達とでも云ふのだらうか、よく一緒にお茶を呑んだり、レコードを聞いたり、雜談に耽つたりした。私の醫學部四年目の時―彼はまだ豫科三年であつた―二人は暫らく同じ下宿で暮したことがあるが、此の時も私が誘つた樣に思ふ。その頃からか少しの練習にも疲れ易くなつたと云つてあれ程好きだつた乘馬もぴつたりと止めて只管靜養に努め、少しばかり臨床の經驗を持ち始めた私に色々と身体の相談をもちかけてきた。然し當時は未だ仲々元氣であつたし、そんなに心配をしなくてもよからうと思つてゐた。其の後私が卒業してからも時々訪ねて來て呉れたり、街路で遇つたりしたが依然元氣相に見えたし喉頭部に伏兵が居やうとは想像もしなかつた　最後の病氣は喉頭結核と云ふことだが喉頭結核と云へば聲は出ず、咽喉は燒け付く樣に痛むと聞くがその時の氣持はどんなであつたらう。

誰を失つても惜しいことに變りはないが石川君とは兄弟の樣につき合ひ、其の將來に期待するところが大きかつただけにかへす〴〵も殘念に思ふ。

石川君は山形縣人であつたから幾分東北人特有の動作の鈍重な、非社交的な所もあつたがその半面、近代人らしい感覺と嗜好を十分持つてゐた。性格は一見した處優しく見えたが實際は非常に強い氣性を持ち、仲々頑張り屋で負け嫌ひであつた。馬がとても好きらしく馬の繪や置物も大分集めてゐたし、練習に熱心なことも非常で、合宿は缺かさず行き、愛馬會にも隨分通つてゐた。技術の進歩も目覺しく豫科の三年頃には既に學部の誰と較べても遜色ない程で

あつた。試合に出ても持前の負け嫌ひも手傳つて常に優秀な成績を得てゐた。初めて乘る馬でも不思議に直ぐ其の癖を呑み込み、上手に之を乘りこなした。

乘馬ばかりでなく石川君は仲々多趣味で碁、將棋もやつたし、寫眞や音樂は特に好きで造詣も深かつた。私は次第に病院の仕事が忙しくなり、その上出張する事が多く、石川君も學校の方が忙しいとみえて訪ねて來る事も稀になり自慢のライカで寫した寫眞も見る事も少く、レコードの批評を聞く事も稀となつたまゝ永久に會ふことが出來ない樣になつてしまつた。

卒業後の方針にも立派な大望をもつてゐたし私も屹度他日なすある人間だと思つてゐたのに學半ばにしてたほれたのは考へても考へても惜しいと思ふ。

第十一回全日本學生馬術選手權大會の想出

畜産二部三年目　菅間　威

昭和十四年八月十三日は私にとつて一生涯忘れられない日です。と言ふのは此の日、東京代々木練兵場に於て擧行された、第十一回の學生馬術選手權大會で、各位の御鞭撻、御激勵に依り幸ひに選手權を獲得致し　東久邇宮賜盃を津輕の海を越えて持歸る事が出來た日だからです。顧みると初めて馬に跨つたのが豫科入學の嬉しい頃で以來足掛け六年間馬に親しみつゝ樂しい學生々活を送り得ましたのも、皆樣の御厚情の賜と深く感謝する次第です。尙、祝辭を下さいました方々に厚く御禮申上げます。

報告を書けと幹事に言はれどうも自慢話をするやうで嫌だと斷つたのですが聽いてくれず仕方なく拙い文を綴らねばならぬ事になりました。

五月十二日に騎兵第七聯隊營前馬場で降雨後の惡コンディションに惱みつゝ、又時々降つて來る雨に脅かされながら豫選を行ひました。伸暢遠歩の歩度が伸びず、又隅角で轉倒しさうになつた事を憶えて居ます。障碍飛越にも馬にもつてゆかれて大分苦心をしました。幸ひに代表に選ばれたのを知つた時、北大の名譽の爲に頑張らうと固く心に誓ひました。東京の氣候に体を慣らしておかうと思つて早目に上京して、大會を待ちました。

大會は八月十三日午前八時より代々木練兵場久米邸跡に於て行はれました。天候は晴朗、微風がありましたが朝から實に暑い日でした。その前々日の八月十一日に豫科士官學校で出場順のみの抽籤が行はれました。今年は大會當日迄出場馬を發表せず且豫科士官學校での練習は一回も出來ませんでした。抽籤の結果出場順は四十五番で第一次競技後段出場となりました。

第一次競技は馬場馬術及び障碍飛越競技が行はれました。五十名の選手に對し馬は廿五頭で廿六番以後の選手は有利でした。馬の抽籤を終り廿五番迄の選手が、準備運動をやるのを見て居る中に、氣も大分落付き此の分ならば、ゆつくりした氣持でやれると言ふ自信を得ました。最初は初めての大會でどちらを向いても知らぬ顏ばかりで些さか興奮して居ました。馬場馬術は、速歩及び駈歩運動でした。馬場内は草の茂つた儘で、大分やりにくく、準備する方で少し考へてくれたらよいと思ひました。僕の乘つた馬は、前に日本醫大の選手が乘り、停

止を正くやらず、又駈歩運動の歩度が伸びるので、それに氣を付けて居たのですが矢張りうまくゆかず、二四點減點されました。障碍飛越競技は十個、最高一米で同馬で行ひましたが、前の騎乘者の時に、第二障碍を左に逃否してゐるので、それを警戒して無減點で通過し、結局二〇〇點滿點の所を一七六點で、第一次競技通過者廿名中第六位で第二次競技出場資格を得ました。

第二次競技は、野外騎乘及び障碍飛越で、十三時半から新に抽籤せる出場順及び馬を以て行はれました。私は八番、馬は宮友號でした。直ちに準備運動に移り野外騎乘のコースを一廻りしましたが、非常に口が固く準備運動中に指をすりむいてしまひました。尙障碍コースを廻つて居る時、先輩の山下さんに呼掛けられ、非常に嬉しく思ひました。

野外騎乘は距離千四百米。六個の固定及び置き障碍があり、それを四分以内に通過するので、出發より斜面を斜めに下り、下馬して十米程の木橋を渡り直ちに坂になり、林、隘路、平地、次いで坂を下り再び登つて決勝線でした。宮友號は先にも書いた樣に口が固く、ぐん〳〵もつてゆくので野外騎乘で余り追ふと、障碍飛越の時にいりこんでしまふ恐れが多分にあると思ひましたから、野外騎乘に於ては出來るだけおさへ、扶助も輕く使ひました。野外騎乘中第一障碍を拒否しかけましたので、脚及び腰で追込んで飛越せしめそれから後は、歩度を考へ乍ら割合樂に通過しました。第五障碍で馬が後肢を横木にぶつけ、大分搖れた樣でしたが落下しませんでした。何しろ暑い事とて、汗が上着まで滲み出し、野外騎乘を終へてからの十分間の牽馬の時は、自分の体か他人の体か判らぬ位にへばつてしまひました。何よりも先づ体力を練る事が第一と強く感じました。十分間の牽馬の後、障碍飛越競技に移りましたが、今度は經路も複雜であり十五個、距離五百五十米、最高一米二〇、障碍も大分趣を異にしたものを置き、設備者の苦心の跡がうかがはれました。形の變つた障碍は、馬が恐れる關係から乘御者の苦心、努力を要します。あらゆる扶助即ち精神、拳、脚、騎坐、腰、とその總てを綜合し又獨立に使ふ事は馬術に於て絶對に忘れてはならぬ事と思ひます。

第二次の障碍飛越は最初から調子良く飛越し、第十障碍を越えて、稍々馬にもつてゆかれましたが、どうやらおさへる事が出來、最後の障碍を無事に飛越し得て決勝線に到達した時は、思はず長い安心の吐息をつきました。かくして第二次競技では滿點を得て、第一次の二分の一と合計し三八八點で二位との差は二點七分五厘で優勝する事が出來、畏くも東久邇宮賜盃、又文相盃、陸相牌

を會長三好閣下より授與され、最後に自分の手で碧空に高く飜つてゐた國旗を國歌吹奏裡に降下した時の感激は終生忘れられません。以上で私の拙ない想ひ出を止めようと思ひます。今後も益々体力を練り氣魄を養成し技を磨いて皆様と共に斯道振興の爲につくし度いと思ひます。

（十五、二）

インターハイ記

福本途夫

何如なる天の豫定であつたか多年待望の高校大會優勝の華が吾々の上に咲いた。これを單に吾々今年度の選手のみの技術とか幸運の問題として考へる事は絶對に當つてゐない。その事は勿論解りきつた事であるが、吾々は日先以上に見、聞き、感じて知つてゐるのである。吾部有史以來十年の間にどの時期のどの選手の上に咲いても宜かつたものが、偶々時こそよからんと十年目の夏に咲いたのである。私は幸にして豫科入學以來三回のインターハイを皆見る事が出來たが私の知る限りそれ等の先輩が傾けた努力と苦行がどれ程激しいものであつたか、それが大會に於て優勝する事が出來なかつたのは只〝戰ひ〟の一語に盡きるのである事を知つてゐる。それに比べて吾々の練習が決して誇示し得る程度のものでなかつたにも拘らず優勝し得た事に申譯なさを感じもし一層先輩の力を知るのである。大會前五月に我々が練習をしてゐる時に熱心に指導を續けられた一先輩が、自分達の時には選手皆んなが小便に血が混つた程だつた、と激勵されたが我々には到底そこまでは行けなかつた。兎に角入學當時から諸先輩に可愛がつて戴いて惜しみない御指導を携へて大會場に臨む事の出來た吾々のわりのよさを感じるのである。

遠い話は措て置いて昨年度の高校大會に非運の涙を呑んでより既に吾々の次に對する陣容は自信を以て整備されてゐたのである。十三年度大會に出場並に補缺の、岡田、小林、福本でそのまゝ翌年のチームを結成する事が出來た。所がその年の十月頃東大より一チーム四名としたいがといふ問合せがあつたが、これに對しても十三年度に出場こそしなかつたが入學以來練習を共にした山根を含めて一層達成のチャンスを多くしたのであつた。人員に何等の不安を感じないで始めから進んで行ける事は非常な幸ひであつたが、例年の秋季の練習難、冬季合宿の不便等相當我々を脅かすものがあつた。これ等を先輩

諸氏の御盡力による學校馬拜借などの算段をして補ひ、少い練習をより有効にといふ考へが一つの精神訓練をなしたかもしれない。

殊に想ひ出深く吾々の實力養成の大部分を負ふのは冬期、春期、夏期の旭川合宿である。重大なる公務の中を吾々の便宜を辱けなくするいつもながらの今村部隊長殿を始め聯隊諸氏の御好意に深く謝さねばならない。重い鞍運び、市中の合宿所からの寒い早朝の出動、或ひは點呼、勞働奉仕、馬場均し、馬手入、飯揚げ當番食器洗ひ。この樣な有樣の馬術練習以外の苦勞がどれ程吾々の爲になつてゐる事か。馬術が更に高校大會が決して術の末技のみの問題でない事を考へ合せて再び省るべきものがある。短い練習時間を補はんとする訓練は基本を忍耐强く固める事であつた。前進後退歩度の變換の單調な練習は、手綱の感覺、腰の感覺、扶助等を增進し確實にするものであつた。物凄く反動の高い馬に乘つて、鐙脫せでの野外騎乘は、恥も外聞もなくべそを掻かせたが、後に晴の大會で不安なく膠着馬を押し出す事が出來る騎坐脚を養つた。併し何よりも合宿が吾々に敎へたものはといへば、痩せ我慢と頑張れる自信であつたどらう。

十四年度に這入つて月寒聯隊に於ける練習、札幌乘馬大會、五、六月の校庭に於ける早朝練習、旭川の帝大戰參觀、夏期合宿、全道乘馬大會、札幌に歸つてから又、アイスキャンディーを一人十本も食べなければならない程の猛訓練、と過ぎて愈々東京は九段の軍人會館に乘り込んだのが七月の三十一日であつた。

こゝ迄來れば戰の大部分は既に爲されたと同樣で後は如何に吾々の全力を試合場に傾け現すかの問題であつた。我々が在京中に最も心掛けたのは心身共に最上のコンデイシヨンに於て試合に臨むといふ事であつた。不慣れな東京の暑さを三度三度の食堂料理でどうして調子を保たうかといふ事は各人が自分の身体ながら責任を感じて各々非常に節制を行つた。午前中に陸大馬場に於ける合同練習を了れば暇な午後ではあつたが、無川の單獨外出は自然に避ける樣になつてゐた。試合前に氣が立つてゐて些細な事にも不愉快を感じ勝ちであつたがよく自制してチームとしての緊密を搖がせ無つた。四日間の合同練習中愉快でならなかつた事は、戰前の下馬評として優勝候補に學習院か成城かといふ呼聲は高くても北大豫科を豫想するものが全くなかつたのであるのに、練習の日が進むに連れて我々の實力が明瞭になつて、自信滿々の某校の選手等に〝優勝は間違ひないが北大豫科だけは手强い〟の私語さえあらしめた。併もこの言が鬪志滿々なれど不安なきを得なかつた我々の氣持をぐつとほぐして

呉れ自信を懐かせるに至つたとは。なほ練習四日間に配當された馬を綿密に研究し記錄して置いた事が試合に當つて作戰上、統御上この上なく有利であつた。

八月五日、いよいよ試合であるが、昨年度から採用された新方法によつて第一日豫選、第二日本試合といふ事になつてゐた。豫選とは各校三名の選手を出し、各選手は一人づつ別の學校の選手と一つの馬にのつて爭ひ、優勢の時一點とし、一校で各選手が皆各々相手を抑へれば三點の獲得として、點數の多い物から八校を豫選通過とするのである。猶審査長の技量審査による十點以内の增減點があり、これが得點の同じ際に物をいふのである。

我々は岡田、小林、福本の三人が出場し、各、水戸、松本、成城の選手に當る事になつた。第一回の試合でもあるし、我々は豫選が一番こわい樣な氣がして、特に愼重を期した。これに失敗して資格を失へば、相手はどことも知れず、流れ彈に當つて敢へなく終る樣なものであり、しかも如何に自信があつても相手の敷陣に對する掛引きは許されず、全實力を發揮して結果を待つより他ないのであるから。事實前年度の優勝校であり、而も昨年度の中堅をそのまゝ保つてゐて再び呼聲の高かつた成蹊が俄然落選の憂き目に逢つたのはこの慮りの當つてゐた事を證して誠に氣の毒で一好敵手を失つた感があつた。

岡田の使用馬は、こぢらさずに丁寧にもつて行けば滿點の馬。小林の馬は鈍くて非常に重いから特別な追込みを要するが、癖のない先づ滿點の馬。福本は非常な体格のよい能力馬であるが狂奔すると全く御も脚も感じなくなり、昨年成蹊の太刀川が乘つて會場の中を三周し、而もその壓へ方を認められて滿點近い技量優秀點を受けた馬である。吾々はそれ等を前から詳細に東大の人達に聽いておいて心の中で毎日對策を考へてゐたのである。岡田は只馬を拜んで素直に誘導するんだ、と言つてその通りにして見事にノーミスで通過し、三、五の增點をもらつた。小林は追込むんだ、と物凄い張り切り樣で、古物屋で兵隊用の野蠻な程に長い拍車を買つて來て、やすりでといだり光らせたりしてゐたが、いよ〳〵馬上の人となると、見てゐるこつちが氣が氣でなくなる程無二無三に追ひ込んで重い馬を走らせこれもノーミスであつた。この迫力に審査官も氣が氣でなかつたか、一點の減點を頂戴した。福本は鎭靜にかぎると心を決めて、手綱當り、脚當りを纖かくしようと努めた。頰革を一あな伸ばして銜の當る場所を變へたり、鞍を少し下げて後軀を壓へて見たり常々習つた思ひ出すだけの事をして見た。準備運動も鎭靜を鎭靜をと求め、彊、脚を成るべく使はない樣にした。池内さんや石川さんがよく教へて下さつた事が

非常に役立つて心強かつた。幸に豆颱風襲來の吹き降りの泥濘の中を、非常に歩樣の高い速歩で鎭靜して通過した。時間超過で八點の減點であつたが、增點七點を合せてマイナス一點となつた。さて相手であるが、岡田の相手水戸はやはり相當に調子よく飛んでゐたが一、二の過失で心配はなかつた。小林の相手の松本の選手は先きに乘つたのであるが、脚力の不足から過失の續出で遂に落馬の厄に會つて、問題とはならなかつた。福本の相手の成城の主將は、流石は古豪、完全に馬を手に入れて悠々、惜しい一落下があつたが、八點の增點で計(十)五點、これは文句なしに一敗だつた。結局三勝は學習院のみ、二勝一敗校の中增點合計の多い校成城、豫科、姫路、一高、三高、山形、五高、以上八校が豫選通過となつた。決定後八校主將が集合して翌日の組合せの籤を引いた所、なんと昨年來の宿敵、而も優勝候補の第一を以て自認する學習院。相手にしても問題の北大豫科…。薄暮の中に學習院の前田主將と暫し顏を見合はせてゐたが、やあ又當りました、しつかりやりませう、と笑ひ出した。東大の選手の一回戰、二回戰、決勝戰に使用する馬の癖の說明を聽いて宿所に引き上げる時は、勝敗の心配は寧ろ失せて、やれるだけはやれるといふ自信といふか落着きがあつた。第二日目に關しては、次から次へと試合、試合であつて、打合せだの出場準備だのに目を廻して、各々の試合に就いての印象はごちや混ぜになつてゐて明瞭でない。その中にも決勝戰よりも何よりも鮮かに殘つてゐるのは學習院との第一回戰である。朝陸軍大學の庭で集合を待つてゐる間に、學習院の人達が來て、「ではこれに勝つた方が優勝する事にしませう。」などと言つて笑つた不足のないいゝ敵同志だつた。日曜だつたので、朝から山下さんと小田さんが來て下さつた。近衛の徽章を附けた赤長靴の見惚れる樣な青年中尉さん達であつた。誰も應援のない我々に、二先輩のお出では百萬の味方であつた。自分の馬の準備運動等をやつてゐた爲に、他人の試合振りを見る事が出來なかつたので、烏滸がましいが自分の事だけしか書けない。この試合は配屬された四頭の馬の中、三頭は先づ無難であつたらしいが、自分の乘つた岩錦號は曾ての五大學對抗戰に全部失權したといふ札つき馬だと聞かされ、これがポイントだと思つた。學習院は主將の前田君がこれに乘る事になつたが、こちらが先乘となつて準備運動を行つた。準備運動中に腰、脚に對する敏感を增進させようとしたが、案外從順なのでこれは何とかなるかもしれないと思つた。スタートして見ると仲々スムースに飛んで行く。この調子でどこまで行くかなあ、と思つてゐる中に馬場の厩舍に近い側に來

るとたつと止つた。いかれる、と思つた時はもう遲かつた。その中に二三人見物に集つて來るし、岡田がやり切れなさそうな顏をしてやつて來た。そこで兼ねて聞いてゐた通りに、脚をゆるめて手綱をたらして厩舍の方に歩かせ始めた。淺はかにも岩錦號歩き始めたのでくるりと障碍の方に引つぱつて行つて飛ばせ、兎飛三つを通過して失權となつた。學習院數十點勝越の時最後に前田君がこれに同じ所で膠着され、學習院の例のファイトで叩き出さうとしたが時間が切れて失權となつた。結局障碍三つ分だけ豫科の勝越しとなつて一回戰を獲たが、實に生涯忘れられない膠着であり、兎飛びである。二回戰に當つた三高は野心も鬪志もなく、氣拔けがした程であつた。山根が馬の下になり、馬と共に悠々人の來るのを待つて立ち上り、又落着いて飛越し終つた豪傑振りには滿場あつ氣に取られた形であつた。決勝戰の對姫路は相手に一人穴があつて安心して戰へ、勝を制した。兎に角對學習院戰に對して一杯にひき絞つた緊張、鬪志、愼重、が相手の如何に拘らず、決勝戰の最後の笛が鳴る迄、一寸のゆるみもなく貫き得た事はチームとして誇つてもよい事だと思ふ。どこを壓しても弱音の出る心配のないといふ相互の信頼が、各人に不安なく各自を盡せしめ、チームの團結となつた。閉會式に參列してゐる間中、皆んなに知らせるんだ、皆んなに知らせるんだ、と考へてゐた。ズトームがしたい程嬉しくもなければ、涙も出なく少しぼつとしてゐた樣だつた。

思ひ出を辿りて

松本久喜

北大乘馬會と謂ふ、學生の乘馬團体から、文武會の馬術部になつてから既に十年經過したのかと思ふと、自分の過ぎて來た道を振り返り見て、いさゝか心細い樣な氣がする。それは文武會の馬術部になつたのは丁度、本科の三年目で、卒業してから、早や十年になん〳〵としてゐる事に氣が付いたのだ。それは兎も角として、當時の會員或は部員で尙札幌に殘つてゐるのは半澤君と自分位なもので、他の先輩に比較して親しく部の發展の狀況を知つてゐる事になる譯だが、自分なぞは、全く部に對して申し譯けない位御世話も出來ず、又先輩各位に對しても責任がない樣で何時でも心苦しく思つてゐる。札幌在住の先輩の一人として昔ばなしでも書けと謂ふ、部員からの申しつけに依り、乘馬會の事や先輩の方々の事でも

書いて、十年誌の頁に御邪魔する事にする。

實は自分が北大乘馬會に入會許可せられたのは大正拾五年の十月頃であつたと思ふ。全く此の頃の乘馬會の鼻いきは物凄いものがあり、先づ入會するには先輩の處に參上して、御願ひしなければならなかつた。自分を紹介したのは河崎秋三君で、此の人は十五年の四月から會の方に入會してゐた爲めに、是非入れてくれる樣に先輩に賴んでもらつた。其の先輩たる人は今臺灣で農學校に勤めてゐる眞鍋君であつた。河崎君に連れられて眞鍋君が丁度寮で晝食してゐる處へ御願ひに出た、彼は私を横目でじろりと見た、先ず小生の人物檢査の樣なものだ。何卒宜しく御願ひしますと引きさがつたのであるが、二三日して入會許可の通知を受け、丁度江別に遠乘するから乘つた經驗があるなら出て見たらどうか、との事で小躍りして參加したものだつた。入會當時は馬に乘る事ばかり無中になつてゐて先輩の顏もよく解らなかつたが、第一練習前には整列して點呼だ、其の頃の澤田さん（亡くなられた人）などは恐ろしかつたものだ、教官は丸さんと謂ふ調教師の方であつたが、教官より先輩の方が恐ろしかつた。

然し此の頃の緊張振りは無理のない事で、自分達が昭和三年に琴似の農事試驗場の技師をしてゐる酒井寛一君や、半澤君達の御骨折りに依つて北大乘馬會報と謂ふものをガリ版で出したのだが、其の會報の中に乘馬會の創立當時の事柄が、澤田鶴松さんが書いて居られる。夫れに依ると北大乘馬會の創立は大正拾四年十一月十七日となつて居り、丁度一年間後に私が入會したのであるから幹事諸兄の緊張振りは確かに張りきつてゐたに相異ない。吾々の練習にも此の氣分が影響してか、上達は今の部員よりは速かつた樣な氣がしないでもない（此れは餘談）澤田さんの記錄や、其の他の記錄を合せて、部になる迄の事を書いて見よう。

乘馬會創立當時の話を大塚中尉殿に御願ひすると先ず一時間はかゝる處だが、全く大塚中尉殿の御骨折りは並大抵のものでなかつたらしい。先ず時の師團長國司中將に二十五聯隊將校乘馬借用を御願ひしたのは大正拾參年十二月二十五日であるが、其の前に十月中旬に北大乘馬會創立委員なるものが出來、野間口英喜、山本幸雄、石井碩、平山常介、澤田鶴松、眞鍋雅彦、伊藤正之等が委員となり、其の頃二十五聯隊から學校に移られたばかりの大塚中尉に師團及び聯隊の方の交渉を御願ひして、許可になつたのは拾四年十一月十七日で、最初の會長は中村虎太郎大尉、副會長大塚中尉、幹事長野間口英喜、會計部澤田鶴松、石井碩、事業部平山常介、西野畦夫、山

本幸雄、眞鍋雅彦、赤羽(實科)となつて居たが、此の内私が寮に居らなかつた關係もあり、又私が會に入つて間も無く、練習に來られなくなつたのか、知つてゐるのは眞鍋鶴松、平山常介、眞鍋雅彦の諸氏である。北大乘馬會の設立せられた頃、やはり札幌に今の札幌愛馬會や、競馬倶樂部の持田謹也氏等に依る乘馬會も出來たそうであるから、北大乘馬會の歴史と謂ふものは札幌の乘馬に關する發達と殆んど時を同じくしてゐる。特に民間の團体と比較して學生スポーツとしての吾が團体がすく〳〵と發展してゐる樣に思れるのは心强い感がする。

話は又戻るが、私が入會した頃は第二年度で澤田さんが幹事長をしてゐた頃であつた。其の頃豊平の電車の終點が平岸街道の入口の處迄で、聯隊迄馬車が通つてゐたものだ。此の馬車は札幌停車場の前にもあつたものだが次第に姿を消し、月寒街道の馬車が札幌の客馬車の最後を飾つた筈である。馬車が無い時は徒歩だつた。道路は實に惡く、はでに磨いた靴を履いて、長鞭を片手に持つたいきな學生さんも、聯隊に着く頃には相當泥だらけになるのが常であつた。

今でも思ひ出すのは月寒アンパンの燒たての熱い奴と酒保のウドンとシルコだ、アンパンは聯隊へ曲る角から二軒目の内で、店頭から工場の方へ續く土間が今でもあるかも知れないが、工場迄侵入して燒たてのアンパンに練習後の空腹を滿たしたものだ。落馬、放馬、遲刻の徵罰が此の代金に當てられたのは言を俟たない。

三月の學末試驗が終ると旭川騎兵七聯隊の合宿である丁度大正十四年から配屬將校が大學に來られたのだが、豫科の方へは片山中佐殿で、合宿も、同中佐がわざ〳〵一緒に行つて下さつた、電車は今の樣に司令部前ではなく、招魂社の處迄であつた樣に記憶してゐる。あそこから片山中佐殿に引卒せられて騎兵聯隊に向つた。が、彼方から騎馬の將校が速歩でやつて來る、馬を見ると胸をわく〳〵させてゐた頃なので、遠くからその姿を見とれてゐると、自分等の前でぴたりと止つた、「私は中山聯隊長である、後程ゆつくり御會する」と言葉を殘して颯爽と行つてしまつた。あの元氣のよい人が聯隊長かと其の時から營門に入る迄、なんとも知れぬ興奮狀態であつた。其れ程、始めの頃の旭川合宿と謂ふものは言ひ表はされぬ憧憬であつたのだ。合宿中の行動は勿論今と變りはない事だらうが、中山聯隊長の語學に長じて居られた事や、根岸中尉の自稱ムツソリニー、鈴木少尉、小松大尉などの將校方々の事が頭に殘つてゐる。下士官の方では茂木曹長、瀧曹長などが直接指導して下さつたのであるが、此の瀧曹長の乘馬は大正號と謂ふ頭の高い馬だ

つたが、吾々學生は此の馬に乘つた瀧曹長の馬術にほれ〳〵してゐたものだ。數年後此の馬が騎兵隊から第二十五聯隊を經て大學の方へ廻つて來たが住年の悍威と容姿が見られなかつたのはもの寂しかつた。合宿が終る日は恰度豫科の進級發表の日になるので、札幌驛につくと驛からすぐ豫科の事務所へ發表を見に急いだ。同行者の中で現級に停止の人なぞが居て、慰め樣がなく困つた事もあつた。旭川の騎兵聯隊合宿の事は又誰れか書くだらうから、此の位にするが、聯隊長も岡田大佐殿に代られ、下士官の方々も變つたが、上海で戰死せられた須田少尉などは吾々の馬術觀を全く正しく導いてくれた人と思つてゐる。

筆を更に進めると次は中野友二郎君の頃になる。此の人は新潟で農學校の先生をしてゐる。馬はとても好きだつた、其の頃河崎秋三君、岩垣駛夫君と自分等が一番厄介になりよく桑園の下宿に押しかけた、馬の話ばかりでなく、雜談に夜の遲く迄御邪魔したが中野君も子供さんが既に澤山御生れになつた頃だと思ふが、便りが無いから解らない、此の十年誌を讀んだら昔の事を思ひ出して近況を詳しくお知らせてもらいたいものだ。二十五聯隊の教官は此の頃、丸さんに代られて、安部さんが來られた。即ち昭和二年である。此の年に第一回旭川乘馬大會が行はれた、學生で乘馬をやつてゐたのは本學の他に旭川師範だけで學生班は兩校の間で行はれた、散紙競馬と謂ふ野外騎乘を意味した競馬などがあつたが、勿論第一回であるから、今から見ると規模も小いが、其の代り指導教官などは夢中になつてゐた。參加團体も少かつたが、小じんまりしてゐた樣な氣がする。第四代目の主任幹事は平山常介君である、偉風堂々たる体格の持主で、馬もさぞつらかつた事だらうと思ふ、落ちるのも上手であつたとは時の先輩達の話であつた。今どうしてゐるか、工業の大發展時代だから、工場長か、重役にでもなつてゐる事と思ふ。五代目が自分等の同期の河崎秋三君だ、今は滿洲で陸軍の要職にあつて活動してゐる陸軍獸醫大尉殿である。姓名も三谷と換り、滿洲事變で死にそこなつた事があるそうだ、學生時代からスマートであつた、カラーが高く、上衣は短かく、そして蛛蜘が嫌いであつたが今では蛛蜘の嫌いなのも治つた事だらう。此の頃からか、或はもつと先きからかも知れない、倶樂部の組織を改めて、文武會に入らうと謂ふ話があつた、色々な意見が出て、仲々まとまらなかつた、實際今考へると半澤、九鬼、武田君等が、嘸色々な事で苦勞した事だらうと思つてゐる。やはり同期である岩垣駛夫君（泰弘と改名）は今は應召して、牛込の近衛騎兵聯隊に

入隊されてゐるが、今秋の富士の麓野の秋季演習には聯隊旗手として御活躍、一代の名譽を荷なはれたと聽いてゐる。何時もニコ〳〵笑つて居て、狸小路の端から端迄人通りの多い中を「びつこ」の眞似をして歩いたなどは彼れでなければ出來ない技であつた。然し當時の部員連中は皆よく仕事もしたし、又其の頃餘り道外に出る機會もなかつた樣な氣がするが、如何にして聯隊の馬に多く乘るかと謂ふ事ばかり考へてゐた。此の頃永松四郎君も成城高校から大學に入學し、東京で磨いた技術は確かに山舍者どもを驚かしたし、又オリンピックに出られた城戸少佐が騎兵七聯隊に來られたので、北海道の馬事思想は著しく發達し、城戸少佐や、騎七將校達に依り小樽や札幌の大通りで、模範馬術が公開せられたのも此の頃であつた。

昭和五年度からは會員一同の努力に依り、遂に文武會の各部と肩をならべる事になつた、通過した時は實に嬉しかつた。初代の部長は醫學部の永井先生に御願ひし、河崎秋三君と二人で永井先生の御宅に夜御邪魔した事もあつた。先生の几張面の御蔭で部の創立當時の基礎が出來たと今更考へてゐる。昭和五年は小樽から通學する樣になつたので、殆んど練習に出なかつたが會計係りから會費だけはとられたのを覺えてゐる。卒業して學校に殘る事になり、先輩も一人も居らぬので、結局自分が一番先輩の樣な立場に置かれ、部の相談も度々受けたが、或る時はサラブレッドの心臓の如く、實に强心臓振りを發揮した事も度々あつた。毎年困る問題は畜産の馬の件だ何時でも御貸し出來ないと斷る事にきめてゐるが、毎年の樣に部員が、朝に乘つたり、夕べに乘つたりしてゐる處を見ると部員の方が心臓が强いのみならず、頭腦がよくいらつしやるらしい。高杉、脇田、吉見君等の心臓にはどぎまぎしたものだ、まるで喧嘩腰である、「部員の不自由を見て先輩が同情せぬとは實に先輩らしくない」なぞと申すのだ、此の頃後輩連中に依り鍛錬された所爲か自分乍ら擊退法が上手になつた樣な氣がする。高杉君は學校に、脇田君は九州の一角で重役たらんとして奮闘してゐるし、吉見君は南洋から歸られて、酪聯に御勤めだ。十一月の二十三日には結婚されるそうだから、十年誌が出る頃には新家庭の甘い蜜でも吸つてゐる頃だらう。そうだ、書いてゐる內に代が飛んだが、九鬼君は文武會馬術部の二代目主任で、卒業後臺灣製糖に勤められたが、後大學院に入學の爲め歸札し心臓の病でぽつくり亡くなられた、臺灣から歸つた頃、足のある幽靈の話をして皆を笑はせてゐたが、實に惜しい事をした。其の次が伊達君だ、今は東園子爵として東宮傅育官をしてゐられる全

日本の選手權を先づ津輕海峽を渡らした人だ。此の前御端書を戴いたが、一寸御逢する機會もないが、どうです乘馬はやつて居られますか、だー坊や。

植村勘一君、此の人は第四代目の主任だ、今は日高の浦河支廳に御勤めで、近く道廳の方へ歸られる樣子だ、「藝は身を助く」うまい事を謂つたもので、馬役人である。學生時代からの藝の御蔭である。子供さんが二人で皆んな女性である、馬政方針と合致してゐるとの事である。

大分主任の事を書いてしまつた。惡口にならない程度に書いたつもりである、極く近代の人のは誰れかに御賴みする。

文武會馬術部も十年經過した。そして今年は豫科が優勝し更に菅間君が再び東久邇宮盃を津輕海峽を渡らした、馬術部の創立十年を祝ふべき、之れ程名譽な事はなく、十年目の吾が部の記錄に深く刻まれ消へる事はないのである。此の十年を一期とし、更に十年の將來に向つて、部員各位の撓まざる努力を望むものである。そして又斯く書き續けて來た自分自身も、新たなる十年に向つて部員と共にはりきつて進みたいと思つてゐる。

（十一月二十一日）

思ひ出すまゝ

半澤道郎

皇紀二千六百年の新春を迎へ歷史創造の大業を偲ぶ今日恰も我が愛する馬術部が創立十週年を迎へて玆に光輝ある馬術部十年誌の編纂を見るのは誠に悅びに堪えないことであります。北大乘馬會の昔を思ひ馬術部と共に暮して來た十年の歲月を顧みますと限り無い追憶の數々が惱裏に浮び、その一つ一つが自分の生活や性格の構成要素として切り離すことが出來ないものであることを知つて今更乍ら感慨深いものがあります。私は昭和三年一月北大乘馬會に入會を許されてから二年餘の豫科時代を會員として、昭和五年馬術部の創立と共に學部の三年間を部員として、更に卒業後は今日まで在札先輩の一人として實に十二年餘の長年月を部に關係し、常に部の發展を願ひ隆盛を祈りつゝ微力を盡して來た積りです。この長い間には實に多くの事柄があつて、樂しい思ひ出の中にも苦鬪の數々があり、苦々しい思ひ出の中にも貴重な敎訓があつて、拙い筆では到底書き表はすことは出來ません。輝かしい偉大な歷史の裏にはそれだけ多くの興味あ

る裏面史が秘められてゐるもので、それ等を一々細かく書き遺して置くことも重要なことであると思はれます。殘念なことには今回の企に對し大先輩諸兄に御執筆を御願ひしたのでしたが、何れも御多忙でその大部分の方々からは御投稿が無く、馬術部の源である北大乘馬會當時の事に關しては極めて僅かにしか知ることが出來ず、又當時の先輩の方々から懷かしい御感想を伺ふ事も出來ません。十五年の中十二年餘を共に送つた私には何か古い事でも書いてその變遷の跡を偲び、馬術部發展に力を盡された多くの方々の功績を記して感謝の意を表し、尙自分の拙い感想を述べなければならないやうな責任を感じ敢て、拙文を記しこの輝かしい十年誌の貴重な紙面を汚すことゝ致します。

先づ第一に私と同級で馬術部第二代主任をした九鬼誠之助君が卒業後一年餘にして急逝し、乘馬會の當初から騎七にあつて熱誠な御援助と指導を賜はつた須田藤吉少尉が支那事變に上海で壯烈な戰死を遂げられ、又昨年石川正吉君が前途有爲の身を以て學窓に淋しく病死され、今日の此の愉みを共に出來ないことは全く遺憾なことであります。

次に馬術部の今日あるのは全く軍部の力であり、軍部の援助なしには到底今日の隆盛を見ることは出來ないので、第七師團司令部、獸醫部を初め、騎兵七聯隊、歩兵第二十五聯隊の歷代の關係各位特に長く教官として熱心に御指導を賜はつて來た高江調教師に對して心から感謝するものであります。

又乘馬會當時の中村、大塚兩先生を始め、歷代部長の御骨折は非常な物で搖籃時代の御世話は云ふまでも無い事ですが、特に事變下の練習機關の不足であつた時の高松、黑澤兩部長の御苦心は莫大であつて、高松先生には教室關係の絶大なる御便宜を計られ軍部との交渉の困難であつた時に、兩教授が部長であられた事は馬術部として非常に幸なことでありました。黑澤先生には非常に御多忙の中から長い期間を部長として部內の融和を計られ常に馬術を通じ、動物を通して學ぶ可き人生訓を教へられ、絶えず部員の精神的向上に御深慮下さつたことは今日この輝かしい成果を納めた基であつて、心から敬意を表する次第でありますが、偶々部內に不祥事を惹して先生に御心痛を掛け、不愉快な思ひ出を遺して辭された事は私共として誠に申譯けなく深く御詫び申し上げる次第であります。尙ほ荒野寅雄先生の部に遺された功績も偉大なもので、先生の御熱心な御援助や身を以て示された御指導は常に部員を勵まされ、力となつて下さつたので之等は部史と共に長く特筆されなければならない事であ

ります。今は滿洲に御活躍ですが遙かに先生の御多幸を祈つてゐます。配屬將校であらせられた諸先生の御骨折りに對しては勿論其の他札幌愛馬會、札幌競馬場、北海タイムス社事業部等々の外部から部の發展に力を盡された方々に對しこゝに深甚の感謝と敬意を捧げる次第であります。

次に思ひ浮ぶ儘に古い事を少しく並べますと、乘馬會當時の入會は相當に困難であり幹事の嚴選によつて許可され私等もその年の第二回目の募集の時に先に入つてゐた九鬼君の斡旋で漸く入會することが出來た樣なわけでした。當時一緒に入會したものが十名でしたが卒業まで殘つたのが武田朝男君と二人だけ、同年度では九鬼君と三人のみでした。この三人と一年上級の酒井寛一兄とがその頃の豫科の馬狂であつて、今考へても隨分良く働いたものです。松本兄の主唱になる北大乘馬會報をガリ版で印刷發行したり、部内や隊との連絡に走り廻つたり。六十日の夏休みの五十五日を愛馬會に通つて毎日の樣に膝の皮を剝き直したりしたものでした。酒井兄は部になる頃には會員を辭められ今は琴似の農事試驗場に居られますが今でも尙よき後援者です。九鬼君は農藝化學科の食品を出て後大日本製糖の虎尾(臺灣)工場に就職されましたが、在臺一年にして病を得て再び札幌に歸へられ、大學院學生として研究中不幸急逝されました。武田君は畜産一部の牛學を專攻し卒業後農林省に入られ、目下滋賀縣廳に御活躍で、全くの多忙にこの十年誌上で同君の麗筆に接することの出來ないのは甚だ遺憾とする處であります。然し昭和五年度と六年度の史料を私に送られ部史を明かにすることが出來たことは厚く同君に感謝するところです。

乘馬會當時の思ひ出として最も强く感じますのは會員相互の親睦が非常に良かつたことで、私共新入の者も毎夜の樣に大先輩の中野兄の下宿や、松本、岩垣、諸兄の下宿に押しかけ御迷惑をかけ乍ら貴重な体驗を敎へて頂いたものでした。然し夜更けて難かしい話に移ると逐ひ歸へされた事も屢々ありました。先輩諸兄は何時でも快く迎へて下され和やかな樂しい空氣が到る處に漲つて居ました。然し練習の時には非常に嚴格でよく大聲で怒鳴られたものでした。

入會後始めて營門を潛り、酒保の前を拔けて厩舍に行き初めて馬房に入つて鞍置きをした時の氣持や、第二日目に障碍を飛ばされ見事に最初の落馬をした事や、練兵場の雪の中で最初の人馬轉倒をして三間も投げ出された事等今でも間近かに思ひ出されます。武田君が練兵場でひつかけられて途中で赤ん坊の乘つて居る乳母車を飛び

越へ、營門(裏の)を通つて厩舎前の水飲場の石疊の上に打落された事や、中野兄の愛馬であつた「岩山」のかま育、岩垣兄の良く乘られた「青山」の輕い肢取り、酒井寛一。君ならでは御し難かつた「宮」、學生が近寄ると必ず蹴る變質の「旭泉」、　丸が一つ殘つてゐて近所の百姓家の牝馬を孕ましたと云ふ放馬の上手な何とか號、尻尾の細い「岩星」、岩橋君の良く乘つてゐた「清春」、御大典以來私の愛馬だつた「岩風」等當時の乘馬十數頭の馬の姿が思ひ出され懐しく思ふと同時に、彼等が滿洲事變に出動し晴れの武勲を樹てゝ凱旋すると間も無く鼻疽の犧牲となつて全部が藥殺された事は、恩ある無言の友達を一擧に奪はれた誠に悲しい思ひ出であつて、現在月寒の厩舎を訪れると丁度恩師の去り盡された小學校を訪れる樣な氣持がして淋しく思はれます。

暴風雨に近い天候の時にも練習に行き當時の安部調教師をあきれさせたり、吹雪の日北の端から兵營まで全部徒歩で通つたり、全部が一度に乘馬出來る時には良く練兵場や白石、燒山方面に外乘して、遇には途中から一人づつ單騎で練兵場へ歸へらせたり、新入部員を迎へて二日目當りに卷乘蠶馬をして落馬を喜んで見物し乍ら篩にかけたり、數限り無い思ひ出が眼底に浮んで來ます。酒保の鍋燒きうどんや黑い汁粉、營門を出て買ふアンパンの味、豊平一月寒の路々の思ひ出等樂しいものばかりです。その路も今ではバスが通ひ昔の幌馬車、幌馬橇、古いフォードか何かのボロ車に一度に十三人も乘つて前のエンヂンのカアバーに馬乘りになつたりした時の滑稽じみた樂しみも少なくなつてしまつた樣です。

合宿の事等に就いても書き度い事が澤山ありますが紙面と時間が許しません、私の豫科の頃の春の合宿には二十名以上の參加があり當時の聯隊講堂に宿泊し、乘馬練習の外に學課もあり、城戸少佐や阿野中尉等から障碍飛越や障碍馬調教に關する講義があつたり、通信の見學やシベリヤ出兵當時の戰術等の話を聽いたものでした。須田少尉(當時曹長)を始め下士官の方々の熱烈な御指導振りも忘れることが出來ません。合宿最終日の將集での會食の時の白米の味や、教官とビールを痛飲した思ひ出等愉快な思ひ出です。

これ等の他に旭川に於ける大會や、卒業後參加した二度の合宿の思ひ出、モンパリの夜なぞ詳しく書けばきりがありません。

馬術部の創立の頃の事も河崎兄の御手傳ひをしたので幾分かは知つてゐますが、部則を協議した時の事や、永井教授を部長にお願ひした事等に就て思ひ起すことがあります。又後になつて主任の問題で一荒れしたり、札鐵

の馬術部との協定の事や、又自馬を持つ計畫なぞに就て苦心した事等が成功と否とに拘はらず一生懸命に考へてやつた丈けに愉快な思ひ出であります。

黒澤部長の時代には部長や松本先輩の御都合や御不在中でよく部長代理を仰付かり、心臓の弱い私は泣き度い位い困つた事が暫々ありました。時計臺で部長の公開講演を晝夜二回やる豫定であつた所を部長の御都合で突然夜の部をやらされた時等は、晝に聽いた事を話せば良いと言はれたもの丶餘り急で一体何を喋つたか解らない位で。あの時は部長や松本兄を恨んだものでした。又全日本學生軍の遠征の時は總務の役を押付けられて、毎日教室を抜け出ては飛び廻つて、荒野先生や山下君を初め當時の部員諸君の御蔭で何とか型が附いた事なぞ今にして思へば良くやつたものと我乍ら感心してゐます。その他對弘前戰に挨拶をさせられたり、須田少尉の葬儀に小樽で弔辭を讀んだり今考へても冷汗の出る思ひがします。

いくら並べても限りがありません。もつと考へて馬術部十年間の變遷を具体的に記述するのが私の如き立場にあるもの丶爲す可き事とも考へられますが、何分にも時間も無くなり十年間の記憶も薄らいでしまつて容易に纏める事も出來ませんので止むを得ずこんな様な駄文を書き連ねて了ひました。部が年と共に基礎が固まり盛大になるにつけ行事も多くなり、その成果も一段と高大なる事を望まれるやうになり幹事諸君を初め部員諸君の御骨折も大變なことであらうと思はれます。何卒一致協力益々團結を固くして北海道に於ける帝大の馬術部としての特殊の使命達成に邁進され尚一層輝かしき歴史を築き上げられる事を祈つて筆を擱く事に致します。（二五・二・一）

思ひ出す儘に

東園基文

先づ自己紹介する事をお許し願ひます。僕は在部當時は伊達宗文と云ひました。それ故今の姓名ではそんな人は部に居なかつたと云はれる方があるかも知れないので特に舊姓名を名のり出た譯です。

我々の馬術部が早くも創立十周年を迎へると知つてお目出度いと思ふ前にもうそんなになるのかなと、それだけ自分が年をとつた事を忘れて感慨無量と云つた形です。併し考へて見るとその筈です、僕が部を去つてからもう五年餘に成ります。卒業前の一年間を新しく入部さ

れた豫科一年の所謂新部員の方々と一緒に月寒の二十五聯隊に通ひ鎧を揚げて鍛へたのも遂この頃の樣に思へるのにその方々が幾多の輝かしい功績を殘して今は大方學窓を巣立たれて既に實社會に活躍して居られます。僕なども何時の間にか古株の仲間に這入る樣になりました。それでも尙先輩諸氏とか先輩各位等と書かれると何んだか妙に人ごとの樣な氣がして他所々々しさを感じさせられます。何時迄も部と共に成長して行く樣に思へるのです。その點部を愛し部を送り出された方々は必ず御同感の事と思ひます。

近頃嬉しく思つた事。今年の夏インターハイに遠征された選手諸兄が上京されると宿舍より手紙を下さつて、どうか應援に來てほしいと書いてありました。實に懷しい手紙です。是非共聲援したいと思ひ乍らも勤めの都合で行かれなかつたので、自分も眞夏のインターハイに出場して喉がカラ〳〵に乾いて困るのを出場前にレモンの輪切をしやぶつて大變工合が良かつた事を思ひ出して、その方法を日光から手紙でお知せして遙かに成功を祈つて居ると優勝との快報、傳授のレモンも大いに効果的だつたとの由、實に嬉しく感じました。又別に近頃と云ふ譯ではありませんが本科三年の時の新入部員の中には實に熱心な方が多く、その熱心さにほだされたと云ひますか、勵まされてと申しますか、僕も大いに力を入れて仕込むと云つては失禮ですが育てあげるとでも云ふ樣な氣持で勵み合つた連中がその後も熱心に努力された甲斐あつて我々の時代には及びもつかなかつた輝かしい勝利の記錄を殘して行かれる樣子を遙かに承知する時の嬉しさ。本當に感謝したい氣持で一杯です。在部當時の事。僕は本科の一年から入部させて戴いたのですが、その頃一年上級の半澤道郎兄、武田朝男兄、今は故人に成られましたが當時主任をして居られた九鬼誠之助兄、初めて札幌に來て友達も新しく學校にも不慣れの僕を實に暖かく導いて下さいました。翌年主任を仰付かりましたが、どうにか一年間務め遂せたのも實にこの三君並に今も畜産の教室に居られる大先輩の松本久喜兄ー今は先生と申上ぐべきでせうがーの激勵の賜と今以て感謝してゐます。

現在もある事と思ひますが部のペナントを制定したのも當時即ち昭和七年の頃です。あの槍を持つて居る馬上の騎士の姿は實に獨逸の確か「ザンクト・ゲオルグ」と云ふ馬の雜誌だつたと思ひますが、その中から採つたものです。そう云つてペナントの値打に關するならこれは內密にして置きませう。第一回目は三越の本店の運動部で作らせたのですが、注文を受けた番頭さんに「大變シ

ツクリした結構なペナントで」とお世辭を云はれて嬉しくなつたりしたものです。

練習と云へば我々の時代は二十五聯隊が平常の唯一の練習機關です。今もそうとすれば聊か部の爲に嘆かざるを得ませんが、兎に角毎土曜豐平の終點からバスーと云つても小さなフォードの幌型に無理に十人位も詰るのですが―で通ひました。今は又この樣な時局で乘物も不便かも知れませんが、その頃も先輩の言に依れば昔は皆歩いたもので歩くのが建前だとのこと、歸りはよくぶらり〳〵と歩いたものです。新學期は新部員の爲に大變な賑やかさで一頭の馬を三、四人で短時間づゝ乘つて、三、四人がゝりで手入して歸つたものです。少々乘れる人は態々あそこ迄行つて僅かに二十分位しか乘れないのですからぢきいや氣がさしてしまふのですが、それを熱心にやり通した方が往く〳〵は名選手と成つて部をしよつて立つ樣になつてゐます。

合宿は以前も旭川の騎七にお世話になりましたが、その頃は大概の下士官と皆顏なじみで實に愉快でした。馬も下士官のには相當なのが居て、今事變で名譽の戰死をされた須田少尉(當時曹長)の愛馬幌梅號で一米七〇位飛ばして貰つたものです。神宮大會に出場の練習の爲一人で三日間程將校の合同官舍に泊めて戴いた事がありますが、「俺の馬も運動してないから乘つてくれ、俺のも貸してやる。」と云つた風で一日に五頭位乘つては手入をする、夕方宿舍に歸つたが最後全然口をきく相手が居ない、默々として食事をし默々として床をとつて、それでその日一日が暮れると云ふ合宿ならぬ單宿もやりましたが、そんなのは例外で何時もは二十人位兵舍に合宿、下士官の入浴時間に一緒に入浴させて下さるのですが、いゝ氣持になつて流行歌などをガナつて同浴の軍曹殿に「兵に入浴中放歌を禁じてあるので、下士官の入浴時間に歌聲が聞えると工合が惡いから歌を唱ふことは止めてくれ。」と注意されて見れば湯氣の内にもハツキリと「一、入浴中は靜肅を旨とし放歌高笑すべからず」とか云ふ誡に一目瞭然たる掲示があつたのには赤面してしまつた事を未だに忘れません。

同じく騎七で何かの豫選の爲部の人達だけが七名程障碍飛越の競技を行ふと云ふので、一同萬全を期する考へから各自のキロツトの内側にコスメチツクをすりこんで、いざこれで大丈夫と意氣込んだ處その日の審査官である聯隊の某少佐が「競技開始に先だつて一言注意を述るからワシの周圍に集合」と云ふので同少佐を取り圍んだ處、「一時に諸君は皆大層よい香ひがするね。」とあつて一同顏を見合せて只ニヤ〳〵してその場をすごしたが、聯

隊ではあまりよい香は禁物らしい。と云ふ譯でその後はピンヅケ油に轉向しましたが、「オイ俺にもかゞせろ、この匂ひも亦格別だ。」などは今も變らぬ競技を前にしてのハリキツタ内にも樂しい合宿風景ではないかと思ひます。

大變つまらぬ思出を長々と書いてしまひました。何卒不惡お許しを。

終りに我が馬術部の隆盛を祝ひ今後一層の發展を祈ります。

（十四・一二）

回顧記

吉見一郎

思ひ起せば早いものである。馬術部が創立されてから十周年の星霜が流れ去つたとは。

今の自分は恥かしい次第だが殆んど部に關係はして居ない樣なものだ。何故かと言へば昭和十一年學窓を出てより今日迄まる四ケ年の間馬の背とは全く緣を切つた生活であり部とも殆んど浚交渉であつたから。十一年の早春、當時の黑澤部長や松本、半澤の兩先輩、今部の幹事として活躍して居る西村君等の部員に送られて世に出てから直に南洋群島に職を得て赴任したが此處は全く馬の居ない所で僅に驢馬が四五頭居たが日常北海道の偉大なる馬背に親しんで居た自分にはとてもこんな馬に乘る氣はしなかつた。

其の代り南洋には眞黑な牛が澤山居た。原種はシヤムとか言ふが畜産の知識の無い自分にはハツキリしない。牛と水牛との雜種の樣な尻の丸い猛烈に力の强い役牛で從つて獰猛な事も獰猛で每年自分の飼牛に死傷を受ける人數は相當なものであつた。水牛も居た。椰子の葉影の映るリーフの靜な汀に水を浴びて居る姿などはとても素晴しい美しさなものだ。カナカの土人は赤い在來種の牛にカレータをつけてランチョからランチョをバナヽ、セパンマンゴー等の果實を集めて歩いて居る。南洋群島の牛は殆んど身体に毛が無いと言つてよい程滑めらかだ。熱氣の爲だらう。だからこんな所へつれて來ても蠶だとか毛の多い尻尾を持つて居る馬ではとても弱くつて使ひものにならぬらしい。

馬の事でなく牛の事を書いて了つたが兎に角南洋に於ける四ケ年は全く馬に乘る事から緣を切つた生活だつた。昨年の十月都合により南洋から懷しの札幌へまた歸つて來た。これで再び馬にも親しめるし今まで御恩返し

の出來なかつた部に對し聊か外からお盡しする事を得るかと喜んで居た。所が又々突然それも當分出來なくなつてしまつた。それは一昨日の夕方即ち丁度本年度の總會と卒業部員送別會を行ふから來て呉れと言はれて居た二月三日の夕方召集令狀を受取つて應召する事となつたから。

自分が部に入る事となつた動機は自分の意志よりも他人の意志による所であつたらしい。新しい白線の豫科ボーイとなつた頃同クラスに紅顏の美少年が居た。今九州八幡の日本化成工業株式會社に銃後軍需工業の第一線を承つて活躍して居る脇田代子郎君だ。彼と自分とは妙に氣が會つて親しかつた。彼は毎日僕に馬術部に入る事を執拗にすゝめた。夫れは醫學部の解剖室の裏のスケートリンクの方から流れて來る小川の畔のローンの上であつた。殆んど毎日晝食がすむと二人は此處へやつて來て色々話し合つたが彼の熱意は遂に僕を動かして部に入る事となつた。其頃の情景は今でも目に映る美しいものであつた。豫科に入學した許りの誇らしさと、暖い春光にローンの香りもエルムの若葉も烟る樣な幸福に滿ち〳〵て居たから。

部に入つてからは最初札幌愛馬會で少し練習して歩二五に通つた。後には美しいバスと變つたが當時は三四臺の薄汚れた幌馬車が豊平の電車終點と月寒の間を走つて居た。澤山乘ると一人五錢位にしたのでよくこれで通つたものだ。部の生活は樂しいものであつたが何と言つても大きな變化は矢張り滿洲事變及今次支那事變の影響であつたらう。軍の好意によつて居る我部の如き最も大なる影響を直接うけた譯だ。出征による馬匹の減少、歸還による隔離、そして親んだ愛馬が何頭となく再び札幌へは歸つて來なかつた。札幌驛頭に人參を運んで軍馬を送つた事も屢々だつた。其度に練習は困難となつた。部長は高松教授から黑澤教授に變られ、河崎、岩垣、九鬼（今は故き）半澤、伊達（今の東園子）植村、岩橋等の先輩が續々と卒業して行つた。部の活躍は自分の在部中は伊達先輩の選手權獲得を除いては餘り目ざましいものは無かつた樣だ。然し多士齊々が揃つて居たから內部は相當賑かであつた、會合の度に議論百出し幹事の苦心も相當であつたが其度に相談を持込まれる大先輩の松本久喜氏等も相當つらいものであつたらうと今になつて思つて居る。何と言つても長い間部に一番援助をいたゞいて居るのは松本氏と半澤氏だらう。學內に居る關係もあつて萬事相談を持込まれ有形無形共に援助をいたゞいて居るのは全く感謝にたへない。

部の想出は一番愉快だ、札幌へ歸つて第一に訪ねるの

は部の先輩であり何處で會つても勝手な我儘を話す事を得るのは部員であつた連中だ。

一緒に部を出た諸君に高杉直幹、脇田代子郎、大迫明德、滋賀秀明、森山武雄（此二君は醫學部の爲一年あとであるが）の五君が居る。高杉君は今理學部の化學教室に少壯學徒として學術研鑽に餘念なく、脇田代子郎君は青年技師として前述通り九州八幡市の日本化成工業株式會社に多數の職工を指揮して生産擴充に寧日ない。承れば昨年十一月二日華燭の典を擧げられし趣、新家庭の御幸を祈つて止まない。大迫明德君は姫路市の山陽皮革株式會社に勤められ最近は專ら國産ゼラチンの權威として研究努力して居られ既に後繼者も設けられて居る由だから同君の發展は期す可きものあらう。滋賀秀明君は大學病院西川外科に將來刀圭界の重鎭を期待されて活躍して居られる。同君は殊に肛門外科に辣腕を有して居る由だから部員は同君に負ふ所大であらう。森山武雄君は目下南支方面に軍醫少尉として活躍して居られる。南洋に生活した自分は熱帶地の苦勞はよく身に泌て居る。硝煙蠻雨の地、炎熱下にある同君の健闘を祈つて止まない。

以上思出の二、三を綴つたが禿筆拙文徒らに紙面をふさいだのを謝する。最後に昨年十一月末小生結婚にあたりては部より態々祝電をいたゞき感謝にたへない。御禮申述る機會もなく此紙上をかりて御厚禮申上げる次第である。

應召入營の日を目前にひかへて此文を記し得るのもまことに感慨無量である。聊か老兵の傾あるも大いに頑張つて來るつもり。

部長先輩部員其他各位の御厚意を謝すると共に益々部の發展あらん事を祈つて擱筆する。

文中私事に亘る事多きは恐縮にたへず御海容を乞ふ次第なり。

（昭和十五年二月五日召集令を手にせる二日後）

入部時代を顧みて

小田　昇

中學に通つてゐた頃當時盛んであつた小樽乘馬會の連中が颯爽と駈け行くのをあこがれの目を以て見送つてゐた。

昭和八年豫科農類に入學するや丁度部には中學の先輩であつた池内君が豫科三年であつたので早速入部を希望した。

月寒に於ける練習は最初は怖さ半分興味半分で馬場に

於て速歩の練習など落馬しない様に馬上にて大變努力したものだつた。

植村さんがキャプテンで伊達さんも居られた頃だつたので熱心な指導を受け練習はつらかつたが日一日と興味が加はり日曜日などは小樽から平常より早い汽車でやつて來、その頃は馬車が豊平から月寒まであつたが大して早くもないので良くテクついたものだ（歸りには良く餡パンを嚙りつゝ）時には伊達さんの人並外れた鮮やかな手綱裁きの障碍飛越を何時になつたらあんなにうまくなれるだらうかなと感心し乍ら見たものだ。

新入部員も多かつたので何時も三、四回は乘換しなければならなかつた。ある時忠相といふ馬に新入部員が乘り速歩の練習中この馬はよく伸びる反動の高い馬であつたので、ころり振り落されスキー靴を穿いてゐた爲鐙が引掛り馬場を二三周も引ずられ顏、手足、服が泥まみれになつた。私は馬の上から之を眺めどうなる事かと心膽を寒からしめてゐたが馬は直ぐに止り鐙も外れた。人は不思議にも何も怪我をしてゐない。奇蹟と思つた位だつた。馬と云ふ動物は落馬した人を決して踏まうとしないそれは恐怖心の強い天性がある爲に落馬した人をも瞬間に於て之を恐れ避けるのだと云ふ事を如實に感じた。この事があつてから大部新入部員が姿を消した様であつたが、吾々は馬は落馬した人を決して踏まないと云ふ事と同時に落馬は決して怖くない、唯スキー靴の如き鐙に引掛り易い靴などは危險であると云ふ事を強く印象付けられた。練習の爲には月寒迄通はねばならないと云ふ不便もあり落馬など續けると意志の弱いものは部を逃避する様になるのが例年の様であるが、新入部員の確保は部の政策上非常に大切であるから此の點を考へ乘馬前の裝備、馬の配當等にも注意し早く部員相互の親睦を計り漸次興味を增加せしめる様に仕向けるべく上級部員は努力すべきであらう。

秋には紅葉濃き山鼻に班を分けて合宿し愛馬會にて練習した。早朝霜を踏んで圓山々麓で鐙を外せ、速歩！と脇田、小村（鐙外しの神）先輩に鍛えられたものだが初めて障碍飛越野外騎乘を練習し愈々面白くなり上達もして來た様であつた。

第一回部内大會が間もなく月寒練兵場に開催され小規模の様ではあつたが、この時始めて連續障碍を落ちかけては飛び、賞められた〳〵事を思ひ浮べ苦笑を禁じ得ない。

雪が降つても飽きずに馬に乘りたさに寒い中を朝早く月寒へ出掛けた。冬になると部員は練習に出るものも少くなり時にはたつた一人の事さへあり高江（教官）さんと二人で馬場の雪に輪乘りの跡を深くつけ指導を受けた事

もある。

冬休みも小樽のある病院の乘馬をお借りして大勒なしで市内を駈け歩き意氣揚々と乘り廻したが初荷の日などあの荷馬橇の賑やかな囃子に驚いて危ふく落馬しかけ青くなつた事もいゝ想出になつてゐる。

春期の騎七に於ける合宿に參加し、耳のちぎれそうな朝も馬手入をやり覆馬場で鐙を外したり高い障碍を飛ばせられ小林大尉に絞られた記憶がある、支那事變當初戰死された須田少尉は當時准尉で吾々の指導もして下さつたし夜はするめと一升瓶を持つて來られ滿洲の土產話を愉快に聞かせて下さつたり騎兵の活躍を彷彿たらしめて下さつたのであつたが、おしくも壯烈なる戰死をされ哀悼の意又新なものがあります。

豫科二年の秋頃迄は落馬は一度もしなかつたが裸馬で障碍をやつたり鐙を外して無茶をする樣になり、或は種馬から畜產の驢馬から等落馬の回數が漸次增して來た。一度は背中に寫眞機を負つてゐて背中から落ちて、うんとばかり呼吸が一時止つた事もあり、人馬轉倒で頭を打つたり脚を下敷かれたりしたが大きな怪我は幸になく學校を出る迄、いや卒業した現在も尙職掌柄馬を相手として暮す樣になつたが馬を愛し馬に乘り心身の鍛練に勉めてゐる事は馬の好きな人には羨まれてゐる樣な次第である。

馬術部に六年間もお世話になり、其の間種々の競技會對抗戰に出場しスリルと若い日の感激を味ひ部內大會、合宿、遠乘會、映畫會、懇親會等々馬術部に於ける生活は學生々活の反面でもあつて想出も多く終生樂しき回顧の糧として永く存する事と思ひます。

終りに臨み一緒に入部し共に練習を勵まし合ひ努力して來た石川正吉君が可惜有爲の身を病魔の爲不歸の人となりたゞに我部の優秀なる先輩を失つたのみでなく非常時下帝國の爲に愛惜の情に不堪謹みて兄の冥福を祈るものである、兄とは豫科を代表し旭川の大會に、仙臺の東北騎乘大會等に出場し、第二回帝大聯盟戰には優秀なる腕前を發揮され東北大に七點の差にて破れ優勝を逸したとは云へ、俊英を誇る東大を一蹴し京大を輕く破り、堂々第二位を獲得した共に戰つた最後の試合もつい最近の樣に想ひ出されるのである。

輝かしき紀元二千六百年は訪れ國威愈々燦とする時我が部に於て十年誌を編纂せんとする好運に惠まれたり宜しく先人の踏みし偉跡を尋ね普く認識すべきである。本年度は幸にしてインターハイに活躍し、涙ぐましい奮鬪の結果輝く榮冠を勝ち得先輩として觀戰し得た喜びは筆舌に盡し難いものがあり又全日本學生選手權大會には菅

間君が優勝される等北大馬術部の名を天下に高からしめ益々光輝ある歴史を創りつゝあるは部長始め諸先輩部員諸君の絶大なる御努力御後援に依るものにして我々は倶に喜び、誇るのである。茲に愈々吾が部の隆昌と皆様の御健康をお祈りして筆を擱く。

（十五、一、七）

前進後退

西村雅吉

「昔はこうであつたが今の部員は—」と御老人ならずとも兎角先輩は云ひたがる。ペナントを四、五日前に戴いた僕も一應先輩氣取りに過去六年間の部員生活を顧みて六年間に於ける今昔を比較してみたい。勿論僕個人の偏見が大いに入つてゐることは先づ第一に斷つておかなければならない。

脇田主任時代の「フアイン、チング」と滋賀、山下主任時代の「ガンバレー」は共に當時部員間には盛んに用ひられた言葉であるが、「フアイン、チング」なる言葉は脇田さんが生みの親らしい、僕が豫科二年時代、しと〳〵と細雨に煙つてゐる朝の畜産馬場で仙臺遠征のための練習をしてゐた時、共に遠征に行くことになつてゐて發病のため止められた脇田さんが熱があるにも拘らず馬場にあらはれ僕達を集めて、雨の中にレインコートの襟を立て乍ら「フアイン、チングねーぞ」と激勵された時の光景は後になつて思ひ出す毎に、僕にフアイトをつけてくれた。「ガンバレー」をよく用ひたのは山下、前川さんであつた様だ。然し鐙外せなどでふら〳〵になつて頑張つてゐる時に下に降りて見てゐる者から決して鼓舞的なアクセントではなく「ガンバレー」とやられる位い無責任な言葉にきこえ、がつかりすることはなかつたが、それを面白がつて僕達もよく云つては、くさらしあつた。くさる所に「この野郎！」と云ふ頑張りも出て來るのであつた。

「フアイン、チング」と云ひ「ガンバレー」と云ひ部設立數年を經て部の基礎も固まり、外への發展時代に入つた時の言葉ではなかつたらうか。そのあとをうけた池内、西村主任時代には何等斯の如き、モツトーとも云へる言葉がなかつた。それは完成を意味してゐるのだらうか、それとも沈滯であらうか。完成でも沈滯でもなく部は絶えず前進してゐる、そしてその前進の方向が變るべき轉換期に當つてゐて、轉換期なるが故に外見上の無風狀態がつゞいてゐるのだと僕は考へたい。と云つても自分の無

能を誤魔化すつもりではない。

「ファインチング」「ガンバレー」が實を結んで昨年度のインターハイ、選手權優勝の素晴らしさになつた。外への發展は充分とは云へないだらうが、今や外への發展時代から內への充實時代に入るべき時代であり、すでに入りつゝあることも感ぜられる。今年か來年には何等かの形でそれがあらはれ「ファインチング」「ガンバレー」に對する、或ひは更に進んで綜合的な言葉があらはれてくるだらうことを期待してゐる。

近頃の部員に意氣なしとの聲を聞く、然り。先輩時代の色々の話を聞くとあらゆる方面に意氣正に盛ん、隨分華やかであつた樣である。近頃の部員に意氣なしとは、近頃の學生に意氣なしと云ふにその據つて來る所を一にしてゐる樣に思ふ。「時代が變つたのさ」と云つてしまへばそれまでである。主任を決定するにしても前は「吾立たずんば」の意氣と熱に燃える人が多く、その中から一人を選ぶことは大變苦勞したらしい。それがこの二、三年は低頭平身、三拜九拜强引の一手で押しつけねば主任は生れない、之又隨分と苦勞である。僕の豫科の時はどこかへ遠征があると「技術に優劣はないが今度は誰々に行つてもらひます」と妙な言譯けを云はれたり又は正々堂々と豫選をして、選らばれて遠征に行くと云ふ氣持ちになれた。近頃は何か試合があるとなると果してメンバーが揃ふかどうかゞ先づ心配である。之等のことは昔と今との違ひと云ふのではなくて、その時々の部員の數にもよることかも知れないが之等も近頃は意氣がないと云はれる所のものゝ一つなのであらう。

部員の融和、必要以上の上級下級生の意識をなくする、幹事だけの部でなく部員全体の部にする、と云つた樣なことにこの二、三年は力が注がれて來てゐる。理想にはまだ〳〵であるが一歩々々近づいてゐる樣に思ふ。昨年十二月の合宿の樣に、豫科、實科生が今年卒業すると云ふ本科生を蒲團蒸ししたり、雪の中に投げ入れたり和氣靄々とふざけることが數年前には可能だつたらうか。蒲團蒸しとは子供くさいが一例である。

前と今と比較すれば未だ多くあるが、昔と今と云つても兩者は對立してゐるものでなく、僕の樣な無能なものでも主任として少しでも部を前進させることを得たとすれば之は全く僕以前の先輩が培つてくれた傳統の力によるものである。

（十五、二、五）

櫻星會馬術部設立のことなど

小林誠平

「櫻星會馬術部設立」此の言葉が先輩によつて具体的に唱へ初められてから、數へ見れば早や四ケ年の月日は過ぎ去つてしまつてゐる。四年間!!唯單に四年間と云つても非常に短いと感ずることもあるけれども我々櫻星會馬術部設立を希望してゐた者にとつてはそれは長い〳〵月日であつた。顧れば昭和十二年西村氏達によつて最初に役員會に提出されてから、昭和十三年石井、山本、兒玉の諸氏により、昭和十四年永倉、半澤、服部、關の諸氏によつて毎年々々提出されながら出席役員の三分の二の賛成を得ず遂に否決の憂目を見なければならなかつたとは。趣意はほとんど全役員に徹底しそれには賛成されてゐながらも實際の投票に於て否決されやうとは。その原因を思へば、經費の問題に於て否決されるとは我々にとつてあまりと云へばあまりにも殘念であつた。昭和十四年度福本、岡田、山根、小林、豫科幹事となつてから常に思ひ出され互ひに語り合ふことにはインターハイ優勝と櫻星會馬術設立のことであつた。

十四年の暮から越えて昭和十五年、我々も役員會に「櫻星會馬術部設立の件」を提出すべく適當なる方法以上には何等變つたこともなかつた。二月八日役員會には出席者六十二名によつて、午後四時十五分開會せられ、先づ總務より彼等の立場を說明、新部設立の件について積極的に賛成の意を表明した。併し豫算の件については、當分の間豫算は請求しないし又請求する場合は役員會に附することを附加し、我々としてもそれは現在の櫻星會としては止むを得ないことゝして認めた。趣意書朗讀、福本の種々の說明の後、高岡教授、東教授等經濟問題其の他につき二、三の質問あり投票が行はれる。同時に提出された射擊部、音樂部の說明、投票の後開票される。我々の胸に唯賛成の三分の二を越えてゐることを願ふのみ。結果は賛成五十票不賛成十票無効一票で櫻星會馬術部は設立された。時に七時三十八分。

先輩達による努力は時來り、文武會馬術部成つて十年目、二千六百年の光輝ある年に美しくも華やかに實を結んだ。櫻星會の一部員として或はインターハイに、或は其の他に全櫻星會員の後援の下に戰へる日は遂に來た。我々の頭上には櫻と星の旗が有る。我々の勝利の喜

びは櫻星會員の喜びである。併し我々は、今日のあることは先輩諸氏の苦心と指導の結果であることを決して忘れない。

インターハイ練習雜記

夏の騎七合宿練習の終了後我々岡田、山根、小林（福本は都合により先に離札）は札幌に於て岡田先生御指導の下にインターハイのため猛練習を開始した。それは丁度七月二十一、二日頃だつた。

ポプラの葉は強い日光の下でチカ／＼と反射し、ローンには陽炎が立昇つてエルムの木立の間を驅け昇つて行く。空には夏雲がむく／＼とのしかゝる樣にわいてゐる。九時練習開始。先づ「鐘を揚げ。」それより体の柔軟の爲に停止常歩速歩に於ける馬上体操、各種馬場運動、時間にして一時間半位のものであるけれどもその間、一瞬も他に心をそらす事は出來ない。人も馬も汗ぐつしより。眼鏡は拭いても拭いても直ぐあとから汗でくもつてしまふ。顏や頸には白い粉が浮く。小蔥の後障碍飛越。人の聲も何んとなく壁の向ふからの樣に聞えて來る。一日、二日、三日、……併し三人の中、誰も「つかれた」とも「つらい」とも云はない。三人の心は唯インターハイ優勝といふ一つの目的に向つてガツチリと結合してゐた。一人が「おい」と云へば他の二人が「おい」と云ふ。それ以上の何等の語も不要だつた。唯〝勝つのだ〟といふ聲を三人共同じ樣に心の内に聞いてゐた。苦しい練習も固い決心を以つて目的に向へばその苦しさも半減する。否半減どころではない、千分の一にもなる。今は苦しいあの練習も樂しい忘れられない思ひ出の一つとなつて留まつてゐる。

一日の練習の終りは正午頃であつた。

練習が終ると馬を小川の中に入れて洗ひみがき上げる。そして乾き上るまで手に手に鎌を持ち、車を引いて馬の爲に草をかりに出かける。さく／＼と綠の草をかる新鮮な感じ、つかれ果てた後に於ける此の勞働は新鮮さを心の中に送り込んでくれる。むつとする草の香、それは何と人の心をやはらげてくれる事だらう。

練習後の樂しみはもう一つある。乾き切つたのどをうるほすのに二、三十本のアイスキャンデーを仕入れて來ては寢そべりながら、日光浴をして食べるのである。此んなにも美味に思つたのは此の時が初めてゞあつた。

此の樣な練習中毎日缺かす事なく出て來られて、我々と一緒になつて馬にも乘り草もかり、又はげまして下さつた下條さんに對して我々は何と御禮してよいかわからない。我々がインターハイに於て優勝の榮冠を得たのも下條さんにどの位負ふてゐるかわからない。我々の喜び

は喜んでくれ、我々の苦しみはなぐさめてくれる人が居らなかつたら我々の練習も幾倍つらかつたか想像もつかない。唯感謝の念あるのみ。

約十日間の練習によつて我々が技術的に大なる進歩を爲したかどうかわからない。が併し我々はより尊い或物を得た。それは精神的團結である。精神的團結こそ技術の上であることを私は疑はない。大きな目的の前には自分を省みるいと間もない。唯お互に助け合つて實行あるのみだ。部に入つて三年目にして初めて私は此の精神的の團結を知ることを得た。

七月三十日午前九時札幌發急行にて必勝を期し、最善を爲すことを誓つて上京の途につく。部長初め諸先輩が見送りに來られた。

連絡船にて山根、岡田と後から後からとあふれ出づる感激に必勝を誓つて寮歌を聲のかぎりに歌ひつゞけてゐた。月光はきら〳〵と波にくだけ、遙かの山々はぼーつとかすんで見える。歌は波濤をつたはつて札幌にもとゞけとひゞいて行く、船は一路青森へと向ふ。

實科部員として

熊澤　洸

馬術部十年史と云ふ光輝ある貴重なしかも錚々たる人々が寄稿された中に身の程も考へずに厚顏しくも何か書んとする無禮、平に御容赦を願ひます。

馬術部でも實科の事は餘り書かれて居らぬ樣ですから實科の方の紹介旁々少々駄辯を書かせて頂きます。

實科と云つても過去から現在に到る迄文武會馬術部に入つて練習するのは全部が農學實科の學生と云つても差支へないと思ひます。大体何時頃から入つたものかは、無責任ながら筆者の餘り良くは解らぬものですが、最近の四、五年は大体一年に一人位の割で卒業して居る樣です。

それで此は講義の中にあつたのですが無花果のあの灰色の幹を良く見ると處々に暗褐色の、芽と云ふよりは疣を小さくした樣なものが輪狀に着いて居るでせう。大抵の人なら「ハハーン芽見たいなものがあるナ。」位で看過してしまふのですが、之をそのまゝで放置したならば、春が來ようが夏が來ようが、枝一本、葉半枚すらも出て

は來ないのです。處が、此の芽見たいなものゝ上にナイフでゞも一寸切目を入れて御覽なさい、やがて春が來ればその疣の樣な芽が膨らんで本當の芽となり、其處から枝も出、葉も出て翌年は結實をさへ見る事が出來るでせう。

實科の方も丁度此の樣なもので（此は先輩諸兄に對し無禮な言葉かも知れませんが）大部以前から實科學生の間に馬事熱があつた樣です、ですが、誰も無花果の木に入れたと同じ樣な切目を實科に入れて下さつた方が無かつた樣です。（或は入れて下さつた方があつても實科の方で芽を出さなかつたのかも知れませんが。）それで餘程心臓の強い人間か、さもなければ餘程の馬狂人の連中（之は失禮）から一人、二人と實科の中から出て行つて本科、豫科の人々と共に練習して居つたものと思はれます。

處が、此處に思ひ切つて疣から無花果の實を得んとしたかどうかは分りませんが、兎に角切り目を入れて下さつた方が居られます。それは昭和十三年度主任池内武夫先輩で、色々と實科のために便宜を計つて下され、ともすれば練習サボリ勝ちな實科部員を鞭と拍車で追ひ込んで下さつたので、昭和十三年度にやつと、實科の所謂馬狂人七、八名の確かな結合を見るに到つたのです。又十三年度實科幹事の富樫稔先輩（今年旭川騎七入營）も池内主任と良く力を合はせて後輩を指導され、今迄は掘立小屋の觀を呈した馬術部内の實科部員もやつと此處に確固たる土臺を礎いた譯であります。部員七、八名と言ふと「なんだ、そればかりの小人數」と申されるかも知れませんが、農學實科全体で百名足らずの中からの七、八名ですから割合から云つてもそんなに少くは無い事を一言辯解させて頂きます。

以上の如く昭和十三年度の實科馬術部は言はゞ創業時代で、もつぱら内容充實と云ふ點に力を入れて、大いに實科内への馬事思想の普及、部員の獲得、及び練習にも努力した次第です。

昭和十四年度も西村主任並びに幹事諸兄の理解ある御指導と御鞭撻に依り部員は増々増加し、十數名を得る事が出來、大いに技術の向上發展に努めた次第ですが、昭和十四年五月の第五回札幌乘馬大會に豫科、實科對抗障碍を行つた結果、之は相當の差で我々が敗れました。我々とても初めての試合、しかも三年間充分練習に練習を重ねてインターハイの榮冠を目指す（此は實現したのですが）豫科軍に對抗した我が軍を見るに、その内容いとも貧弱にして、三年間練習した者は僅に一人、殘りは一年か二年の練習よりして居ないのですから、その勝敗は

自ら明白です。ですが我々にも、小學讀本にあつたドングリの「今に見て居ろ僕だつて……」の意氣をもつて進み、良い意味で豫科と對抗し、やがては共に榮冠を爭ふ時も來るのだと固く信ずるものです。

まあ、大体此の様な譯で、未だ實科部員の技術未熟なる事を悟り、遠征、試合等の計畫も我々の中にあつて略々具体化したことすらあつたのですが、今年度は更に一年間技を磨く事として來た次第です。

兎に角馬術部内の實科は基礎が固つてから僅に二年、無花果の木ならば二年目には實も結びませうが、事複雜怪奇なる人間の事ですから二年位では輝しき記錄や成績を殘す事は不可能事に近く、寧ろ將來に待つ事多しと考へる次第です。

オタマジャクシにやつと手と足が生えた様な此の實科一寸した流れにも流されて何處へ消えてしまふか解らない様な此の實科を一人前に健全に育て上げるには未だ〳〵各方面の御援助を要するのです。

何卒此の生れ立ての赤ん坊の如き我々を可然御指導下さる様此の光輝ある十年誌の一頁を拜借してお願ひ致します。

（十五、二）

對東北定期戦々結表

回數	日時	場所	北大	東北大	勝
1	昭和 6.12.27	仙臺騎兵第二聯隊	永松四郎 武田朝男 九鬼誠之助 伊達宗文 藤原正武		東北大
2	昭和 7.8.18	旭川騎兵第七聯隊	九鬼誠之助 伊達宗文 本田恒康 植村勘一		東北大
3	昭和 8.12.25	仙臺市追廻シ練兵場	伊達宗文 滋賀秀明 森山武雄 大迫明德 本田恒康		北大
4	昭和 9.9.24	旭川騎兵第七聯隊	高杉直幹 脇田代子郎 大迫明德 吉見一郎 森山武夫	宮地龍太郎 稲垣實 井田道三郎 増田孝 佐藤光雄	北大
5	昭和 10.9.4	旭川騎兵第七聯隊	吉見一郎 大迫明德 小村達夫 石井昌長 前川靜彌	宮川顯二 渡邊英一 佐藤光雄 井田道三郎 大山謙介	北大
6	昭和 11.9.6	仙臺宮城野原	滋賀秀明 下平正亮 松悌 高井久芳 桶本勝登 石井昌長	大山謙介 宮川顯二 渡邊英一 佐藤光雄 松岡正雄 佐藤洋	北大
7	昭和 12.7.23	旭川騎兵第七聯隊	前川靜彌 高井久芳 石井昌長 山下正亮 池内武夫 小田昇	増田孝 宮川顯二 佐藤洋 時枝俊象 曾根博 松岡正雄	東北大
8	昭和 13.8.19	旭川騎兵第七聯隊	小田昇 菅間威 西村雅吉 山本義則 池内武夫	佐藤洋 島村正雄 倉田俊秀 安永茂 吉田秀夫	北大
9	昭和 14.7.13	旭川騎兵第七聯隊	山本義則 石井條和彦 下菅間親 西村雅威 福光幸吉	澁野基行 矢部清壽 安永俊茂 倉田村秀 島吉田秀雄	北大

帝大聯盟戰々績表

<table>
<tr><th>回數</th><th>時日</th><th>場所</th><th>選手名</th><th>戰績</th><th>摘要</th></tr>
<tr><td>1</td><td>昭和12.8.4</td><td>學習院馬場</td><td>松平 悌
桐本 勝登
高井 久芳
山下 正亮
石川 正吉
石井 昌長</td><td>北大 ─┐
東大 ─┘─北大 ─┐
東北 ─┐ │ ─北大
京大 ─┘─京大 ─┘</td><td>北大優勝
東久邇宮盃拜受
一校5名
障碍及馬場馬術
京城大不參加</td></tr>
<tr><td>2</td><td>昭和13.7.6</td><td>仙臺宮城野原</td><td>池內 武夫
小田 昇
菅間 威
石川 正吉
下條 親
西村 雅吉
石井 和彥
山本 義則
竹中 哲夫</td><td>リーグ戰
<table><tr><th></th><th>北大</th><th>東大</th><th>京大</th><th>東北</th><th>勝數</th></tr><tr><td>北大</td><td>＼</td><td>○</td><td>○</td><td>×</td><td>2</td></tr><tr><td>東大</td><td>×</td><td>＼</td><td>○</td><td>×</td><td>1</td></tr><tr><td>京大</td><td>×</td><td>×</td><td>＼</td><td>×</td><td>0</td></tr><tr><td>東北</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>＼</td><td>3</td></tr></table>1位 東北 2位 北大
3位 東大 4位 京大</td><td>障碍飛越
一校
京城大不參加</td></tr>
<tr><td>3</td><td>昭和14.7.9</td><td>旭川騎七</td><td>西村 雅吉
山本 義則
永倉 寛
下條 親
菅間 威
石井 和彥
福光 幸彥
中尾 敦司</td><td>リーグ戰
<table><tr><th></th><th>北大</th><th>東大</th><th>名大</th><th>東北</th><th>勝數</th></tr><tr><td>北大</td><td>＼</td><td>×</td><td>○</td><td>○</td><td>2</td></tr><tr><td>東大</td><td>○</td><td>＼</td><td>○</td><td>○</td><td>3</td></tr><tr><td>名大</td><td>×</td><td>×</td><td>＼</td><td>○</td><td>1</td></tr><tr><td>東北</td><td>×</td><td>×</td><td>×</td><td>＼</td><td>0</td></tr></table>1位 東大 2位 北大
3位 名大 4位 東北</td><td>障碍飛越
一校6名
京大，京城大，不參加</td></tr>
</table>

インターハイ戰績表

回數	戰績	日時	場所	選手名	摘要
7	2位	昭和 5. 7	陸大	藤原正武 加藤英夫 岩橋歸一 本田桓康	1位 學習院 北大豫科初出場 參加校數 20
8	4位	昭和 6.7.26	陸大	本田桓康 小笠原義顯 植村勘一	1位 學習院 參加校數 18
9	6位	昭和 7.7.31	陸士河田町馬場	臨田代子郎 高杉直幹 小笠原義顯 滋賀秀明	1位 廣島 參加校數 21
10	17位	昭和 8.7.23	陸大	池內武夫 澁谷周平 佐藤弘隆	1位 二高 參加校數 21
11	8位	昭和 9.7.22	陸大	小村達夫 前川靜彌 石井昌長	1位 一高 參加校數 24
12	13位	昭和 10.7.21	陸大	石川正吉 西村雅吉 小池榮一	1位 成城 參加校數 25
13	3位	昭和 11.7.19	陸大	石川正吉 小池榮一 永田敏雄 菅間威(補缺)	1位 一高 參加校數 24
14	6位	昭和 12.7.17～18	陸大	山本義則 石井和彥 兒玉堅造 永倉寬(補缺)	1位 成城 參加校數 24
15	5位	昭和13.7.30～31	陸大	永倉寬 福本途夫 岡田光夫 小林誠平	1位 成蹊 參加校數 25
16	優勝	昭和14.8.5～6	陸大	福本途夫 岡田光夫 小林誠平 山根乙彥 平井宏知(補缺)	1位 北大豫科 參加校數 26

モノグラム贈呈及授與者名簿

番號	氏名	
贈	中村虎太郎	（乘馬會々長）
贈	大塚貞次郎	（乘馬會副會長）
1	澤田鶴松	
2	平山常介	
3	眞鍋雅彦	
4	中野友二郎	
5	中谷勝紀	
6	三谷秋三	（舊姓河崎）
7	松本久喜	
8	岩垣泰弘	
9	酒井寛一	
10	藤井金太郎	
11	九鬼誠之助	
12	武田朝男	
13	半澤道郎	
	以上 北大乘馬會	
14	永松四郎	（昭和五年）
15	藤原正武	（同　　）（退部）
16	岩橋歸一	（同　　）
17	加藤秀夫	（同　　）
18	愛甲慶壽	（同　　）
19	東園基文	（舊姓　伊達宗文）（昭和七年）
20	本田桓康	（昭和七年）（退部）
贈	永井一夫	（第一代部長）（昭和七・五・七）
21	植村勘一	（昭和七・五・七）
22	小笠原義顯	（同　　）
贈	杉本一也	（文武會庶務）（昭和七・六・二）
23	脇田代子郎	（昭和八・四・二五）
24	高杉直幹	（同　　）
25	吉見一郎	（同　　）
26	滋賀秀明	（同　　）
贈	高松正信	（第二代部長）（昭和九・五・五）
27	森山武雄	（昭和九・五・五）
28	澁谷周平	（同　　）（退部）
29	大迫明德	（同　　）
30	福光幸彦	（昭和一〇・五・三）
31	前川靜彌	（同　　）
32	山下正亮	（同　　）
33	石井昌長	（同　　）
34	小林達夫	（同　　）
35	高井久芳	（昭和一一・五・二）
36	桶本勝登	（同　　）
37	石川正吉	（同　　）
贈	黒澤亮助	（第三代部長）（昭和一一・九・一六）

38 松平　悌（昭和一二・四・二七）

39 池内武夫（同　）

40 小田　昇（同　）

贈 荒野寅雄（顧問）（昭和一三・一・二二）

41 西村雅吉（和昭一三・一・二二）

42 菅間　威（同　）

43 永田敏雄（同　）

44 小池榮一（同　）

45 下條　親（昭和一四・四）

46 中尾敦司（同　）

馬術部ペナント贈呈者名簿

氏名	部科別	ペナント年號	卒業年次	贈呈年月日
永松四郎	農、畜(一)	二五九三	昭和七年	七・四・二四
九鬼誠之助	農、化	同	昭和八年	八・一・二六
半澤道郎	理、化	同	同	同
武田朝男	農、畜(二)	同	同	同
伊達宗文	農、農	二五九四	昭和九年	九・二・一
植村勘一	農、畜(一)	二五九五	昭和十年	十一・二・四
高杉直幹	理、化	二五九六	昭和十一年	十一・一・二三
脇田代子郎	農、化	同	同	同
吉見一郎	農、經	同	同	同
大迫明德	理、化	同	同	同
滋賀秀明	醫	二五九七	昭和十二年	十二・一・二二
森山武雄	醫	同	同	同
松本久喜	先輩(農畜)(二)	二五九八	昭和六年	十三・一
山下正亮	農、畜(二)	同	昭和十三年	十三・一・二二
前川靜彌	理、化	同	同	同
小村達夫	農、生	同	同	同
高井久芳	農、畜(二)	同	同	同
石井昌長	農、化	同	同	同
桶本勝登	農、經	同	同	同
松平　悌	農、農	同	同	同
黑澤亮助	第三代部長	二五九九		一四・一・二五
池内武夫	農、畜(二)	同	昭和十四年	一四・一・二五
小田　昇	農、畜(二)	同	同	一四・一・二五
福光幸彥	理、植	同	同	同
西村雅吉	理、化	二六〇〇	昭和十五年	一五・二・三
菅間　威	農、畜(二)	同	同	同
下條　親	農、畜(一)	同	同	同
中尾敦司	工、鑛	同	同	同

編輯後記

文武會馬術部が出來てから十年になり、且は全日本學生馬術選手權優勝、全國高等學校馬術競技に優勝と空前の成果を記念して「十年誌」を作らうとの話しが出て、部長のお宅へ先輩、部員がお伺ひして相談し、愈々「十年誌」を作ることになつたのが昨年十一月上旬でした。段々と期日もおくれ、原稿をお願ひした皆様にも非常に短期日間に御無理を願つたことを深くお詫び申上げます。

表紙の題字を心よく書いていたゞきました今總長閣下の御厚意を深く感謝致しますと共に原稿を戴きました伊藤理事長、歴代部長始め先輩、部員の方々に謝意を表します。

頁數も少く、私の努力も足りなくて立派なものは出來ませんでしたが、この「十年誌」が部の過去を整理し、私達今の部員に尊い過去の建設の歴史を敎へ、先輩諸兄には苦闘の、且はなつかしい思ひ出とならんことを。

編輯に當つて御指導をいたゞいた太秦部長、松本先輩に心からお禮申上げます。直接事に當つて下さつた半澤先輩、部員の福本、熊澤兩君の御盡力には感謝に充分な言葉もありません。（西村記）

昭和十五年三月十五日印刷
昭和十五年三月廿五日發行

編輯者　北海道帝國大學文武會馬術部　西村雅吉

印刷者　札幌市南二條西六丁目三番地　山藤國八

印刷所　札幌市南二條西六丁目三番地　山藤印刷合資會社　電話二十六番

發行所　北海道帝國大學文武會馬術部